

ヨハニス

忍バズ忍、最後ノ七日間

さよなら

雨孔雀

イラスト
竹立久



ヨハニス

さよなら

雨孔雀

イラスト
竹立久

忍バズ忍、最後ノ七日間





わたしは忍になることを諦めました。
今のわたしはショッピング店員であり、
それ以外に何も取り柄がない普通の人なんです。

あのとき感じた温もりを忘れたことはない

同時にシャッターも切られてしまい、写真にはめいいっぱいの笑顔を浮かべるアーデルちゃん。笑いが堪えきれないわたしが映っているんだと思う。

現像されるのが楽しみだ。



～ 目次 ～

- 6 Day1 アーデルちゃんに似合う花
- 26 Day2 忍ぶ者と占う者
- 54 Day3 Hydroperish
- 78 Day4 成層圏からの挑戦状
- 90 Day5 普通の女の子佐月マリ
- 150 Day6 オペレーション・ポラ里斯
- 182 Day7 嵐の前の
- 198 Day8 滅びゆく樹海ときみの背中
- 276 Day9 その時、ショップ店員は言った
- 312 エピローグ

さよならヨハニス　～忍バズ忍、最後ノ七日間～

※この本はヘブンバーンズレッドの非公式二次創作本になります。
公式とは一切関係ありません。

また原作の「4章後編」「君に読む憧れ」「気高く優い者たち」「Letters on The Back」
これらの要素が入っております。ネタバレ等含みますのでご了承ください。

（Day 1）アーデルちゃんに似合う花

ミンミンゼミが鳴いている。

31Aがスカルフエザーを討伐してから何日か経つて、本格的に夏が始まつたことに気づかされた。

セラフ部隊に抜擢されて最初の夏。

去年までのわたしは、この基地内でショッピング店員として働いていただけで、特に交流もなく、ただお店とお店を行き来するだけの日々を過ごしていた。

軍に必要とされていて、忙しいながらも悪くない日々を送っていたかのように思える。

セラフ部隊の活躍を見るばかりで代わり映えしない日々とも言えたような気もした。

それが今ではわたしもセラフ部隊として、31Cの一員としてみんなと一緒に戦うことになつて。

そして――。

「佐月殿。今日も手伝いに来たでゴザルよ」

アーデルちゃんという、心の拠り所に出会うことができた。

※

『31C 総員。直ちに司令官室へ集合』

基地内に響いたその放送を受けて、わたしはアーデルちゃんと一緒に足を運ばせた。司令官室には星羅ちゃんが既にいて、わたしたちは二番目三番目といったところだ。遅れてイヴアールちゃんとぶんちゃんが。最後に巫呼ちゃんが入ってきた。

31Cはこれで全員。毎日同じ部屋で命を共にする仲間だ。

手塚司令官は、人が揃つたことを目視で確認したのちにまばたきを一回。イヴアールちゃんを中心に全員を見渡した。

「突然で申し訳ないのだけど、31Cに新しくお願ひしたいことがあるの」

「こんな暑い中、私たちに何をさせようってわけ……」

まだ朝だというのにイヴアールちゃんは疲れた顔をしていた。

無理もないと思う。

何せ今日も変わらず熱波が押し寄せてきている。ここ数日は三十度越えのムシムシした気候が続いている、軍の方々も何人か熱中症で倒れたとの報告があつたらしい。

そんな中、イヴアールちゃんは部隊長としての責務を果たすべく、訓練を重ねつつぶんちゃんの遊びにも付き合つたりもしている。つまり、夏バテの可能性大といつたところ。部隊長として最大限の力が発揮できないであろうときに、司令官は何を命じてくるのか。

「今回、31Cには国道一号の復旧任務についてもらいます」

「国道一号？ なんたって急に？」

国道一号というと、東京から静岡、愛知を通つて大阪へと至る道。それを復旧させるといふことがどれだけの規模で時間がかかることなのかは計り知れない。

わたしたちは一斉に目を合わせた。

「この前、31Aが威力偵察を行つたおかげで琵琶湖までの安全性が確認されたでしょう？ そのことを受けてここから先、関西の奪還作戦が本格的になつていくことから物資の調達ルートをもう一つ確保しておきたいの」

「確かに国道一号であればキャンサーが苦手としている海にも近いですし、松本地点を経由するよりかは安全かもしれませんね」

さらに、松本拠点を経由すると山々を乗り越えていく必要があるためにヘリが必須になつてくる。トンネルやら高速道路の復旧をさせれば車でも運搬が可能になるかもしれないけども、崖崩れや橋が壊れていることを考えると、多少時間がかかるとしても下道を使っての移動をできるようにした方がいいと判断したのかもしれない。

「しかし、それを行うのであれば富士から先の威力偵察も必要ではゴザらぬか？」

アーデルちゃんの指摘は最もだ。

31Aが愛知の北側から名古屋までの偵察を終えたのはいいものの、静岡の富士から先の

浜松、豊橋、岡崎の辺りは足を運んでもらう。国道一号線を復旧させるとなれば、こちらの安全確保は必要不可欠だ。

「いろいろ考えはしたもの、さすがの司令部も考えなしにいるわけではないようで、威力偵察については31Aに名古屋方面から進めてもらっているわ。明日には帰ってくる」こっちの情報が遅いだけだった。聞いたアーデルちゃんが頬を搔く。

向こうの話を聞くに、今のところは特に問題はないみたいで、順調のこと。危険がないのは何よりだと思う。

「要するに、富士までの道のりは必ずしも安全とは限らない。そのため31Cには、名古屋までのルートを最低限車が通れるようにしてもらう。とはいっても、これに関しては軍の護衛くらいなのだけど」

「山脇様。さつきからこやつは何を言っているでゲスか？」

「難しいことを言っているね。後で説明してあげるから今は大人しくしているんだよ」

ぶんちゃんとイヴ・アールちゃんのやり取りを目にして、司令官がため息にも似つかない嘆息をする。

「単純な話、軍の護衛をする。キャンサーと出くわしたら討伐する。たったそれだけ。

「ただ、一つだけ気を付けてほしいことがあるの」司令官の切り出しに、全員が身構えた。

「富士周辺で統率が取れているとみられているキャンサーが出現した」
 「……それは国道の復旧どころの話ではないのでは？」

星羅ちゃんの言う通りで、統率が取れているキャンサーの存在はまとめ役のキャンサーがいることを示している。

フラットハンドやスカルフエザーほどの強敵はそうそういないかも知れないと、ハブキンサーというだけで身構えてしまうわたしがいた。それはきっと、イヴアールちゃんや他のみんなだつてそうかもしれない。何せ、あれらの敵はわたしたちでは絶対に太刀打ちできない強さなのだから。

「そうなのだけど、肝心のハブキンサーが見当たらないのよ」

イヴアールちゃんが眉間にしわをよせる。

「つてことは統率が取れている……というのも未確定ってこと？」

「そう。だから今回は、国道一号周辺の安全の再確認及び富士周辺に出現したキャンサーに関する調査。この二重の意味を兼ねての哨戒任務ということになります」

密かに、息を呑む。

怖いわけじゃない。31Cの実力は、他部隊にも負けないくらい強くなってきた。

恐らくハブキンサーに出くわしたとて、無事に帰つて来られると思う。

「わかっているとは思うけど、ハブキンサーと思われる個体を見つけたらくれぐれも無理

をしないで撤退すること

「了解よ」

だけど、どうしてだろう。

今回の任務は、とても嫌な予感がした。

※

軍用車が小さな石を蹴ると、ドンという大きな音を立てながらエンジンの音を木靈させる。穴だらけの道を車で走っているせいか、シートベルトをしていても身体が度々跳ねてしまつてなかなか落ち着かない。

これから開通させていく道も、あくまで復旧させるのであって、舗装させていくわけではないから毎日こんな風に揺られることになるとのことだつた。

わたしは三半規管が強いから問題はないとして、夏バテ状態のイヴ・アールちゃんが心配だつた。こんな中で揺られていたのでは長い間車酔いに苦しめられることになるかもしれない。心配だったので横目で様子を見ていると、目の前で星羅ちゃんが水晶玉を前に出した。

「それでは、毎度恒例の占いを」

「いつの間にあなたの53%が恒例になつてるのよ」

とりあえず突っ込めるだけの気力はありそうだつた。

「前も言つたけど、結果がどうあれ複雑な気分になるのよ」

「同感だ。非科学的なものを信じるなぞ魔術師の沽券に関わる」

「拙者はこの前の占いで景気づけになつたでゴザルよ」

「備えあれば悪いなし、ですよ♪」

「意見が綺麗に割れてるでゲスね」

「そういう豊後はどうなのよ」

「あちきは山脇様に一生ついていくでゲス」

現実主義とその使い魔の意見により、賛成二の反対三。やらなくていいという話になつた。
——はずだつたのだけど。

「……では。31Cをめぐる星の導きを見させていただきます」

「多数の意見を無視して自分の威厳を取りに行つたな」

巫呼ちゃんもイヴァールちゃんも目を細めはするものの、絶対にやるなとは言つていないので、强行されたとて何かしようというわけではなかつた。

いつものごとく、占つているとみられるような光が水晶から発せられた。相変わらず誰もどういう原理で光つているのかは理解していないけども、もう突っ込むことすらしない。こうなつたら当たつているのかも微妙な占いの結果をただただ待つだけ。

まあ、どうせ車の中で暇しているだけなんだから、ちょうどいいのかもしれない。

少しすると、星羅ちゃんはわたしを一瞥し、困惑した表情になる。

何か変なものでも見えたのかな。

「……見えました。これは神崎さんが運命の人を側で感じるでしょう」気のせいだった。
 「前と同じ結果になつてるのでゴザルー！ しかも今回は一般人もいないであろう国道のド真
 ん中でゴザルよ!?」

「同行する方々の中に運命の人がいらっしゃるのかもしれません」

「この前の子といい、アーデルちゃんは運命の人がたくさんいるみたいですね♪」

「佐月殿……？ なんだか言い方が怖いでゴザルよ……？」

なんてことのない普通の言い方のつもりだったのだけど、よくよく思い返してみれば嫉妬
 しているかのようにも聞こえるかもしれない。

でも、アーデルちゃんがかわいいからあえて弁明はしないでおこつと。

「ほらあんたたち。イチャついてないでそろそろつくから準備しなさい」

「早く準備するでゲス」

「これがイチャついてるように見えるでゴザルかーッ！」

今にも泣きだしそうな口調で慌てて準備をするアーデルちゃんの背中が微笑ましかつた。

※

潮風を浴びるのはいつ以来だつただろう。

懐かしいようで、初めてのような磯の香りがわたしたちを包み込んでいる。基地から車で南へ移動し、国道一号へとやつてくると夏らしからぬ気持ちのいい風が海から吹いてきていた。髪のことを考えるとあまり長居はしたくないのだけど、任務で来ていることもあるってそうは言つていられない。大人しく軍の人と向き合うこととなつた。

「それでは私たちはこれから復旧作業を始めます。キャンサーが出現した際には討伐をお願いします」

という話から、一応周囲を警戒するわたしたち。

海が苦手なキャンサーのことを考えると、この辺では出没しにくいし、いるとしても野良の弱い個体くらい。おまけに平地が続いているため見渡しもよく、敵影があつたならすぐに気づけそうな景観だった。

「統率の取れているとみられるキャンサーがいると聞いてはいたが、さすがにここら辺はおらぬようだな」

「まだ富士から遠いですからね。とはいえる、ここまでやつてくるかもしれませんし、気を引き締めて警戒していきましょう」

今日は護衛するほどのことではないように思える。何かあつたなら軍の人たちだけでも逃げられそうだ。

軍の人に世間話がてら話を聞いてみると、昨日までは軍の人たちだけで復旧作業をしていたようで、今日より海から離れた場所も作業をするのでわたしたちを呼んだとのことだつた。確かに箱根山へと入つていくにつれてキャンサーと会敵することが多く、わたしたちの出来事が増えていく。そこにわたしたちが安全を確保して、軍の人たちがキャンサーに荒らされた道を確保する。その繰り返し。

軍の人たちからしたら、落ちていたがれきや石をどかすといった簡単な作業でしかなかつたけども、キャンサーに対抗する手段がないために相当な恐怖が付きまとう中で作業するのには気が気でないと思う。

例えるなら、熊が出る山に銃も持たずして踏み入れているようなもの。

彼女らができるだけ安心して作業ができるよう、常に近くにいようと思つた。
そう思つていたのだけど、

「さすがに小さなキャンサーがいるだけでこちらの敵は朝飯前でゴザル」

「あちきでも一人で倒せそうでゲス」

「はいはい。一人でも倒せそうだとしても豊後はあたしから離れないようにね」

ハブキヤンサーの話なんてなかつたかのように弱い個体しかいなくて、言つた通りぶんち

やん一人でも倒せてしまう。

でもこうなると、調子に乗って単独行動するようになるからいつも以上に気を付けて見てあげないといけない。ぶんちやんはもちろんのこと、イヴアールちやんも張り詰めすぎないように見ておこう。

「あつ、山脇様。あそこに見慣れない花が咲いてるでゲスよ」

「言つてる側から離れるんじやないよ！」大変そうだなあ。「って確かにあまり見ない花だね」少し離れたところで二人が盛り上がり始めたので、作業組を横目に足を運ばせる。

そこには黄色くて五枚の花弁が特徴的な花。これは確か――

「弟切草でゴザルな」

アーデルちやんに先を越されてしまった。

「ああ、これがそうなのかい？ 実物を見たのは初めてだね」

「無理もない。草地に生えているからそれなりに目にはしているだろうが、花自体は一日しか咲かないからな」

なんて巫呼ちやんは気を遣いはしたものの、割とどこにでも咲いている花だし、こういう花は一日しか咲かない代わりにたくさん咲かせてみせる。いわゆる一日花というやつだ。アサガオとかハイビスカスと同じで、一度咲いた花弁はそれつきりの花。

きつと初めてというわけではなくて、今まで目にしてはいるけどもスルーしていたとかだと思う。

「……確か、薬にもよく使いますよね」

「うむ。古来より薬草としてもよく用いるからな。怪我をしたらこれを使うと良い」

「……軍が用意している医療キットがあるので弟切草を使うことなんてないと思いませんが もつともだ。怪我をしたら自分でできることなんて応急措置をするくらい。わたしだって薬については大した知識もないからそろそろ易々と使うわけにはいかない。「ところで山脇様。この花、持つて帰つてもいいでゲスか?」

「いいんじやないかい? 何せ一日しか咲かないんだろう? 大事にするんだよ」

イヴアールちゃんはぶんちゃんの頭を撫でて笑みを浮かべる。

ぶんちゃんはよほど気に入ったのか、弟切草をいくつか摘んで小さな花束を作つていく。
「微笑ましいでゴザルな」

「そうですね」明るい花束を見てふと、思う。「弟切草、アーデルちゃんに似合うなあ……」

「そうでゴザルか? あの花は花言葉が不吉だつたと記憶しているでゴザルよ?」

「はっ!」いけない。独り言を漏らしてしまっていた。「これは違うんです……」

なんて恥ずかしい。

確かに弟切草は弟を切り殺したということから名付けられたということもあり、花言葉も



怨念や迷信といった不吉な言葉ばかり。そんな花が似合うと思われてアーデルちゃんも困惑しているのだろう。

「さては色から拙者を連想したのでゴザルな?」

「え、ああ……そうなんです……」

と思いきや違う方向に解釈されたからそういうことにした。

「名前も由来も不吉ですけど、見た目の美しさは不吉ではありませんからね」

なんてらしいことを言つて誤魔化してみる。

わたしも弟切草を摘んで、アーデルちゃんと比較した。

そうだ。見た目だけを見ても、アーデルちゃんによく似合つている。

黄色の花が彼女の金髪によく溶け込んでいて、綺麗な蒼色の瞳を際立たせている。

花を挟んで目を合わせれば、アーデルちゃんは「なんか照れるでゴザルな」と顔を赤くて髪を弄り始めた。目立ちたがり屋のくせに、こうして一人に褒められるのは慣れていないらしい。

そういうところは本当にかわいいなあ、って思う。

※

静岡へと入ったところで夕方になり、今日の作業は終わりを迎える。基地へと帰ってきた頃には夜になっていた。

車を降りると、真っ先に雲一つない夜空に星々が綺麗に輝いているのが見えた。
この天気がしばらくずっと続ければいいのに、そんなことを思いつつ、みんなが車から離れていくのを見てイヴアールちゃんに話しかけた。

「何事もなく終わってよかったですね♪」

「まったくよ。桜庭の占いも私たちに直接被害が及ぶような結果ではなかつたし、心配するようなことも起こらないでくれると助かるね」

なんてため息をつきながらやれやれと声を漏らすイヴアールちゃん。

その様子を見てついクシリと笑うと「何?」と目を丸くして訊ねてくる。

「いえ、イヴアールちゃんが占いの結果に心配だなんて言葉を使うんだなって思いまして」
ただでさえ今朝は複雑な気分になるからと占いには反対していたから、占いなんて信じないようにしていると思っていたのだけど、そうでもないみたいだ。

「そりや使いたくなるわよ。53%なんてあまりにも中途半端な数字なんだもの。これがもし……もしもの話だけど、うちの部隊から誰かがいなくなる、なんて言われたときには焦るでしょ。考えたくもない」

「イヴアールちゃん……」

占いのことはわたしもそこまで知っているわけではないのだけど、的中率としてこの確率はかなり高い方なのではないかと思う。

二回に一回以上は当たる占い。

それがもし誰かに危険が及ぶ結果が出たなら、たとえ占いが外れているとしても無視することはできないんだ。部隊長を務めていて、さらにぶんちゃんという大切な人がいるイヴアールちゃんなら特に。

「もしそういう結果が出たとしたら全力で運命を変えましょう」

「そうね。変えられるからこそあの結果なのかもしれないしね」

部隊を結成したばかりならともかく、今のわたしたちならそれができる気がする。あの頃よりも強くなつたし、絆も強くなっている。

占いの結果を覆す力だつて、あると思う。

「豊後おーーー！」

「な、何するでゲス！ ヘルメットをグリグリするなでゲス！」

ふと、遠くで巫呼ちゃんとぶんちゃんがいつものじやれ合いをしているのが聞こえてきた。

「何やつてるんだいあんたたち」

「山脇殿。ちょうどいいところに」

わたしたちが合流すると、アーデルちゃんが腕を組んでいた。どうしたんだろう？

「……神崎さんが週末の祭で浴衣を着たらどうかと提案したのですが、豊後さんが」

「あちきは浴衣なんて着ないでゲスよ」

わたしとイヴアールちゃんで目を見合させた。

四日後。もとい日曜日に基地内でお祭りが開催される。

屋台を出すかは自由なのだけども、ほとんどの部隊がこぞつて参加を決めていて、わたしも事前準備として食材調達から設備の貸し出しの管理を任せられている。
中でも浴衣は数多くの注文があつた。せつかくの祭りだからとみんなこぞつて着る気満々なようで、当日は浴衣姿で歩く人でいっぱいになるのかもしれない。

「どうしてよ。祭なんだし着たらいいじやない」

「だつて祭で浴衣なんてありきたりすぎるでゲス」

「何言つてんだい。ありきたりの何が悪いのさ」

「世界征服するならもつと目立つ格好にならないといけないでゲスよ」

「ああ、そういうことか。」

最初は単に周りに同調するのが嫌なのかと思つたけど、ぶんちゃんはマツドサイエンティスト、山脇・ボン・イヴアールの手下。世界征服をする者がお祭りだからとのほほんとした姿になるのはらしくないと思つたんだ。

理由がわかつたイヴアールちゃんは不敵に笑い始める。

「豊後は甘いね。マッドサイエンティストはときに闇に潜るものだよ！」

「そうなんでゲス？」

「周りが浴衣を着たら私たちも着ることで忍べるつてものさ。うちの部隊には忍者が一人もいるんだからね」と視線がわたしとアーデルちゃんに来た。「二人に倣つて私たちも忍ぶよ！」ぶんちゃんが訝しげにこちらを見てくる。

今週のぶんちゃんはわたしが元々そういう修行をしていたことは知らないんだった。アーデルちゃんと揃つて微笑んでみれば、ぶんちゃんは目を輝かせてイヴアールちゃんに向き合う。

「そうだつたでゲスか!? それなら浴衣を着るほかないでゲス！」

「ほら、わかつたら採寸に行くよ」

「はいでゲス！」

二人は手を繋いでフレーバー通りへと歩いていった。後でわたしも行かない。

「そういえば佐月殿は祭で何か屋台を出すでゴザルか?」

「それがまだ何を出すか悩んでいるんですよね」

アーデルちゃんの問いにそう答えてみれば、目を丸くされてしまった。

「珍しいでゴザルな。何でもてきて用意周到な佐月殿が悩まれるとは」「何でもできるからこそです♪」

自信満々に嘯いてみせたけども実際その通りで、どんな屋台でもできるわたしからしたら選択肢がありすぎて何をしようか悩んでいるところだつた。

とはいっても仕事はあるにはある。屋台を出す人たちのお手伝いとして食材や設備の調達。ただ、ほとんどの手配は済んでいるのでその仕事はもうないも同然。あとは自分が何をやりたいのかを決めるだけ。

それだけのはずだけど、ただのショップ店員なだけのわたしが特段やりたいことというのを見つけられなかつた。

「逆にアーデルちゃんは何か出しやがるんですか?」

せつかくならアーデルちゃんを手伝おうと訊いてみる。

「ヤー。拙者は兵糧丸の屋台を出すつもりでゴザル」

え、何それ初めて聞いた。「やめやがれ♪」

「でも拙者が忍者として屋台を出すならこれがベストでゴザル」「忍ベ♪」

「ヤー……。もう少し違うやつを考えるでゴザルよ……」

赤いリボンと一緒に落ち込んでしまうアーデルちゃん。

アーデルちゃんがやりたいことなんだからわたしとしては応援したいところだつたんだけど、せつかくのお祭りがいやらしい気分で臨まれることになつてしまふ。

違う意味のお祭りになんてならないでほしいところだ。

（Day2） 忍ぶ者と占う者

夏も真っ盛りだからなのか、厚い雲ができる。

冷房が効いていた車から出ると、強い日差しがわたしたちを照りつけた。軍の特殊な技術が施された制服を着てるので暑さはさほどないけども、それでも熱波と光がチクチクと顔に当たつた。

日焼け止め持つてきておいてよかつた、なんて当たり前のことにも安堵した後で星羅ちゃんが水晶を構えた。

「……それでは本日も占いましょう」

「ごく自然な流れで日課にしようとするんじゃないわよ。これから毎日するつもり？ 朝のニュース番組じゃないんだからもつと大事に占いなさいよ」

占い反対派のイヴアールちゃんが文句を垂らした。

さすがにこれだけ言われたら今日はやらないかな、わたしとしてはどっちでも構わないので流れに身を任せようと黙っていると、

「まあまあ。この準備時間も暇でゴザル。やるだけお得でゴザルよ」

「せつかくだから全員分やるでゲスよ」

「豊後……手のひら返しあつたな」

アーデルちゃんとぶんちゃんが揃ってやれるものはやつてほしいの精神を振りまいていた。巫呼ちゃんもぶんちゃんの気まぐれっぷりに大きく突つ込む氣にもなれないみたいで、ただただ目を細くするだけ。

「それでは、昨日は神崎さんでしたので今日は佐月さんを……」

あつ、今日はわたしなんですね。

アーデルちゃんのときは特に何とも思わなかつたけど、いざ自分が占われるといくつか懸念が出てくる。

例えばそう――。

「星羅ちゃん。個人のことを占うと考えていることが丸見えになつたりしませんか？」
わたしとアーデルちゃんの間にある過去がうつかり公開されてしまうのではないか。

昨日の占いの結果からして、運命の人気がわたしであるならば、今回の占いも逆のことが結果として出る可能性はある。

そうなつたら、わたしは……アーデルちゃんは……今までと同じ関係でいられるのか。
幻滅する、というのではないとは思う。わたしだつて知つたら飛んで喜ぶ姿も目には浮かぶ。
アーデルちゃんなら、助けてくれた忍者の実力云々よりも、再会できることに喜んでくれるだろうし、何よりもお礼を伝えたくて仕方ないだけのようにも思える。
だけど、喜んでもらえるとわかっていて真実を明かすのはどうしても許せない。

わたしはもう忍ですらなかつた。成り損ないのしがないショッピング店員でしかない。わたしがわたしを忍とは認められないのに、どうして眞実を明かすことができるのか。星羅ちゃんは「しません。そこはご安心を」と否定してみせるけども、不安だつた。これがもし、アーデルちゃんが想いを馳せる人の正体がわたしだって知つたら、自分を許せなくなつてしまいそうだ。

そんなわたしの事情もひつきりなしに占いを続ける星羅ちゃん。水晶から光が発せられて、やがて輝きを失うと、おもむろに口を開き始める。

「……見えました。これは……これは……佐月さんの背中に……」

「背中でゴザルか？」

あつ、やつぱりヤバいかもしれない。

ついわたしは殺意を飛ばした。もちろん本当に殺す気はさらさらないただの殺意だ。それが功を為したのかはわからないけど、

「……一週間後、このあたりを台風が通過するそうです」

「ただの天気予報になつててゴザルーッ!?」

「なんで急に台風の話になつたでゲスか？」

「きっと53%が外れて天気占いに変わっちゃつたんじゃないの？」

「そうだな。現に台風は発生しておるが、進路を大きく外れておるしな」

「台風自体は発生してるのね。ある意味53%だわ」

「……解せません」

とまあ、本当か嘘なのかわからない結果を出されたことによつて、わたしとアーデルちゃんの歯車はまだしばらくはいつも通り回ってくれそうだ。

※

本日の予定は、箱根関所から沼津市までの復旧を目標としている。道路の荒れ具合にもよるだろうけど、時間ががあれば富士市まで頑張りたいという話を聞いた。

「それでは31Cのみなさん。本日も宜しくお願ひ致します」

軍の人の一言で今日も護衛任務が始まる。

とはいつたものの、予定している地域ではキャンサーがほとんど確認されていない。昨日の感じからしても戦闘はないに等しいといったところだ。

「……今日はどうされますか」

「そうね。ハブキャンサーがいる可能性が捨てきれないから、今日の作業範囲周辺地である程度の安全を確認次第、見張りと哨戒の二チームに分かれて行動しましょう」

『了解』

部隊の中でも分かれて行動することは稀ではあるのだけど、司令官からの命令のこととも考慮し、いるかもわからないハブキャンサーが復旧班と邂逅することを避けるためにも不安材料は排除しておくに限る。

ただ……さつきの星羅ちゃんの占いのことが、少し気がかりだつた。

少し時間が経ち、わたしたちは先回りして富士市へと足を運ばせていた。
ここへ来るまでに遭遇したキャンサーの数は三。どれも雑魚ばかりで朝飯前で暴れ足りないくらい。

ハブキャンサーは本当にいるのか疑いたくなるレベルだ。

しかし司令官曰く、ここで統率の取れたキャンサーが確認されたと報告を受けたらしい。
ここから先是、より一層警戒をしないと。

「それで、安全が担保されて二チームに分かれたわけですけど」

わたしは同じ哨戒班のはずが妙に距離を置いている星羅ちゃんを見やる。

「…………」

「さ、桜庭殿……？　さつきから黙り込んでどうしたでゴザルか？」

元々物静かではある星羅ちゃんではあるけども、極端に口数が少ないわけではない。
アーデルちゃんも様子がおかしいと察して訊ねざるを得なくなってしまったようだ。

「……いえ、お二人の中に私が混じって良いものかを考えているだけです」

「おつと～？ 何か勘違いしてやがる傍観者さんがいらっしゃいますね～？」

「同じ部隊でゴザルよ。気にする必要はないでゴザル」

「そうですよ。変に気を遣われるところちがどうしたらいのかわからなくなります」

「……お二人がそう仰るのであれば」

言いながら星羅ちゃんはわたしたちと若干距離を詰めて歩くようになつた。
とはいってもほんのちょっと。何かと理由をつけてわたしたちを傍観者として観測したい
みたい。

言つても無駄なら諦めようと思つたところ、アーデルちゃんの方から詰め寄っていく。
「ときには桜庭殿。昨日今日と占いを聞いて一つ疑問があるのでゴザルが」
「……なんでしょう」

対する星羅ちゃんはさらに距離を取ろうとするも、聞かれたことに対して答える姿勢はい
いと思う。

「たとえば、ある一つのことを占つてもらいたい場合、同じことを何度も占つてもらつたら
違う結果が出るのでゴザルか？」

確かにそれはわたしも気になる。

53%という中途半端な的中率を誇る星羅ちゃんの占い。業界からしたら割と高い方では

ある——いや、むしろ高すぎるかもしない。

こう言つては業界人に怒られるのは承知の上で展開すると、よくある占い師は適当に当たり障りのないことを言つて、相手の様子を窺い、推察した結果を話すことであたかも的中しているかのように振る舞つて、いる詐欺師に近い人が多数を占めている。わたしも元いた世界が世界だけに知つて、いるのでそういう話は聞き及んでいた。

だからこそ、わたしには星羅ちゃんの占いに関する確信して、いたところがある。

星羅ちゃんは決して適當なことを言ひのけて、いるわけではない。

それゆえ、アーデルちゃんの質問の返答によつては、一つの仮説に辿り着くかもしない。

星羅ちゃんはこう答えた。

「……何度やつても同じ結果になります」

それを聞いたわたしは、背中に悪寒が走つた。

横ではアーデルちゃんが期待外れと言わんばかりに「そうでゴザルか……」と肩を落とす。

「何をしょぼくれやがつてるんですか？」

「昨日の占いについてもう少し深堀りしてみたいと思つたでゴザルよ。それこそ、同じことを占つたら別の結果が出るのだとしたら確率論で正しい事象に収束するのでは、と——運命の人を背中で感じる。

自意識過剰だと思いたいけど、これに関しては言い逃れできないように思える。

きっとアーデルちゃんも、同じことを考えているんだろう。

「と、言いますと。子供の頃に助けてもらつた忍者のことですか？」

「ヤー」アーデルちゃんは静かに頷いた。「昨日の占いについても当たつていてるか定かではござらぬ。しかし運命の人というのがもし拙者の思い浮かべている人なら、せめてもう少しだけでも可能性を信じたいでゴザルよ」

わたしはアーデルちゃんが小さい頃を知っている。

誘拐されたドイツ人の女の子。わたしは、まだ小さかつた頃の彼女を助けた。

アーデルちゃんが恩人に会つてお礼を言いたいのはわかっている。髪を結っている赤いリボンも、その恩人に見つけてもらうためのトレードマークとして残しているのだということもわたしは知っている。

「可能性を感じた後は、どうしやがるんですか？」

「こっちから出向くのは無粹でゴザルよ。ただ……」

「ただ？」

「このご時世でゴザル。せめて息災であることくらいは確かめたいでゴザルよ」

欲は言わない。ただ、生きているのがわかるならそれだけでいい。

だから忍者として研鑽を積んで、目立つて、見つけてもらつた。

会いに行けないとしても、あなたが助けた子がこうして忍として成長したのだと知らせた

いから。

アーデルちゃんの意図は手に取るようにわかる。

「そう……ですか」

わかるからこそ、わたしはどう受け止めればいいのかわからなくなる。

あの頃のわたしは打算で助けたつもりだった。

忍だと認められたい一心だった。

成果を上げれば認めてもらえると思つていた。

でも、虚しく。忍として認められなかつた。

アーデルちゃんが会いたいと思つている人は、そんなにすごい人ではないんですよ。

「では、神崎さんの望みは憧れの方がご存命かどうかを確かめたい、ということでおろしいでしようか」

「お願いできるでゴザルか」

星羅ちゃんがコクリと頷く。立ち止まり、水晶を構えて今日二度目の占いを始めた。

もしかしたらわたしのことがバレてしまうかもしれないけど、生きているかくらいなら別にいいかな。

そんなことを思いながら占いの結果を待つことにする。

……つて、あれ？ あそこ、一瞬何か動いたような。

「……見えました。これは」

水晶が輝きを失つたその刹那、瓦礫の後ろから大きな影が姿を現し、エネルギーが集中していくのを察知した。

「一時の方向。敵襲です！」

わたしが言うと、この場に向けられる火炎放射。一斉に散らばつては、セラフを呼び出して身構えた。

「タイミングが悪いでゴザルヽツ！」

そんなもの、キャンサーからしたら知つたことじゃない。

「見てください。先ほどまでのキャンサーとはワケが違います」

これまでとの雑魚とは違う。群れを成した一回り大きなキャンサー。以前見たことのあるダイヤモンドアイの亜種といったところ。苦戦することがないのはわかりきっていた。このくらいならわたし一人でも倒せる自信がある。

ただ、こういう個体がいるということは、

「……噂に聞くキャンサーでしょうか。だとするとこの周辺に」

「間違いなくハブキャンサーがいるでゴザルな」

ちょうどいいですね。さつきは楽勝すぎて退屈していたんです。

不安を紛らわすためにも、ここで戦闘はいいスペイスになりそうだと思つていたところ、

奴の背後から大量の足音と共に砂煙がこちらへ向かってきていたのが見えた。
あれは……。

「つてさすがに多すぎるでゴザルっ！」

「……一旦距離を取りましょう」

傍から見れば多勢に無勢。大量の蜘蛛型キヤンサーの急襲にわたしたちは逃げる以外の選択肢を失い、踵きびすを返した。

「一体何体いるでゴザルかっ!? 三人でこれらを相手にするのは無理でゴザル！」

「この数を数えろだなんて、面白いことを言いますねアーデルちゃんは♪」

「笑つてる場合ではないでゴザルよ!? 追いつかれるでゴザル！」

キヤンサーたちは思つたよりも素早く、アーデルちゃんに大声で諭されるも、わたしは特に焦つていなかつた。

いや、焦る必要がなかつた。

だつて別に、この大群のうちの一体一体は、そこらにいた雑魚と変わりないのだから。

「……佐月さんっ」

六時の方向へ転換したわたしに気づいたようで、星羅ちゃんが声を出した。けどもう遅い。セラフのトリガーを引いては、前方目がけて思いつきり氷の銃弾——ダイヤモンドダストをぶつ放した。

次から次へと消滅していくキャンサー。しいては氷の壁まで出来上がり、敵は回り道せざるを得なくなる。

「今ですアーデルちゃん、星羅ちゃん！」

「ヤー！」

「……はい」

残ったキャンサーたちはアーデルちゃんと星羅ちゃんの近接攻撃、及びわたしの後方支援にて殲滅。

大群を相手にした割にはあっけない終わり方だった。

「ゼロ、ですよ♪」

アーデルちゃんがポカーンとした表情でわたしに問いかける。

「何がでゴザルか？」

「さつきの答えです♪」

「や、ヤー……」

目を丸くしたあの表情は、しばらく忘れられそうにない。

そんなこんなで苦戦することもなく、最初に出会ったダイヤモンドアイ亞種も討伐し、わたしは一息ついた。

「なんとかなりましたね♪」

涼しい顔で二人に発するも、アーデルちゃんは近くにあつた瓦礫に腰を下ろして休憩する。星羅ちゃんに至つてはその場で膝をついていた。

「大勢を一気に相手すると疲れるでゴザルな」

「……人数が半分しかいないというのも厳しいものがありました」

一人がこの様子だと、今日はこれ以上の哨戒はやめておいた方がいい。

「また同じ状況になつたら同じように対処できるかはわからないですし、戻りましょうか」

「……水晶に陰りも見えます」

それが占いの結果なのかはわからないけど、星が言っているのなら間違いない。

さつきのことともあって、わたしは星羅ちゃんの占いに対し、さらなる確信を持った。

☆

撤退を決意した佐月率いる三人班は復旧班と合流し、経過を山脇に報告した。

基地に戻つてからも同じことを山脇の口から手塚に報告するとのことで、別々で臨時のリーダーを務めていた佐月が同行することとなつたそうだ。

それはそうとして、この後何もなければまたショップの手伝いが何かできればと思つてい

たのだが、その主がいないともあれば仕方ない。

「桜庭殿。ちよつといいでゴザルか？」

疲れて車の中ですっと寝ていた豊後をおぶりながら寮へと戻つて天音を見送つては、桜庭に問いかける。今日は自分のことを優先しようと思ったのだ。

「……どうかしましたか」

「いやあ、大した話ではないのでゴザルが、キャンサーに邪魔されたあの占いの結果が気になつたのでゴザルよ」

「……あの結果……ですか」

アーデルが問うと桜庭はどこか言葉が詰まつたような、詰まつていないような微妙な反応を見せる。元より口調はゆっくりめではあるが、今の桜庭はいつも以上に歯切れの悪さが追加されていた。

「なんだか調子が変でゴザルよ？　まさか拙者に気を遣つてるでゴザルか？」

あの占いの結果。それすなわちアーデルが思い浮かべた恩人が息災であるかどうか。

こういう反応をするということは悪い結果だつたのだろうと察したところだつたが、アーデルの予想とは反して桜庭がかぶりを振る。

「……いえ、そうではありません。気を遣つて良いものかすらわからないのです」

「どういう意味でゴザルか？」

息災かどうかを占つたなら、是か否の二択しか答えがないのではないか。
きっとここまで悩むということは良くない結果が出たのだ。

「……そうですね。少し迷いましたが、結果をありのままお伝えした方が神崎さんのためかも
もしだせん」

当然ながらアーデルはその結果を聞く用意はできていた。

このご時世だ。どんな結果でも受け入れる覚悟はできている。

「……占いの結果ですが」

大きな息を吐いてから、桜庭は事実を口にした。

「……わかりませんでした」

回答を耳にしたアーデルは目を大きく見開いた。「わからなかつた……？」

「……正確には何も映らなかつたと言つた方がよろしいでしようか。星が、神崎さんの望む
ことを映し出さなかつたのです」

「それは、忍者殿がもう亡くなつていいということでゴザルか？」

「……いえ、決してそういうことではありません。あくまで星が回答を持ち合わせていなか
つたという話です」

アーデルは小首を傾げた。その様子を見かねた桜庭は続ける。

「……私もこういう経験はあまりないので憶測に過ぎませんが、生死の判断ができないのか
もしそれません」

「生きているか、星にもわからない。占いでもわからない……という解釈でゴザルか？」
桜庭は静かに頷く。ただ、それは矛盾してはいないだろうか。

「しかし桜庭殿は昨日、言っていたでゴザル。『運命の人を側で感じる』と」

「……私の占いの的中率は決して高いとは言えません」

そうだ。だからこそ今回の占いだって当たっているとは限らない。

わからぬといいう回答も外れている可能性だつてあるわけだ。

「拙者は信じたい方を信じるでゴザル。側にいることを信じるのは、悪いことでゴザルか？」

人によつては都合のいいことしか聞き入れないと思われかねない愚かな考え方かもしれない。
それでもアーデルは信じたい。

信じていたから今まで頑張つてこられたのだから。

そんな信念を持つた真つ直ぐな視線を向けると、桜庭は口角を上げて口を開いた。

「……とてつもなく、尊いことだと思います」

思わず返しだつたためにアーデルは目を丸くした。

「と、尊いでゴザルか……？」

それはもつとこう、他の言い方があるのではないかと思うアーデルであつたが、桜庭の言葉選びは間違つていないらしく「……はい。滾ります」と口にし、愉悦に浸つている。

「なんだかよくわからないでゴザルが、嬉しいでゴザル！」

嬉しそうだつたらそれはまあ、悪い気はしない。

「……ですのでそんな神崎さんのため、次は別の方向から占つてみようと思うのですが」

「おお！ 一体それはどんなっ!?」

ふと思わぬ提案を受けたアーデルは、前のめりになつて訊き返した。

「その運命の方のいる方角を占います」

※

司令官に今日の報告をしてしばらく。

いつもならショップへ向かうところだつたけど、今日は違う。近々開催される祭の準備をするので、事前に申請を受けた人たちへ設備の受け渡しがあるのでナービイ広場へとやつてきた。ショップへは手が空いた隙に行くことになる。

いつもなら早めに準備を済ませて待機しているところではあるものの、作戦の方でいろいろあつたから予定していた時間になんとか間に合つた形だ。とりあえず一息。

大きな荷物がたくさんあるからちょっと大変だつたし、もう少しだけ休みたいところだけ
どそうも言つていられない。早速二人来た。

「佐月。あたしらが申請した資材を取りに来たぜ」

最初に来たのは31Aの和泉さんと茅森さん。31Aは六人全員でライブと屋台も出すと
いうことで、かなり大変そうだ。

「張り紙しての箇所にまとめて置いてあるから中身を確認した上で取つていきやがれ♪
「ありがとうマリー」茅森さんは念のためにダンボール箱の中身を確認する。「いかにもなお
祭りっぽい装飾でいつもと違うステージになりそうだね」

と横で和泉さんがダンボールの数を確認して目を大きく見開く。

「おい月歌。これ意外と量ある上に重いから一回じや運びきれねえぞ」

「めぐみんに来てもらった方がよかつたかな。サイキックとか使えば楽できそうじやない?
「サイキックをそんなことに使うなや、とか言われるのが目に見えてるわ。あいつだつて疲
れるだろうし、大人しく手の空いてるあたしらだけで荷物運ぶぞ」

「えー他のみんな何してるのー!? 二人だけじゃ絶対この量運べないってー!」

「お前が屋台もやろうって言つたから二人だけになつたんだろうが。もう忘れたのか

「あ、そうだつた。マリー、お好み焼きの材料もお願ひしたいんだけど当日頼める?」

「逢川がキレるぞ。佐月、お好み焼きじゃなくてたこ焼きだからな。わかつてるとと思うが」

「もちろんわかつてゐるぞこんちきしょーめ♪」

とまあ、お二人の漫才はともかくとして。

事前準備として申請があつたライブの装飾とたこ焼き屋台の機材と練習用材料。作成したリストを見なくても頭に入つてゐる。

31Aには大阪出身の逢川さんがいますからね。それを加味して粉ものを選んだのかもしない。ここに二人しか来なかつたのも、今頃は残る四人でたこ焼き作りの練習をしているからなんだとか。ライブの練習もあるし、本当に大変そうだ。

と、二人が荷物をまとめていたところ。

「さあ桜庭殿！ 水晶が向こうを指しているなら全力ダッショウでゴザルよ！」

「……ま、待つてください……」

遠くからこちらに向かつてくる声と足音が。

あれはアーデルちゃんと、星羅ちゃん？ どうしたんだろ。というか星羅ちゃんすごいしんどそう。あの後でアーデルちゃんに付き合つてここまで全力疾走してきた雰囲気だ。

「アーランも何か屋台出すの？」

通りすぎようとしたところで茅森さんが呼び止めた。

わたしも知つてゐる通り、アーデルちゃんはかぶりを振る。
「ナイン。拙者はまだ考へてゐる最中でゴザル。こっちへは別の用で來たのでゴザルよ」

「別の用？ 何かあつた？」

茅森さんはわたしの方を見やる。特にアーデルちゃんからの用事に心当たりはない。
でもなんか、こう言つたら本人に悪いけど、星羅ちゃんがいるせいか嫌な予感がした。
そしてそれは、悪くも的中することになる。

「実は今、拙者の運命の人のいる方角を占つてもらつていてゴザル」

「……っ！」

「運命の人……あ、もしかして助けてもらつた忍者のこと？」

屈託のない笑顔で話をするアーデルちゃんとは対照的に、わたしの表情が強張つっていく。
すぐにハツとして表情を柔らかくした。顔で墓穴を掘つてしまふところだつた。

「……星が導いているのがその通りとは限りませんが、確かめる価値はあるかと」

そう言いながら星羅ちゃんは顔はこっちを向いていないけど、わたしを見た気がした。目
が隠れているからいまいちわかりにくい。ただ、視線は感じた。いやでもどうなんだろう、す
ごい息上がつてるし、本当に気のせいかもしれない。

「というわけで向こうを指していたので拙者たちはもう行くでゴザルよ」

「……も、もう少し休ませてください。ああ……」

アーデルちゃんは颯爽と指差した方へと再び走り始める後ろで星羅ちゃんが手を伸ばす。
直後ため息をつき、追いつこうと茅森さんたちにお辞儀してからこの場を後にした。

そしてこの時。目の前を走っていく星羅ちゃんの目をわたしは見逃さなかつた。
髪の隙間からチラリと見えるこちらへの視線。これは――。

「なんだかいつにもなく楽しそうだつたね。ア―さん」

「そりやそうだろ。恩人に会えるかもしれないんだからな」

「そりやそつか。じやあマリー、あたしらまた来るから」

「あ、待ってください」

さつきの星羅ちゃんの視線が気になつて、わたしは二人を呼び止めた。

「お荷物。わたしも一緒に持つて行きます」

わたしの第六感がこの場を離れた方がいいと告げているような気がしたから。

『お祭り出展責任者へ。

こちらの不手際により準備が遅くなつてしまつたため予定を変更します。お荷物を直接お届けするので予定していたナービイ広場へは足を運ばず、お届け先記載の上返信しやがれ♪
電子軍人手帳で茅森さん以外に通達すると、続々と返事がきた。

正確に言うと時間びつたりに準備ができていたわたしに不手際は一切なかつた。強いて言うならこれから起こるであろう最悪に備えた嘘をついていることくらいだ。

まあ何かとこのやり方の方がサービス精神旺盛ではあるし、時間になつても荷物を取りに

来ない人がいることを考えると早くお仕事が終わる。むしろ時間効率は良くなると思う。

そんなわけでわたしは茅森さんたちと寮へとやつてきた。廊下には何やらソース特有のフルーティーな香りがただよつていて。話に聞いていた通り練習しているようだつた。

「めぐみさん！ やつぱり何度やっても失敗します！」

「わたしも失敗するわ。朝倉さんは綺麗にひつくり返しているのに……何が違うのかしら」「あたしはめぐみさんの見よう見まねでやつてるだけだからまだ失敗することもあるし」

お皿の上に並べられるたこ焼きとたこ焼きを形作ろうとしていたものの成れの果て。たこ焼き機を前にしてしかめつ面で挑むも、國見さんと東城さんはうまくいっていないみたいだつた。逢川さんの手ほどきを受けても形が崩れてしまつていて。

「おつすーやつてるねー。お好み焼き」

もはやわざととしか思えない間違えっぷりに逢川さんがげんなりとした表情で迎えた。

「お好み焼きちやうわたこ焼きやろ。というか言い出しつペ自分なのに何間違えとんねん」「結局同じ粉ものの料理なんだからいいじやん。細かすぎるよ」

「全然ちやうやろ。玉子焼きとオムライスくらいちやうわ」

「同じ卵料理じやん」

「括り同じでも中身の出来栄え全然違うだろ……」

「確かに……全然違う！ トロトロしてるオムライス好き～」

「なんやねん自分！　なんでうちのツツコミで納得せんねん！　和泉か!?　和泉への愛か!?」

「さすがぶつちゅーした仲！　This is 愛！」

「わたしたちが付け入る隙はもはやどこにもないわね」

「うんうん」

「ぶつちゅーしてねーいろいろおかしいだろ！　月歌も月歌だよ。早く納得しろよ！」

「言葉も交わさずに理解してくれ、と。さすがです和泉さん」

「マリーもいろいろおかしくない？　今ユツキーの株が上がる要素あつた？」

とまあ31Aの漫才は置いておくとして。

「それにもしても31Aのみなさんはたこ焼きの屋台にライブに大忙しですね♪」

「これもどつかの誰かが余計なこと言い出すせいや」「あれ？　スルーされた」

「そう言いながらめぐみさんは何かと嬉しそうにしてますけどね」「おーい」

「そりやあまあ……たこ焼きなんて久しぶりに食べるからな。関西の味、久しく食べとらん

かつたし」

逢川さんは哀愁めいた表情でたこ焼きをひっくり返した。

そういうえばお祭りといえば逢川さんが習志野ドームにいた最中にも開催されていましたといっている。こう話すということはあつちでは食べなかつたのかな。

それを國見さんが知っていたのかは定かではないけども。

「めぐみさん！　たこ焼きのおいしい作り方もつと教えてください！」

大きな声で前のめりに主張するのを見て、逢川さんは口許を綻ばせる。

「わかった。ただ、美味しい作り方の前にちゃんとひっくり返せるようになるのが先や」「はい！」

逢川さんと國見さんが笑みを浮かべると、他の31Aの人たちも揃って微笑んでいた。こんなやり取りを見ると、無理をしてでもおせつかいを焼いてよかつたと心から思う。あとでみんなにも報告しようっと。

「こっちでゴザルか？　もしかしたら拙者たちの部屋にいるのかもしれないでゴザル！」
……っと。もうこちらに占いの魔の手が。

「では、わたしは戻ります♪」

「うん。ありがとうございます。またよろしくね」

アーデルちゃんが31Cの部屋に入った頃を見計らい、鉢合わせしないよう寮を後にした。

ではここからはお荷物デリバリのお時間。ささつと済ませてしまいましょう♪

その一。30Gの桐生さんの元へ届けてみれば。

「こっちでゴザルな！」「祭の荷物を届けに来たぞこんちきしょーめ♪」

「ありがとうございます。しらか……これを心待ちにしておりました」

その三。31Bの水瀬いちごさんの元へ届けてみれば。

「あっちでゴザルか!」「本日限りの直送サービスだぞ♪」

「お、悪いな。景品から銃まで全部用意してもらつた上に持つてきてもらうなんて」としてその九。31Dの二階堂さんの元へ届けてみれば。

「今度はこっちでゴザルか。随分と動き回る人でゴザルな」「しつこい女は嫌われちゃうぞ♪」

「さ、佐月!? いきなりどうしたんだ!?'

「いけない。行くところすべてでアーデルちゃんの声が聞こえたものだからつい心の声が。「失礼しました。別に二階堂さんに言つたわけではないんですけど」

「そ、そうか。それならいいんだが」

「そうですよ。佐月さんがしつこいと言つたのは二階堂さんではなく私に違ひありません」
「おつとく? どうやら心の声が漏れるにしてもタイミングが悪かったみたいですね。」

「それも違うだろう。伊達は何もしつこいと思われることはしていない」

「私のこの自己肯定感の低い発言を繰り返すあまりしつこいと思われたのかもしれません」

「ええい! お前はここに来てから一度も口を開いていないではないですか!」

「そうだぞ♪ わかつたら自分を取り戻して前へ進みやがれ♪」

「は、はいいっ! この伊達朱里。自分を取り戻すためノンストップで喋り続けますう! 寿限無寿限無五劫のすりきれ海砂利水魚の水行末雲来末風来末——」

「寿限無を唱えてるだけな上に別に喋り続ける必要などないからな!?」

まあアーデルちゃんも近くにいるわけだし、伊達さんは二階堂さんが宥めているし、わたしがいるだけ余計にややこしくなりそうだから早く退散することにしよう。

「ではわたしもそろそろ失礼します♪」

「ああ、届けに来てくれてありがとう。また何かあつたらよろしく頼む。あと伊達は寿限無二周目に入るんじやない！ ノンストップってそういうことなのか⁈」

「お安い御用だぞ♪」

そんなこんなでデリバリーは終了。

アーデルちゃんたちが思つた以上にわたしの周囲をうろちょろしていたために思うように動けなかつたけど、わたしにかかれば避けて仕事をこなすことなんて造作もない。

もう遅い時間だ。ショッピングに来たはいいけど閉店時間が近く、おまけに客はない。

……今日はいろいろあって疲れてしまつたし、早めに閉店処理をしてしまおう。

「おや、佐月殿。こんなところにいたでゴザルか」

「つ…………！」

アーデルちゃんの気配に気づけず、つい身構えてしまつた。

「佐月殿…………？ 拙者、何かしたでゴザルか？」

わたしの反応を前にやや不安そうに見つめてくる。

様子がおかしい。というかさつきのように運命の人を探している様子でもない。

星羅ちゃんは近くに……いない？ 探すのはもう諦めたってことでいいのかな。さすがに

あれだけバテていたら時間の問題だったかな。とりあえず一安心かもしない。

「佐月殿……」再度声をかけられてわたしはハツとした。

「何でもないぞ♪」

咄嗟に誤魔化すような仕草になつてしまつて心苦しいところではあるけど、話を詰められる前に早く次の話題に切り替えた方がいい。

とはいえ、さすがに閉店処理の方も進めないと。

「あ、手伝うでゴザル」

「ありがとうございます♪ ……それより運命の人は見つかったんですか？」

「ナイン。53%というのは厄介でゴザルな。どうも占う度に違う方向を指したがために見つけることは叶わなかつたでゴザルよ」

「そうですか」

その割にはやけにわたしの近くに来る頻度が高かつたような気がする。

53%という枠では説明がつかないような引きだつた。わたしもほん常に移動している中でそれ違つた回数がどれだけあつたかを覚えていない。

「でもちょっとわかつたことがあるでゴザルよ」

「わかつたこと?」

「そうでゴザル。実は桜庭殿と基地の壁の近くで何度も占つてもらつたのでゴザルが、一度も基地の外を指すことがなかつたのでゴザルよ!」

「一度も? 外れる可能性が47%あるのではないですか?」

「ナイン! 運命の悪戯かもしけぬでゴザルが、期待してしまうでゴザルよ。もしかしたらこの基地にいるのかもしれないと! 拙者を助けてくれたあの忍者殿が!」

だとしたらわたしが常に動いていたのもほんの無意味だつたのかな。

確かに星羅ちゃんは『一つの占いに対し、何度も同じ結果になる』と明言していた。

これが運命の人! わたしという結果で方角を出していたとしたら、結果はわたしのいる方角を常に指す……とか? うーん……星羅ちゃんの占いの結果そのものがどこからどこまで適用されるのかわからぬ以上なんとも言えない。ややこしいことこの上ないなあ。

これ、明日もやるとかないよね。だとしたら場所によつてはバレるのは時間の問題だ。

ほんと星羅ちゃん、どういうつもりなんだろう。

「そうだと思いますね」

もはや誤魔化す方法を考えた方がいいかもしれない。

また星羅ちゃんが近くで占うんじやないか、気が気でなかつた。

Days Hydroperish

カーテンの隙間から夏の日差しが舞い込んでくる。

その光は豊後の顔へと向けられ、目を開ける。待っていたかのように山脇が頭を撫でた。

「おはよう豊後。気分はどうだい」

「山脇様……？　おはようでゲス」

「今日はこれでもかつてくらいいい天気だね」

「セミの鳴き声が聞こえるでゲスよ。夏が来たんでゲスね」

一瞬の間。山脇は苦虫を噛み潰したような顔になるも、すぐに笑顔を作る。

「……ああ、夏だよ！　お祭りにプールに花火に、たくさん楽しもうじやないか！」

夏はまだまだ長い。誰もがそう思うところではあるが、豊後にとつての夏は違う。

思い出は彼女のの中には残らない。

こんなことをセラフ部隊に配属されてからも何度繰り返してきたことか。

豊後は知らずに一週間しかない夏を数回過ごすことになる。

それでも、山脇には笑わなければならぬときがある。

何度も思い出を忘れ去られても。どんな思い出をなくしたとしても。

豊後が楽しそうにしているところを見るだけで、不思議と活力になつてくれるから。

※

「またこのときがやつてきてしまいましたか」

ぶんちゃんの記憶がリセットされたところを見るのはもう何度目だろう。リセットされる度にイヴァールちゃんの辛そうに笑みを作る姿を見る。

「仕方あるまい。わしの薬はあくまでリセットするまでの期間を引き延ばしているに過ぎん。根本的な原因を治さぬ限り、リセットは避けられない」

巫呼ちゃんの薬のおかげで記憶が一週間は保持されるようになつたとはいえ、状況はいいとは言い難い。記憶が保持される期間が長くなつたということは、一度にリセットされる記憶の量もそれだけ増えるということ。それだけ喪失感も大きくなつていく。

こんなことを繰り返していたらいつかイヴァールちゃんの心が壊れてしまうんじゃないかな。とも不安になる。

「とはいえ、まだ国道復旧任務が残つていてゴザルよ。ここでのリセットは痛いでゴザル」「……そうなると、今日も同じやり方をするしかなさそうですね」

それでも、今日も任務をこなさなければならぬ。

一足先に富士市から回って富士宮市へ。

昨日と同じ班分けになり、わたしたちは引き続きハブキヤンサーを探すことになった。
ぶんちゃんは保護者がついていないといけないし、今日は特に記憶がリセットされたばかりでセラフの使い方から教えないといけない。イヴアールちゃんの判断は最大限尊重するし、これが一番の最善手だとわたしは思う。

「……では今日は復旧作業組に大事がないかを占いましょう」

「それ、せめて移動中にやればよかつたのではないでしようか……？」

だつたら三人だけじゃなくて全員で聞けたような気がする。

「まあまあ、53%の占いならいつやつても変わらないでゴザルよ」

忍者殿が基地にいることを信じたい人がそれを言いやがるんですね……。

なんて思いつつ、別に否定するわけでもなく星羅ちゃんの占う様子を黙つて見つめる。

なんだかんだわたしも今後の展望は気になつてはいる。

それと、星羅ちゃんの占いの的中率そのものにも――。

「……見えました。これは……！」

「何かあつたでゴザルか!?」

いつにもなく迫真めいた口調だからか、アーデルちゃんが食い気味に訊き返した。

「……一週間後。豊後さんの笑顔で焼肉を口にしていました」

「何事もなく平和つてことですね♪」

ということであればそれまで何事もなく任務も遂行できるということ。

例に漏れて占いが外れている可能性はありつつも、吉兆が出たことに嬉しく思う。

「何もない……で、ゴザルか」

と、わたしの横でアーデルちゃんは物思いにふける。どうしたんだろう。

「アーデルちゃん?」

「桜庭殿。もう一つ占つてもらいたいことがあるでゴザル」

アーデルちゃんが提案したもう一つの占い。それはハブキヤンサーのいる方角。

要するに昨日の忍者殿を探すのと同じ要領で人ではなくキャンサーに対しての占いだ。

「考えましたねアーデルちゃん。確かにこの方法なら効率よく目標を補足できそうですね♪」「やー! 桜庭殿がこっちの班にいてくれたのも何かの縁でゴザルよ」

こんなことは星羅ちゃんも初めてらしく、的中率もいつも以上に低くなるかもしれないとのことだつたけども、ただ闇雲に哨戒するよりも昨日と同じように占いながら進んで行つた方がいい。これに加えて威力偵察用のドローンも使えばより効率的に、より安全に見つけることができる。

「……三時の方角です」

星々が示す方角と頭の中の地図を照らし合わせてみる。青木ヶ原樹海の方向。わあ、心躍りますね♪

「ちょうど積乱雲があるのでゴザル」

「いい目印ですね♪」

ひとまず積乱雲を目指しながら度々占つてもらえばそのうちハブキヤンサーを見つけられるかも知れない。

そんなわけでわたしたちは上を向いて歩こうとばかりに先へと進む。

「……星ばかりに気を取られていてはなりません」

「確かに上ばかり見ていては下のこと忘れがちになるでゴザルな」

「かつて自殺の名所と名高かつた樹海ですからね♪ いろいろと注意しながら進んでいきましょう♪」

星羅ちゃんの言う星つて上のことじやなく占いばかりを信じないでほしいって意味なんじやないかと思うけど、今回ばかりは占いを完全に信じさせてもらいたいところ。それくらい他に手がかりがないんだから仕方ない。

「ときに樹海といえばいろんな都市伝説を聞くでゴザルな。コンパスが使えないとか、死体が転がっているとか」

「コンパスはともかくとして、このご時世ですからね」

とはいつたものの、辺りには死体は一つも見当たらない。ここらにキャンサーが蔓延っているせいなのか、結局噂に過ぎない出来事だったからなのか。どっちにしても樹海は噂より綺麗に見える。

「……コンパス、確かめてみますか？」

どうして持っているのかというツッコミはともかくとして、星羅ちゃんが水晶の代わりにコンパスを手に持つては三人で見つめる。

ちなみにコンパスが使えないのもこれまた都市伝説止まりだ。地中の磁鉄鉱がコンパスに干渉して狂わせてしまうと考えられていたらしいのだけど、それでも真相は自分の目で確かめたいのが人の性。

「って、あれ？ なんか……狂つてますね……」

見るとコンパスの針がぐるぐると滅茶苦茶な回り方をしている。これはさすがにおかしい。「都市伝説は本物だつたでゴザルな！」

「そんなわけないぞこんちきしょーめ♪」

「ヤーッ!?」

キヤツキヤと心躍らせるアーデルちゃんを横目にわたしはセラフを呼び出し、弾丸の雨を磁場の根源へと浴びせてゆく。

周囲の気配が完全に消え去ると、滅茶苦茶だつたコンパスがしつかりと北を示した。

「……なるほど。キャンサーの発していた電磁波の影響でしたか」

キャンサーの外殻は特殊な磁場を発してお互いを認識していると言われている。

これ、コンパスにも影響するんだ。初めて知った。

「冷静に分析している場合ではないでゴザルよっ!? 今ので気づかれたでゴザル!」

アーデルちゃんの大きな声がさらに波紋を呼び、ぞろぞろとキャンサーが押し寄せてくる。火を纏つた個体たちが大量にやってきたのでここはまたわたしの出番。

「樹海は火気厳禁、だぞ♪」

火が木や草に移らないうちに氷の射撃で 駆除駆除駆除^{ゴミ}。アーデルちゃんも大剣を振つてはキャンサーたちを一刀両断していく。

害虫駆除業者になつた気分だ。ハブキャンサーがいるという割には手ごたえもまるでない。「星羅ちゃん。そろそろもう一度占つてみていただけますか?」

懐疑的になつて今一度確認してもらう。星羅ちゃんが示す占いの先に一体何が潜んでいるのか気になつて仕方がない。それはハブキャンサーであつても、他の何かであつても変わらない。

「……見えました。次は十二時の方向です」

「正面……また積乱雲のある方向ですね」

その後、しばらく移動しては占つてを繰り返しても、同じように積乱雲のある方向を指す。

偶然とは思えない。恐らくあの積乱雲の真下に何かが潜んでいる。

二人も同じ見解のようだつた。息を呑んでは警戒しつつ、先へと進んでいく。

そして、積乱雲に近づくと星羅ちゃんが気づく。

「……コンパスが、滅茶苦茶です」

「ぐわんぐわんでゴザルな」

言い方がかわいい……。というのはまた別の話として、さらに警戒して進むとわたしは足を止めて二人を静止させる。

着いたのはキャンプ場の跡地と思われる場所。広場にて火を纏つたキャンサーたちが集合してそのままうじやうじやと気持ち悪く踊つているようだつた。

「……あれは、一体」

「まるでウジ虫みたいに集まっていますね」

「どうするでゴザルか？ 多勢に無勢、ということにはならないと思うでゴザルが」

「確かに、ウジ虫のように集まっているとはいえ、今のわたしたちなら完膚なきまでにブチ殺すことができそうし」

「なんか今日の佐月殿、いつも以上に言動が荒れ狂つていてゴザルな」

苦笑されたのはともかくとして、アーデルちゃんの言う通り、対処は簡単だ。
むしろ簡単に倒せるなら後の被害もなくなるので倒しておくに越したことはない。

「……ただ、あの中にハブキヤンサーらしき個体がいないのが気になります」

「占いは外れたということでゴザルか？」

「……今の段階ではなんとも」

星羅ちゃんの占いによつてここに導かれたのにハブキヤンサーと思わしき個体はどこにも見当たらない。たまたま進路の途中に集まつてきているのかもしれないけど、それにしてもこうして集まつている理由は何なのがも気になるところ。

「一応、ここでドローンを飛ばしてみます。大きな反応があるかもしれません」

わたしは威力偵察用の小型ドローンを呼び出し、キヤンサーに気づかれないように飛ばしていく。キャンプ場の周囲をぐるつと見渡してみる。周囲に敵影なし。ここら一帯にいるキヤンサーは一か所に集中していることがわかつた。

「念のため、もう一度占つてみるのはどうでゴザルか？」

退屈そうにしていたアーデルちゃんが提案した。

確かに目標が移動している可能性も考えるとここでもう一度占つてみるのはいいかもしれない。移動していたならあの集団に対する不安も杞憂に終わるだろうから。

「……やつてみます」

星羅ちゃんは水晶と向き合い、ハブキヤンサーの居場所を占う。

「ところで佐月殿。こちら一帯、雲が差し掛かっているとはいえやけに暗くはゴザらぬか？」

「積乱雲ともなると光は入りにくいものではありませんか?」

そもそも分厚い雲があるとその分入つてくる光も少なくなるもの。

おかしいことはない気がする……けど、確かに雲が黒いような……?

雨でも降るのかな。

「……出ました。星によるとハブキャンサーのいる場所は——」

星羅ちゃんの占いの結果が出ると、指示示した方角は、

「——上です」

三人一斉に見上げると、雲から何かが降つてくる。白くて巨大な……球体?
キャンプ場を圧し潰せそうなくらい大きい。そう気づいた瞬間、

「っ!? 二人とも、逃げてッ!?」

わたしは嫌な予感を察知し、強く叫ぶ。一斉に踵を返してとにかくキャンプ場から離れる
ようにして逃げていく。

「何でゴザルかあれは!?」

「……恐らくハブキャンサーかと」

何が起ころかはわからない。

わからぬからこそ、逃げなきやいけない。

それ以外のことはとにかく考えられなかつた。

そして、やがて球体が地に着いたその刹那——。

積乱雲が一斉に晴れていく。そんな爆発が巻き起こる。

それは、戦争が幕を開けたかと錯覚したかのよう。

キャンプ場どころではない。樹海の一部を壊滅させる爆風がわたしたちを襲う。

「ヤーッ!?」

全員が爆風に吹き飛ばされる。木の枝から岩石まで飛んできたため、トランスポートや空中で体勢を変えるなどしてなんとか回避し、着地。ただそれでも二百メートルは吹き飛ばされた。普通の人だつたら複雑骨折している。

「佐月殿に桜庭殿。大丈夫でゴザルか!?」

「な、なんとか……」

「……佐月さんが退避命令を出してくれなかつたら危なかつたです」

誰も怪我をしていないのは訓練の賜物と評するべきか、不幸中の幸いというべきか。どちらにしてもこれは只事じや済まない。

「それよりもあの爆発は何だつたのでゴザルか

「……辺り一面にあつた木々が、すべて吹き飛びました」

まるで核爆弾を投下されたかのような衝撃。わたしも動搖が隠せずにいる。

だけど思考停止してはいけない。

こういうことがあつたからこそ、しつかり物事を見て分析しないと。

球体は空から降つてきた。だつたら敵は空にいるはず……いた！

「見てください。あのキャンサーが爆発を起こした奴の正体なのでは？」
キャンプ場跡地のちょうど真上と思わしき場所。積乱雲も完全に晴れて、代わりに現れた
のは気球を真っ逆さまにしたかのような見たことのない個体がいる。

ぶら下げているのは先ほど投下した爆弾と同じ物かもしねない。

「なんだか思つたよりも小さいでゴザルな。遠目だからでゴザルか？」

「……いえ、よく見てください。白い何かが少しづつ膨らんでいるように見えます」
遠目ではわかりにくいけども、確かに白い風船みたく膨らんでいる。あれが先ほどと同じ
大きさになつて爆発を引き起こすのかも。今までに見たことのないタイプのキャンサーだ。
これは……一筋縄ではいかなさそう。

『佐月！ 聞こえていたら返事をして』

ふと、電子軍人手帳を通して無線が入つてくる。イヴアールちやんだ。

「聞こえています。そつちでも聞こえてしましましたか」

『大きな爆発がここからでも見えたわ。全員無事なの？』

「なんとか怪我もなく退避できました。星羅ちゃんの占いのおかげです』

『それはよかつた』無線越しでもホツと息を撫で下ろす音が入った。『爆発の正体は何?』
 「上からいきなり大きくて白いボールのようなものが落下してきて、それが爆発したようだ
 す。その後、空中で浮遊しているキャンサーを確認。今も同じものと思われるボールを膨ら
 ませながら上昇しています』

『地上から攻撃できそう?』

もう一度例のキャンサーを視認する。あの高さは……東京にあのくらい電波塔があつた。
 「あまりにも高い位置を浮遊しているので難しそうです。高度600メートルといったところ
 でしようか』

『了解。こつちに戻ってきて頂戴。あとボールの残骸などがあれば持つて帰つてくること』
 イヴァールちゃんからの無線が切られると、ひとまず帰路につくことになった。

その途中でボールの残骸があれば、と辺りを見渡しながら移動していると、往路にはなか
 つたぶよぶよの白いものがそこらに落ちているのが見える。

『液体……?』

※

結局のところ、あの球体の残骸らしきものは他に見当たらず、白くてドロドロとした液体

しか持ち帰ることができなかつた。

七瀬さんに渡して成分の解析をしばらく待ち、やがてわたしは司令官室へ呼び出された。

「お疲れ様。七瀬からある程度のことは聞いているわ。まずは無事で何より」

先に全員が怪我をしていないこと、そしてハブキヤンサーと会敵した状況の再確認を行つた。

司令官はハブキヤンサーを探すのに占いを使つていたことに目を見開きながら聞いていたけども「31Cらしいわね」と言つては納得している。司令官としても星羅ちゃんの占いは信用しているみたいだ。

「ところでのキヤンサーについて何かわかつたことはありますか?」

「そうね。あのキヤンサー——Hydroperish はまだわからないことは多いのだけど、現時点
で判明していることは三つある」

個体の名前がもうついているらしい。ハイドロペリッシュ……滅びの……水……?

「まず一つ目はあなたの持ち帰つてきた液体が非ニュートン流体だった」

「非ニュートン流体……与えた力によつて粘度が変わる性質のことですよね」「よく知つてるわね。座学では教えられていないはずなのだけど」

「防弾チョッキに用いられていますから」

いちセラフ部隊として防弾チョッキを使うことはないものの、軍が身近にいるショッピング

員として物の作られ方はある程度頭に入れていた。

そもそもその話として流体には二つの種類がある。ニュートン流体と非ニュートン流体。この二つの違いはわたしが言つた通り与える力によつて粘度が変化するという点にある。

たとえ話をすると、水とマヨネーズを攪拌する速度を段々早くしてみるとわかりやすい。水は常に一定の力で済む一方、マヨネーズは段々と加えなければならぬ力が強くなつていく。要するに粘度がどんどん高くなつて必要な力が拡大しているという話だ。

「つまりあのボールは自由落下と共に空気抵抗も強くなり、より強固な形を作つていた。しかし着地後は何の力も加わらなかつたために粘度と共に形を失い、中に入つていた着火剤が剥き出しになつて爆発したというわけよ」

爆発してもしなくとも落下物としての衝撃も凄まじいし、爆弾としての威力も申し分ない。もしも実物を見なかつたとしても話を聞いて辟易としてきそうだ。

「それにも中に着火剤が入つてゐるんですね」

「そう。それがわかっていることの二つ目。爆発の正体が水素爆発だった。簡単に言つてしまえばボールの正体は核を用ひない水素爆弾といつたところかしら」

思わず息を呑んでしまつた。

水素爆弾と水素爆発は厳密には異なるものだ。威力の面で考えれば単なる水素爆発のみであつたことはまだマシと思うべきなのかな。

それでも水素爆発だつて悔れない。実際にわたしの目の前で起こつた爆発だつて軽く二百メートルは吹き飛ばされたわけで、たつた一回の攻撃でドームが壊滅するかもしれない。「もしかして着地地点に火を纏つたキャンサーがいたのって……」

「それが三つ目。ハイドロペリッシュは地上にいるキャンサーと連携を取る」
ボールが形を失い、水素が剥き出しになるとキャンサーが持つ火が引火して爆発する。
たつたそれだけの話。

「だとすると地上のキャンサーを掃討するだけで対処できるかもしませんね」
「そう簡単だといいのだけど……」

「何か問題が？」

訊ねると司令官が映像を見てくれる。

逆さまな気球のような形——ハイドロペリッシュをアップにした動画だ。
わたしは側面から出てくるそれに目を見開いた。

「地上にいたあのキャンサーが、生まれている……？」

「このキャンサーは連携を取るための子キャンサーを生み出す能力がある。地上のキャンサーを倒したところで一時しのぎにしかならない」

その前に巨大なボールを落とされた時点で尋常ではない被害が出ること請け合い。
対処するなら落とされる前に行わなければならないという前提が出てくる。

だつたら――。

「中身が水素なら、ミサイルか何かで引火させて空中で爆発させるというのはいかがでしょう？ 浮遊能力だつて水素を利用しているようですし」

「そうね。佐月さんの言う通り、相手の予期しない爆発を起こせば、地上戦へ持つていける」見た感じ、一度爆発させてしまえば再びボールが膨みきるには時間がかかる。
浮遊能力を失いつつある状況を作り、爆発の予断を許さないようにしてしまえば一気に叩くことだつてできるかもしねない。

対処法を画策してしまえばそんなに難しい相手ではない。

「ただ……」

そう思つていたところに、司令官はまだ懸念点があるようだつた。

「あの液体の成分を解析しきれていないのが不安材料ね」

場所は変わつて31Cの部屋へと戻つてきた。

「それで、不測の事態に備えて今回も31Aが討伐することになつたわけね。まつたく……」司令官との話も終わり、みんなの前でイヴァールちゃんにことのあらましを報告すると、やるせない表情で受け止められた。

凄まじい爆弾を所持しているとはい、ハイドロペリツシユそのものの強さは大したこと

がないことから、キャンサーとしてのレベルは2とされた。これはロータリー・モールと同レベルで、今のわたしたちなら問題なく倒せるくらいはある。

ただ、ハイドロペリッシュはまだわかつていないことが多い。司令官は何かあつたときのために冷静に対応できる31Aを前線に討伐させたいとのお達しだった。

正直、仕方のないことではあると思う。

わたしたちは不測の事態に慣れているわけではない。わかつていてイヴ・アールちゃんも強く出ようとしないのだろうけど、それはそうとして自分らが力になれないことに対する複雑な心境はわたしも同じ思いを抱いている。

「ときに成分の解析を待てない理由は何でゴザルか?」

「今回のキャンサーは空から爆弾を落としてくるからな。ドームの領空に入られ、攻撃される可能性がある。なりふり構っていられないのだろう」

「……空にいる敵というのは厄介なものですね」

「あそこまで高いところにいると、攻撃も簡単に届きませんからね。31Aのみなさんがどうにか接近戦に持ち込めるといいのですが」

ちなみに31Aはもう明日には討伐に出ること。ひとまずミサイルでボールを空中爆発させてみて、無理ならまた改めて作戦を練り直すようだ。
何事もなく終わってくれればいいのだけど……。

「ま、あいつらなら何とか討伐できるでしょ。私たちにできることはもうないのよ」イヴァールちゃんはぶんちゃんを連れて二人でどこかへ行つてしまつた。

多分夕飯を食べに行つたのだと思う。これはみんなで食べる余裕はなさそう。部屋から出ていくのはもう一人いた。

「山脇の言う通り、わしらはあいつらがハイドロペリツシユを討伐するまで持つていた任務をこなすこともできん。しばらく研究に没頭することにする」

「巫呼ちゃんまで……」

「できることはないのだろう？　だつたら31Aの士気を上げるためにも近く行われる祭を盛り上げるための準備でもしたらどうだ。わしはもう行く」

バタン、と扉の閉まる音がいつも以上に大きく感じられた。

「お祭り、決行するんですね」

「ヤー。天音殿も言つていたこともそうでゴザルが、今回の作戦はレベル2のキャンサーが相手といふこともあつて参加部隊も少ないでゴザル。きっと何事もなかつたかのように終わるでゴザルよ」

確かにフランクトハンドを相手にしたときのような部隊数でもなければ、作戦も小規模だ。懸念点はいくらかあれど、司令部からしてみれば今回の敵は恐るるに足らずなのか。本当に？

「本当に、 そうなのでしょうか？」

わたしはどうしても安心しきることができなかつた。

ハイドロペリッシュについてわかっていないことが多いのはもちろん、この三日間で行われた今回の作戦に対する星羅ちゃんの占いの結果にも強烈な違和感があつたからだ。

「ヤー。幾度となく窮地を乗り越えてきた31Aなら今回も問題ないでゴザルよ」でも少なくとも31Cのみんなはわたしほど不安に思つていいようだつた。

考えすぎなのかな。

「さて。拙者はまだ決まつてない明後日の屋台を何にするか考えてくるでゴザル」

わたしの懸念も他所に、アーデルちゃんも部屋を出ていく。

といふかお祭りは明後日開催なのにまだ決まつてなかつたんだ……。

「……皆さん、いろいろとお忙しいようですね」

と、すごいタイミングで星羅ちゃんと二人きりになつた。

「そう言う星羅ちゃんはお祭りで屋台を出さないのでですか？」

「……私の占いはああいう場でわざわざ出さなくとも希望する方はいらっしゃいますから希望する人がいる、か。

そつか……。

「星羅ちゃんの占い。的中率が本当に53%だったとしても、人気がありそうですよね」

……。

沈黙がその場を走った。

星羅ちゃんからの視線を感じる。

ただ、わたしの横顔だけを見つめて、その場で静止して様子を窺つてきている。何を考えているのかわからない。何も考えていないのかもしれない。だけど、ただ一つ言えることがあるとしたら。

「……………いつから気づいていましたか？」

わたしの推理は当たっていたということだ。

目を合わせずに話を続ける。

「まさか。確信はありませんでした。今のはカマですが、昨日からやけに占いに対し絶対的な自信がありそうでしたし、妙に固執しているところもあって変に思つてたんです」

わたしの中で違和感が生まれたのはアーデルちゃんが運命の人を探し始めたところだった。占いの本質は人の心の内や運勢、未来など、直接観察することのできないものについて判断、予言すること。そのうち方角に関連するものに占う対象の吉方位というものがある。

しかし、星羅ちゃんは吉方位という言葉すら使わず『その運命の人がいる方角を占う』と
きっぱり答えたらしい。そして案の定、すべて覗えているかのようにわたしのいる方角へ導
いてみせた。常に移動し続けているとしてもお構いなしだ。

きっと、あのときの星羅ちゃんは吉方位という単語をあえて使わなかつたんじゃないかと
わたしは予想した。それこそ以前、研究施設での任務で似たような占いをしていたけども、
やつぱりあれはわたしのことを指していたよう思える。アーデルちゃんは自ら納得するよ
うに解釈をして終わつたこともあって、今回ははつきりと伝えて希望を持たせる必要があつ
たのかも。

絶妙な的中率も何かカラクリがあるのかもしれない。

例えば完璧に当たる占いであつても、星羅ちゃんというフィルターを通してそれらしいこ
とを言つたとか。もしくは適度に嘘を混ぜていいとか。まあこれについては過去の『運命の
人』がどう解釈され今に至つたかを考えればいい。

それより、星羅ちゃんには占いの真実よりも大事なことを聞かない。

「何を焦つていいんですか？ わたしとアーデルちゃんの事情を占いで知つたのかもしれない
せんが、これ以上干渉されるとさすがのわたしも怒ります」

というかもう既に怒つていい。怒つていいところを隠して星羅ちゃんに優しく諭してい
人の事情に土足で上がり込んで、荒らされたらたまつたものではない。

「……野暮つたることは承知の上です。それこそあなたが怒ろうとも、わたしは神崎さんと、佐月さん。あなたたちが報われるためには必要なことをするまで」

そう思っていたのに、星羅ちゃんは引き下がろうとはしなかった。

むしろ開き直っていることを受け、わたしの語気が強くなろうとしていた。

「わたしは今まで十分幸せです。アーデルちゃんが運命の人がわたしだと知つて喜ぶとは限りません。アーデルちゃんが今不幸ならまだしも、それをづけづけと首を突っ込んで。星羅ちゃんのせいだ31Cがまともに機能しなくなつたらどう責任を取るんですか」

「……責任、ですか」

思案している、ようだつた。

少しして、わたしが続けようとしたところで星羅ちゃんの方から口を開く。

「……私は、この未来を見据えた上で何もしないでいたときの責任の所在を知りたいです」

その言葉に、背筋が凍り付いた。「どういう、意味ですか」

すぐには答えてくれない。わたしがいろいろ言つたから、考えがまとまらないのかも。

「星羅ちゃん教えてください。アーデルちゃんに、何が……何が視えたんですか」

目の前で静かに息を呑む。

星羅ちゃんにしては珍しい所作だと思つた。

「……いい機会です。佐月さんにも私が視たすべてをお伝えします」

星羅ちゃんが星に問い合わせた占いの結果を二文字で表そうと考えた。
予想は愚か、予測でもない。
予言……いや。

——預言だ。

(Day 4) 成層圏からの挑戦状

樹海に配備された迎撃ミサイルの側で31Aは臨戦態勢に入っていた。

『——目標確認。3……2……1……発射！』

七瀬の掛け声の直後、無数のミサイルが放たれた。

目標に向かって真っ直ぐ飛んでいくそれは、安易に避けることは叶わない。ゆえに水素爆発が起き、対象が撃墜されるかのように思われた。

だが、

「おいおいおいおい……周りにいるのが邪魔でまともに当てられてないぞ……」

和泉ユキが空の様子を見ては唇をひきつらせる。

ミサイルはハイドロペリッシュュを囲っている子キャンサーが代わりに受けることで阻害され、水素爆発を誘発させることはできなかつた。それどころか、ミサイルの爆風によつて逃げるかのようにさらにボールを膨らませ、上昇していく。

『31A聞こえる？ ハイドロペリッシュュへの攻撃は失敗したわ。これ以上の攻撃は不可能と判断します。すぐに戻ってきて頂戴。作戦を立て直すわ』

ミサイルが尽きるよりも前に、判断が早く下された。

※

作戦が失敗したとの連絡を受けた約二時間後、ハイドロペリッシュュを最初に目撃したわたしとアーデルちゃんを含め、31Aのみなさんと作戦会議を行う運びとなつた。

司令官室へと赴いてみれば、キャンサーを逃したことでどこかピリピリとしている空気が感じられて居心地が悪い。

ところで東城さんの表情がいつもと違うような……？　この人こんなにキリつとした目つきしてたっけ？　どこかアホっぽいのほほんとした顔はどこに行つたのやら。などと失礼なことを考えていると、彼女から切り出される。

「一筋縄ではないかないわね。キャンサーにはセラフしか効かない以上、数を撃てばいいつてわけでもないでしようし、手詰まりなんじやない？」

「逃げるよう高度を上げていきましたね」

キャンサーにミサイルは決定打にならない。

水素爆弾を守っている子キャンサーをどかすことは物理的に不可能だ。しかし、子キャンサーをどうにかしないことには水素爆弾の対処のしようがない上に、ハイドロペリッシュュを地上に引きずり込むことすら不可能。

手塚司令官は帽子の位置を直した。

「現在のハイドロペリッシュのいる高度は一万メートル。成層圏にまで到達している。完全に藪蛇やぶへびになってしまったわね。どうしたものかしら」

言つては変だけど、今回の相手はお互いの状況をかなり理解している。

空中戦はできることを見越して、さらに高みの見物ときた。おまけに子分に周囲を守らせて不用意に爆発も起こさせないとしている。

高度一万メートルまで浮遊できるくらいに水素爆弾を膨らませているんだ。これが地上で爆発を起されたのでは、今度こそ一大事になってしまう。

ただ、東城さんが言う通り手詰まり感が否めない。成層圏にいるキヤンサーを引きずり込む方法はないのかな。

「ヘリに乗つて届くところまで攻撃するはどう?」

茅森さんの一言に手塚司令官がため息をついた。

「子キヤンサーに襲われて間違ひなく墜落するわ」

「じやあさじやあさ、その出てくる子キヤンサーを足場にしてアスレチックみたいに飛んでいくつてのは?」

「足場が不安定すぎるわ。踏み外したらどうカバーするの」「パラシュートを使えばいいんじゃない?」

「それだと降下しつぱなしで諦めることになるぞ……」

さすがの適當さ加減に和泉さんも辟易としてきたようだつた。

意見があるのはいいことだと思うけど、付け焼き刃が過ぎるというか。それで物事が解決するなら司令官もここまで悩んでいない。

「そこをアーラーみたいにうまく風を捕まえて飛ぶとかできないかなーって」

「つ……」

思わぬ提案について身構えてしまつた。

でも結果的にわたしの聞き間違いで、そんな必要はなかつたと表情を元に戻す。

「いい風が吹いていればできるかもしけないでゴザルが、その確証がない上に数日で習得できることではないでゴザルよ」

それに、標高が高いほど風も強くなる。純粹に上へ吹く風だつたらまだしも、通常の風は横向きだ。それをうまく捕まえて成層圏まで辿り着こうとするなんてアーデルちゃんでも難しいと思う。

「じゃあどうやつて戦えばいいって言うのさ！ ミサイルも届かない。こっちから空に行こうにも手段がない。完全に手詰まりじゃん！」

「そんなことはないんとちやうか？」

匙を投げそうにあつた茅森さんに向かつて関西弁が放たれた。

「逢川さん。何かアイデアがあるの?」

「まさかここでめぐみんのサイキックの本気を……?」

横で國見さんが「ワクワクワクワク」と心を躍らせてている。茅森さんの発言が期待値を上げすぎたのもあって逢川さんはため息を一つついた。

「いくらうちでもそこまでは無理や。ただ、サイキックなんかよりも最近、長距離ででつかい釣りみたいなことしとった道具があるやないか」

「でつかい釣り……? ユツキー知ってる?」

「さあ、あたしも皆目見当がつかないぜ」

「なんでや。伝わるかと思つたんやけどな。フラットハンドやスカルフエザーでも使つたアレやアレ」

「……なるほど、確かにああすれば確かに逆さ釣りみたいになります!」

使つた対象を挙げられてわたしもわかつた。

「ごめん。おタマさん。何言つてるか全然わからないんだけど、あたしにもわかるように教えてくれない?」

「イメージスの鎖のことだろ。逢川」

「そうそれや!」

確かに逆さ釣りっぽくはなるかもしない。今回のハイドロペリッシュュだつて逆さの気球

みたいなものだし。

「今まで動きを封じるために使っていたイージスの鎖を、地上へ引きずり込むために使うつて魂胆つてわけね」

「え、あれってそういう風にも使えるの？ 飛距離とか大丈夫？」

「琵琶湖でも使つてただろ。あの距離に比べたらハイドロペリッシュのいる高度なんて余裕だ」

参考までに琵琶湖で用いた距離は約二五キロメートル。今回の高度が十キロメートルだということから心配はない。

「そうね。イージスの鎖を使えば更なる上昇を防ぐこともできるかもしれない。このアイデアは使えるわ」

「よっしゃ」

逢川さんがそうガツツポーズをしたのも束の間。

「ただ、忘れてないかしら？ ミサイルを撃つたときのことを」

「どうしても子キャンサーが邪魔だ」

「そう。イージスの鎖を使うにしてもミサイルの二の舞を踏むことになる。子キャンサーをどうしかしないことには何も始まらない。」

それこそ針の穴に糸を通すような技術でもあればいいんでしようけど、現状地上からの攻

撃は無理だと考へるしかないようと思える。

「じゃあ結局振り出しに戻るつてこと?」

「そう言つてる」

「えー!? じゃあなんだつたのこの議論ー!?」

「仮に墜落させることができた後の再上昇対策が固まつただけだな」

「そんなあー!」

作戦会議も終わり、その日は解散となつた。

早く倒したいところではあるものの、現状ハイドロペリッシュは成層圏で停滞していて、動く様子も見られないことからまだ時間はあるとの判断が下された。

ただ、危険の芽はさっさと摘み取つておくに限る。

最悪一瞬でドームどころか基地まで滅びかねない爆弾を持つてゐる相手だ。時間はあるよう見えて、いつ動き出すかはわからない。司令官は検討している最中だとは言つていたけど、果たしていつ頃浮かぶのやら……。

わたしの中にはドーム住民の安全面から早く浮かんでほしいという気持ちと、自己都合の面から永遠に浮かんで欲しくないという気持ちが両天秤にあつた。

後者は自己中心的な考へそのものだけど、昨日の星羅ちゃんの言つていたことを信じると

そう考えたくもある。

でもきっと、近いうちに作戦が立案されるんだろうなあ。

「これまた苦戦しそうでゴザルな」

アーデルちゃんがわたしの顔を覗き込むように口を開いた。

「そうですね。まずハイドロペリッシュを地上へ引きずり込むか、空で襲撃し浮遊できなく

するかが固まらない限りどうにもならなさそうです」

「せめて拙者にもできることがあればいいのでゴザルが……」

「わたしたちにできることは何もないですよ」

わたしはハッキリと言う必要があった。

仮にあつたとしてもアーデルちゃんに何かをさせるわけにはいかないから。

「いやあしかし、茅森殿も言っていたでゴザルが、何かあると思うでゴザル」

はて、茅森さんが言つていたこと……。ああ、飛んでいくとかそんな話もあつた。

あれは無理だという話になつたはず。ムササビの術は一朝一夕で得られるものではないし、あれはアーデルちゃんだからこそ使える技だ。

「たとえば拙者が撃墜役を買って出るとか、風を捕まえてキャンサーを倒しながら飛べば道は切り開け――」

「それはダメですツツツツ――！」

一瞬の間。無意識に大声で遮ってしまったことに気づいたわたしはハツとした。

「さ、つき……どの？」とアーデルちゃんの狐につままれたような表情だけが視界に入る。「あ、いえすみません。急に大声を出してしまって。驚いたやいましたよね」

「気にすることはないでゴザルよ。珍しいでゴザルな」

「たった一言で過敏に反応するなんて、わたしらしくない」

「わたしを案じてなのか、アーデルちゃんはじっとわたしだけを見つめ、微笑んでくる。その優しさが、よりわたしを苦しめた。

「所詮机上の空論でゴザルよ。風を捕まえるにしてもそう都合のいい風が吹いているわけもなく、拙者だけで子キヤンサーを殲滅できる保証もないでゴザル」

アーデルちゃんの言う通りだ。風はあっても成層圏まで行くことは叶わない。

仮に辿り着けたとしても敵の数が問題だ。アーデルちゃん一人で大量のキヤンサーを相手にしなければならないわけで、無謀がすぎるというものの。

「けど――」

「けど？」

「唯一、拙者だけがあの高い大空でキヤンサーと戦うことができるのだとしたら、それほど目立つことはないでゴザルよ」

アーデルちゃんらしい答えだな、って率直に思つた。

「視認できないほど高くとも、ですか？」

「きっと、空まで行けば。あの人なら見つけてくれるでゴザル」
息を呑む。

どこまでもアーデルちゃんはアーデルちゃんだ。

目立ちたがり屋で、幼い頃に助けてもらつたあの忍を追いかけている。
その純粹な気持ちだけで今を生きている姿が眩しくて仕方がない。

「53%……的中しているといいですね♪」

「ヤー！　きっとセラフ部隊で見守ってくれているでゴザル！」
眩しさに負けないような作り笑顔を、アーデルちゃんに向かた。

※

「ときには佐月殿は明日のお祭りで何を出すか決めたのでゴザルか？」

「えっ？　あ……明日でしたね……そういえば……」

キヤンサーのことで頭がいっぱい忘れてしまつていた。準備はもうほとんど終わつていて、路地には屋台がズラズラと並んでいる。

「佐月殿らしくないでゴザルな？　こういう予定のことなんて全部頭に入つていそうなのに」

「アーデルちゃんはわたしのことを過大評価しすぎです♪」

「そんなことないでゴザル。佐月殿は拙者にとつて忍者の先輩みたいなものでゴザル」「わたしはただの……普通のショッピング店員ですよ♪」

アーデルちゃんのその言葉はたまにどう受け取つたらいいのかわからなくなる。
それはともかくとして、今はお祭りの話だ。

「ちなみにですけど、アーデルちゃんこそ決まつたんですか？」
訊ねるとアーデルちゃんは「うつ……」と声を漏らした。

「……それを聞くでゴザルか」

自分から切り出しておいて何言つてるんだろうこの子……。

「実は、兵糧丸が封じられてしまつたので昨日ずっと考えていたでゴザルが、今の今まで何も思いつかず……！」

「ならちようどいいですね」

どつちにしても思いついていないのならわたしにとつて好都合だった。

「ヤー！　佐月殿は決めていたでゴザルか！」

「はい♪　わたしは今回のお祭りで何をしたいか、昨日決めました♪　アーデルちゃんも一緒にいかがですか？」

「また急で準備も大変そうでゴザルな。拙者が手伝えることなら何でもするでゴザル！」

「そう言つてくれると思つていました♪」

「それで、拙者は何を手伝えばいいでゴザルか?」

國見さんの「ワクワク」ぱりに前のめりで訊ねてくるアーデルちゃん。
期待に満ちているであろうその瞳の輝きに、わたしはお願ひする。

「――何もしないでくださいっ♪」

アーデルちゃんが少しの間、フリーズした。

「ヤー……? もう一度言つてもらえないでゴザルか?」

「な・に・も・し・ない・で・く・だ・さ・い・♪」

聞き間違えたのではないかと思つたようだけど、わたしは一字一句同じことを言つた。
そう。わたしはお祭りで屋台を出さないと決めたんだ。

（Day5）普通の女の子、佐月マリ

「山脇様山脇様。似合つてゐるでゲスか？」

着付けが終わると、ぶんちゃんは早速イヴアールちやんの下へと駆けていく。

いつもと違う自分を見せつけるようになると踵きびすを回しては、子供らしいあどけない笑顔になる。

「ああ、とてもよく似合つてゐるじゃないか」

イヴアールちゃんが自然な笑みになつたもので、わたしもつられてしまつた。

いつ、どんなときでも季節を感じさせる行事は好きだ。

変わり映えのない日々からの変化を感じさせる一時の休息であるとともに、その変化が何よりも思い出に変わっていくから。

特に今日は、たくさん思い出を作りたい。

「浴衣なんて使い魔のあちきにはいらないと思っていたでゲスが、こうして褒められると悪い気がしないでゲス」

「そうだね。本当なら使い魔にはいらないけど、今日は祭りなんだからいつもと違う恰好をしてもバチは当たらないからね。存分に楽しむんだよ」

「はいでゲス！」

ぶんちゃんが返事をすると、イヴアールちゃんがこっちを向いた。

「じゃあ佐月。ありがとね」

「はい。イヴアールちゃんも楽しんできてください♪」

二人でお祭りへと向かうのを見送っては、一息。

「さて、と。わたしも準備、しましようか♪」

給士服を脱いでお祭りを楽しむことに全力を注ぐ準備をした。

日が落ちてきて、辺り一面を黄金色に照らされたフレーバー通り。祭囃子まつりばやしのような音楽が響く風変わりしたムードがあつて、一層特別感がある。

浴衣に着替えたわたしは、噴水広場の前で人を待っていた。

屋台を出しているのはこの通りが一番多い。比例して人の集まりもここらが多く、待ち合わせする人も見かける。少し時間が経つてからここを選んだのは失敗だったと思うも、連絡はできるだけ取らないようただ待つことにした。今日は電子軍人手帳も使わずに一日を過ごしたいからだ。

時計は持ち合わせていない。ただ、自分の身体が今は待ち合わせの三十分前であると告げている。

もうちょっと待ちそうかな。そう思っていたところにカラコロと音が聞こえてきた。

周囲に響いている音楽よりも、誰の声よりも目立つ音。下駄で地面を叩く音だ。

「佐月殿、お待たせしたでゴザル！」

「誰よりも大きい声。どこからともなく照らされる光よりも明るい髪。

アーデルちゃんがわたしを見つけては駆け足でやってきた。

「ちゃんと言つた通りに浴衣を着てくださいましたね♪」

「ヤー！ 佐月殿が用意してくれたら着るに決まってるでゴザルよ！」

視覚的にも聴覚的にも目立つ、けれどもいつもと雰囲気が違う大和撫子然とした浴衣姿。昨日の夜からアーデルちゃん用に急いで仕立てた浴衣だ。

「思つた通り、よく似合っています♪」

「ヤー！ では行くでゴザル！」

アーデルちゃんがわたしの手を取つては、屋台の方へと一緒に歩いていった。

※

話は昨日。わたしが「何もしないでください」と言つた直後に遡る。

その真意を説明すると、アーデルちゃんは目を丸くして訊ねてきた。

「屋台を出さない？ 本当にゴザルか？」

『はい♪ お祭りはみなさんがいろいろな屋台を出しますからわたしの役目はありません♪』
最初はお祭りと聞いてわたしなりの屋台を出そうものか考えていた。

けど、わたしはショッピング店員だ。お客様に商品を提供して、代金をいただく。その繰り返しの中、わざわざお祭りで同じ立場にいる必要はないんじやないかと思つた。

『でも、それなら拙者は何を手伝えばいいのでゴザルか?』

『そもそも手伝えなんて言つてないぞ♪』

『ヤー。 そうでゴザつたか……。 変な早とちりをしていたでゴザルな。 ということは』

『明日は、わたしのショッピング店員でない普通の女の子として屋台を回りたいんです』

お祭りでは供給は満たされている。 だつたらこういうときは需要側に立つて、精いっぱい楽しみたい。

そう。 アーデルちゃんと一緒に。

「今日の佐月殿は、忍者でゴザルな」

「……え?」

突然のアーデルちゃんの言葉に呆けた声を出してしまつた。

「今日はセラフ部隊のみんなも普通にお祭りを楽しんでいるでゴザル。 加えて、佐月殿はシヨップ店員でもない——それは、拙者にとつて忍者でゴザルよ」

いつしか疑問に思っていた。

わたしからショッピング店員という要素がなくなつたらどうなるのか。

ただのセラフ部隊員になるのか。何の才能もないただの”人”になるのか。才能がなくて、忍であることを諦めたわたしには、難しい問題だつた。

「イヴアールちゃんは言つてましたね。わたしたちに倣つて闇に潜むつて」

「ヤー！ 忍者とは忍ぶもの。こうして浴衣を着て、忍者の佐月殿と一緒にお祭りを回ろうと誘つてくれて嬉しいでゴザル！」

ただ一点の曇りもないあどけない笑顔がわたしを照らす。

——アーデルちゃんは。

アーデルちゃんは、わたしのことを純粹に忍だと認めてくれている。

どれだけの実力があろうとも、どれだけの才能があろうとも、わたしのことをずっとずつとこんな純粹な気持ちで認めてくれるのかもしれない。

それが眩しくて、つい甘えたくなつて、とても苦しい。

でも今日、この時くらいは苦しさをも無視して甘えてみてもいいときえ思えた。

※

最初に目に入ったのはたこ焼き屋台だつた。

31Aが頑張って練習していたけども、結局うまくできるようになつたのか、経過が気になるところ。

屋台にいるのは茅森さんと和泉さん。まだ準備中なのか、黙々と作つてゐる。

あの調子だと問題なさそう。

「ねえねえユツキー。どっちのたこ焼きが売れ行きいいか勝負しない?」

「なんでだよ。別に普通に作れたら変わらねえだろうが」

「でもその普通ばかりだと面白味もなくてそのうち飽きられるんじやない?」

「誰も飽きるほどたこ焼き食わんわ。祭りの食いもん他にももつとあるだろ」

「そこで競い合つた方がなんだかんだお互いに美味しくいたこ焼きが作れるわけ」

「話聞けよ。まあ競い合つた方が美味いたこ焼き作れそうつて点はわかるが」

「つてことで勝負ね。負けた方がてへペりんこするつてことで」

「はあっ!? なんなんだよそれ。いきなり不快な罰ゲーム押し付けんな! しかも勝つても

負けてもあたしに不快しかねえじやねえかっ!」

「何やら二人とも楽しそうなことしててゴザルな」

楽しそうなやり取りをしててところにアーデルちゃんが割つて入つた。

すると和泉さんは露骨にめんどくさそうな表情に様変わり。

「これが楽しそうに見えるのかよ。絶賛理不尽な目に遭わされてるんだが」

「理不尽なら茅森さんにだけ押し付けてどこかへ行けばいいのでは？」

わたしが言うと、和泉さんはしばし固まる。やがて諦めたようにため息をついた。

「……それを言うのはナシだろうがまったく」

そう言つてたこ焼き器に改めて油を引く。たちまち茅森さんの頬が綻んでいった。

「おっ、ユツキーやる気だね。つてことで勝負！」

「つたく、仕方ねえな……」

たこ焼きはまだ準備している最中だったので後で行くことにして、フランクフルトやかき氷。目に入った屋台で購入しては、アーデルちゃんと一緒に回っていく……はずが、「あっ、マリいたーっ！」

遠くからわたしの名を叫ぶ声が聞こえてきた。

「六宇亜さん……？ どうかしましたか？」

と言いつつ、彼女の用はなんとなく察していた。

元々わたしはお祭りのまとめ役だった。それを勝手なわがままで代わりに引き継いでくれたのは六宇亜さんだ。

急なお願いだつたし、引継ぎ不足だつたかな……。

「実は31Fにお願いされていた食材がどこにあるのかわからなくなつて……あと31Aがなんかいろいろ食材欲しいって言つてたのと、あとはナービイ広場に怖いお面屋が二つあるつて苦情が」

かくかくしかじか。

聞いたところ問題が三件くらい起きているらしく、ある程度は六宇亜さんが自分で何とかできると自信満々そうに言つていて。それなら大丈夫かな。いやでもお面屋……そりゃあれば桐生さんが何か出すと言つていたような……。でも二つ？ もう一つあるつてこと？

「食材ならカフェテリアの冷蔵庫にあります♪ お面屋はそうですね。後で行つてみます♪」
桐生さんが出しているお面が怖いと言われるのならちよつと興味が出てきた。もう一つの出店も気になるところなのでこれなら直接確認してみてもいいかも知れない。

「ありがとうございます！ 食材探してくる！」

「いえいえこちらこそ代わりにいろいろやつてくださつてありがとうございます♪」

頭を下げる踵を返した六宇亜さんの背中を見送りつつ、再びお祭りを堪能することにする。
次に一際目立つてているのは、他とは規模が違う射的屋。これは31Bの屋台だ。

「つてあれ、樋口さんお一人ですか？」

こういう出店ならいちごさんとすもさんが前に出てきそうなのに、一時的に出でているみたいだ。

樋口さんはやや嬉しそうな表情へと変わっていく。なんだろう、ちょっと違和感。

「佐月と神崎か。珍しい組み合わせだな」

「ヤー！ お祭りデートでゴザルよ」

「もうアーデルちゃんたら……」

デートといつたらカツブルみたいだ。まあ実際ペアで回っているから間違いではないのだけど、そう言われたら意識してしまう。

「つかささん。射的屋寄ってかない？」

と、ちょうど横から朝倉さんと東城さんが来た。たこ焼き屋にいないと思つたら一緒に回つてたんだ。

「随分景品が豪華ね。銃型セラフの実力、見せてあげようかしら」

改めて並びを見てみると、お菓子からぬいぐるみ、ゲーム機といったバラエティに富んだ品揃えになっていた。確かに豪華といえば豪華だけど、これゲーム機に当てたとして倒すことができるのでかいさきか不安にさせられる。こういうのってだいたい釘が刺さつてたりとかで絶対倒せないようになっている。

「東城と佐月が相手ならちよどいい。どうだ？ 一発腕試ししてみるのは」

「勝負ってわけね。佐月さん、どうかしら？ 勝つた方が料金を肩代わりするというのは既に勝ち誇っているかの表情をわたしに向けてくる東城さん。

なるほど、勝負を仕掛けてくるなんて面白い。ここは乗っておこう。

「——待つでゴザル！」

「え、アーデルちゃん？」

急に自己主張してくるアーデルちゃんに一同が目を見開く。

「佐月殿が出るまでもないでゴザルよ。ここは拙者が勝負に乗るでゴザル」
セラフどころか実銃も触つたことなきそうなのになんでそんなに自信満々なの……?
「嘗められたものね。いいわ、せつかくだしハンデをあげる。神崎さんは二回分やつてもいいわよ?」

「ナイン！ やるからにはルールは平等。一回分で問題ないでゴザル」

「そう。ならないけど、二言はないわね」

アーデルちゃんが頷く。その後、わたしを一瞥した。

もしかしたら上手いとか下手とかそういうのは関係ないのかも。

ただわたしにかつこつけたいだけなのかもしれない。そういうところはアーデルちゃんらしくて、かわいいと思う。

「ではどちらか好きな銃を選ぶといい。装填されている弾はどれも一発。見た目は同じでも性能は違うから慎重に選ぶことだな」

「へえ、獵銃型ではなく拳銃型なのね。普通の射的屋と違つてなかなか新鮮じやない。この

重めの銃にするわ」

二つあるうちの銃を東城さんが先に選んだ。

「どうかハンデがどうとか言っていた割にここでは何も言わずに先手を取るんだ……。」

「では拙者はこっちの軽い銃でゴザルな」

「大丈夫でしょうか？ 軽いと威力が弱くて景品が取れなかりするかもしません」「余り物には福があるというやつでゴザルよ。佐月殿」

その余り物の性能が明らかに悪ければ福もクソもない気がする。

「ねえ、樋口さん。景品の横に書いてある数字ってなに？」

「確かに。景品の側に数字が書いてありますね」

一番高価であろうゲーム機は五万と記載されている。ゲーム機に対してのこの数字といつたらさすがにピンときた。

「ああ、あれは景品の仕入れ額だな」

そんなもの記載している射的屋初めて見た。

「なら仕入れ額が高ければ高いほど難易度は上がるってことね」

「いや、仕入れ額と難易度は関係ない。当たりさえすればいいからな」

アーデルちゃんと東城さんが首を傾げた。

対してわたしと朝倉さんは、看板を見てみる。これ、なんかいろいろ変じやなかろうか。

「なら単純に原価が高い景品を取るのが得じやない。可憐さん見てて。あのゲーム機を取つてみせるわ」

「ありがとう。でも無理はしないでね。今月は貯金してるんでしよう?」

「問題ないわ。見てなさい」

「勝負のはずなのになんだかあっちも不安に思えてきた。

問題ないと東城さんは言うけども、すべてフラグにしか聞こえない。

いや、それよりもこっちの心配だ。

「アーデルちゃんは何を狙いやがるんですか?」

「実はこの屋台を一目見たときにあの風車のヘアピンを取ろうと決めてたでゴザル!」

棚を見ると、手前側に確かにちょこんと置かれている風車の形をしたそれが置かれている。
へえ。アーデルちゃん、あれが欲しかったから勝負事に名乗りを上げたんだ。

「神崎さん。せっかくだから同時に撃つのはどうかしら?」

「構わないでゴザル! 無事、両方当たるといいでゴザルな!」

「そう言つてられるのも今のうちよ! ではいきましょう」

二人して銃を構える。そしてすぐに東城さんからコールを始めた。

「2」「3」

「「1」

ゼロ、をお互いに言わず、それぞれの銃口からそれぞれ弾が放たれる——！
——バン！

「え……」

「ヤ？」

音を聞き、撃つた人およびその通りにいた人全員がその場でフリーーズする。
フレーバー通りに響いた音が誰もが想像していたよりも遙かに大きなものだつたから。
その理由は……。

「ちょっと待つて……え、実銃!?」

東城さんが握っていた銃から放たれていたのはゴム弾でも何でもない本物の銃弾。
銃を胸元でぶるぶると震わせて持つていて、どこか危なつかしい。

「ゲーム機貫通してるけど、大丈夫なの!?」

「見事に壊れたな。大当たりだ」

かく言う樋口さんは確認するまでもなく眼鏡の位置を直す。滅茶苦茶楽しそう。確信犯だ。
「どこがっ！ というかどうしてそんなに冷静でいられるわけ!? 店の景品壊されたのよ!?」
「それなら問題ない。何せ、ここルールからして壊されてもこっちの不利益にはならない

からな」

「え、何その手」

「あそこに書かれている原価分、支払ってもらおう」

「そんなルール聞いてない！」

わーわーきやーきやー。

自信を顔に書いたかのような表情から不安と困惑が入り混じった負の反応を見せてくる。

「つかささん。残念だけどちゃんとルールは書いてあるわ。よく読んで」

「えっ……『もし本物の銃を選んで壊したら側に記載している金額分、弁償していただきます』本当に書いてあるつ！ 手書きでッ！」

ルールをよく読んでいなかつたことを認めた東城さんがお財布から泣く泣く弁償代を支払つた。さすがにここまで代金を支払うことになるとは思いもしなかつたのか、お祭り代もすべて使つてしまつたらしく、足りない分は朝倉さんが肩代わりしていた。

「発砲音が聞こえたから来てみたが何の騒ぎだ……」

31Bのまともな人が戻ってきた。

「あ、いちごさん。実はかくかくしかじかでして」

説明するといちごさんは狐につままれたような表情になる。

「は？ 元々本物の銃なんて用意してなかつたのになんでそんなことになるんだよ」

「そうなのか。てっきり水瀬姉が本物を置いていくものだから『壊して弁償するかもしけないヒヤヒヤと当てたら景品が貰えるワクワク』というイカれたスリルを期待したんだが」「あたしがこいつに任せたのが間違いだつたわ……本当に銃、持つのやめようかな……」いちごさんから銃を取つたら31Bの戦力がガタ落ちしそう。

とまあ騒ぎはあつたけども、射的屋から離れてアーデルちゃんと一人になつたタイミング。そろそろ件のお面屋へ向かおうと移動している途中で、アーデルちゃんがそわそわしている様子だった。

ちよくちよく視線が持つていてる紙袋へと向いているのを見て、話さずにはいられない。

「いろいろありましたけどヘアピンはもらえてよかったですね」

「ヤー。もし銃が本物で壊れていたらと思うと後で怖くなつたでゴザルよ」

アーデルちゃんはそう言うものの、ヘアピンなんてそう高価なものではない。間違いなく射的のプレイ料金の方が高い。

でも、きっとそれをわかっていて取りたいと思ったのかもしれない。

「アーデルちゃん……？」

同じ速度で歩いていたはずが、急に立ち止まつたアーデルちゃん。そこから紙袋を開けて、ヘアピンを取り出した。

風車。何の変哲ものではあるけども、じつと見つめてわたしを見上げた。
そして、何も言わずにわたしの前髪に着けてくれる。
そつとヘアピンに触れてみた。

金属部分にアーデルちゃんの体温がほんのりと残っている。
「似合つてでゴザル。風車のヘアピン。かつて時代を風靡した風車の弥七を彷彿させ
て、忍である佐月殿にピッタリでゴザルよ」

そつか。わたしに似合うと思ってそれで躍起になつてくれていたんだ。

直接買つた方が安いし、早い。そんな単純なことじやない。

今、あの場でわたしに似合うと思って取ろうと頑張つてくれた。

それが何よりも嬉しくて仕方がない。

「アーデルちゃん。時代を風靡した、なんて言つてますけど、風車の弥七つて実在しないん
です」

「そうだつたでゴザルかツ!?

口をあんぐりと開けるアーデルちゃんを見て微かに笑う。
このヘアピン、大切にしよう。

※

アーデルちゃんにわがままを言わせてもらい、次の目的地は31Fの黒沢さんが出しているお好み焼き屋だ。

近づいていくにつれてたこ焼きとはまた別でソースのフルーティーな香りに誘われる。つい先ほどトラブルがあつたから気になっていたとはいってもきつと食べたくなってしまう。そういう魔力が場に漂っていた。

「おー、佐月。ちょうどええところに」

わたしに気づいた黒沢さんがヘラを振つてわたしに挨拶してくれる。

「あ、黒沢さん。食材、無事に届けてもらえたようで何よりです♪」

先ほど六宇亜さんが焦つていたときには多少の不安があつたものの、こうして繁盛しているのを見るとやはりわたしが出る幕はなかつたと一安心した。

「佐月がスタッフじゃないと聞いたときにやあ焦つたが、ちゃんと用意してくれんさつたおかげでお好み焼き作れどるわ。ありがとの」

「大したことはしてないぞこんちきしょーめ♪」

そもそもあんなトラブルがあつたのはわたしが職務放棄したのが原因だ。大したことないというよりむしろ罪悪感もある。

「それじやこっちの気が済まんけえ持つていけ。うちの奢りだ」

とはいへ、ちょっとしたことでもお礼を言われるのは悪い気はしない。

「ありがとうございます♪ アーデルちゃん、はいどうぞ♪」

黒沢さんの厚意を素直に受け取り、アーデルちゃんの口元へと運んだ。

一瞬戸惑われるも、やがて意を決して勢いよく食べててくれる。

最初こそ恥ずかしそうだつたけど、囁みながら目を見開いた。

「ヤー！ 広島のお好み焼きは焼きそばのソースと絡み合つて格別でゴザルな」

「そうじやろそうじやろ。焼きそばもそうじやが、特にソースに拘つとるけえな。こだわりにこだわった至極の逸品じや」

絶賛されているお好み焼きをわたしも食べてみた。

「確かにおいしいですね♪ ほのかに感じるフルーツの甘みがこれまたクセになります♪」

甘みのあるキャベツに、もつちりとした食感なのにパリッと仕上がつていてる麺がソースとよく絡み合い、味わい深く仕上がつていてる。まさにソースから食材まで拘つていてる至極の逸品。これは簡単にまねできそうにない。

「めぐみさんめぐみさん！ お好み焼きも食べましょう！」

と、ふとワクワク顔でやってきた國見さん。隣には逢川さんもいる。

なんだか嫌な予感がした。

「お、広島風お好み焼きか。ええやん」

「あっ……」

「佐月殿……？」

よりもよつてい嫌な予感がすぐに的中して声を出してしまう。アーデルちゃんもお好み焼きを食べながら頭にはてなを浮かべながらこちらを見ていた。

「黒沢、お好み焼き一つ！」

「はいよ。ちいと待つてろ」

つてあれ？ 普通に接客してる。黒沢さんつてこういうの気にしないタイプなのかな。

「佐月殿、どうかしたでゴザルか？ 何やら身構えていたでゴザルが」

逢川さんたちが去つていったタイミングを見計らったのかはわからないけど、アーデルちゃんが訊ねてくる。やっぱりこの子は何も知らないようだつた。

「あ、いや、広島風お好み焼きって禁句だと聞いていたのでつい」

かつて広島の人に「広島焼き」「広島風お好み焼き」は禁句だと言わっていた。

広島の人にとって、広島風なんものはなく、お好み焼きはお好み焼きでしかない。その土地独自で培われてきたお好み焼きであり、広島風なんて簡単に言葉を添えたのではその文化を否定することになるそうな。ちなみにこれには一説あります。

ただ、黒沢さんはそこまで気にしていないのには理由があるみたいで、

「そりや関西にやあ関西のお好み焼きがあるし、広島にやあ広島のお好み焼きがあるけえな。それぞれハツキリとした違いがあるのである以上、怒るなあ筋が通らん話じやろ」

「そういうものなんですね……」

「勉強になるでゴザルなあ」

とまあ、怒るも流すも考え方次第みたいだった。

「見てくださいマリアさん広島焼きですよ！」

次に来たのはアイリーンさんとマリアさん。

一瞬、黒沢さんの身体がピクッとしたような
氣もしたけど、まあ氣のせいでしょう。

「黒沢さん。広島焼きを一つ！」

「あ??????」

あつ、それはすごく嫌そうな顔をするんですね。

「死ね」

「ひい！」

怖い雰囲気がアイリーンさんへ集中しそうだったのでわたしたちは退散した。

※

さて、トラブルがあつたのは先ほどのお好み焼き屋台だけではない。

今回のお祭りで苦情あつた場所。桐生さんが出しているお面屋が怖いとの話があつたため、次にやつてきたのはナービイ広場。怖いの真実が今ここに明らかにな——。

「「ツ……!?」

その惨状を見かけたわたしたちは驚愕した。

そこにあつたのは怪しい宗教団体かのような集まり。

宗教団体とはいっても桐生さんのみで構成されている日本伝統文化保存同好会ではない。全く別の宗教のような集まりだ。

「そこのお二人、お面はいかがでしよう?」

狐面を被つた桐生さんがわたしたちを見かねて駆け寄ってきた。

一緒に一步後ずさりしてしまった。それを見て桐生さんが小首を傾げる。

「どうされましたか? いつももなく唇を引き攣らせて」

「や、ヤー……なんというか。売っているお面が奇抜なものでゴザつたから……」

「奇抜……? はて? 至つて普通のお面しかありませんが?」

「先輩殿のお面でゴザル! ついでに茅森殿のお面までツ!」

怪しい宗教団体かのような集まり。もとい白河さんと茅森さんの顔を被つた集団の集まり。



売られている屋台も右から左までびっしり。うん、確かにこれは怖い。

「神崎さん。茅森さんのお面はわたくしが作ったわけではありませんよ」

「おお。これは失礼したでゴザ……じやないでゴザル！ 手作りでゴザルかッ!? アーデルちゃんがわたしを見てくる。なんですかその視線。わたしが関わってたらトラブルに察しがついてすぐに対処してましたよ。」

周囲の白河さんもどきを見渡し、桐生さんは恍惚こうこつとし始めた。

「当たり前ではありませんか。いやはや。縁日で憧れの人のお面を被り、その日の主役になります。これも日本の文化……！ おかげで白河さんがいっぱいですね」

「桐生殿のおかげで日本の文化が狂気に満ち溢れているように見えるでゴザル……！」

「狂気だなんてとんでもありません。茅森さんのお面を作った方のご勇姿をご覧ください」

屋台の裏を見せてもらうと、そこにいたのは——。

「ルカ……！ ルカ……！ ルカ……！」

現在進行形でお面を作っているシャルロッタさんだつた。

物を作っているとは思えないほど瞳孔を開かせていて、こつちはこつちで別の意味で狂気に満ち溢れている。夢中になれるものがあるというのはすごいことですね。

「ところで普通のお面はないでゴザルか？」

「狐面で良ければあります」

「なぜそつちを前に出さないでゴザルか……」

「白河さんのお面の方が売れるからですよ」

「ええ……」

アーデルちゃんはさりげなくお金を渡して狐面を購入していた。まあ似合うからいつか。それにも改めてみるとすごい場所になつてゐるなあ。ナービイ広場だというのに、あまりの怖さにナービイが一匹もいなくなつてるってどういうことなんだろう。

元より日本伝統文化保存同好会への誘いが怪しい宗教に誘つてゐるよう見えたが、お面を買つていった人たちからしたらそうでもないからどつこいどつこいなのかも?

「やはりわたくしの目に狂いはありませんでした。この基地での憧れの的である白河さんのお面を被りたいという方は大勢いたのです」

「ライブをやつてゐるルカに憧れる人もたくさんいます」

「いるにはいるけど、ファン層が一気に二極化してゐるような気がしてならない。

「ちなみにご本人はなんと言つていたんですか?」

「気になつて訊ねた。こんなに自分と同じ顔の人がいたんでは本人も知らないはずがない。

『私なんかのお面を買う者がいるとは思えないが、作つてしまつたのなら仕方ないな』と嬉しきのあまり声が小さくなつていました』

「ライブのグッズなると言つたら掠れた声を出しながら親指を立ててくれました」既に作っていたのを見て絶句しかけてたの間違いじやないのかな。お優しい。「うわっ、茅森と白河のお面がびっしり……すごい絵面ね……」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。イヴアールちゃんだ。

どうしてぶんちゃんをここに連れてきたんだろう、というツッコミはさておき、わたあめにりんご飴にいろいろ抱えている。お祭りを満喫できているようで何よりだ。

「この世界はこやつらに侵略されてるでゲスか？」

「違うよ。こいつらは私の手下だから実質私が侵略しているようなものさ」

「そうだったでゲスか！ そのお前！ そのメカクレのお面を寄こすでゲス！」

「どうぞ……」

イヴアールちゃんがシャルロッタさんにお代を渡し、茅森さんお面をぶんちゃんが手にする。

シャルロッタさんが手を離すと、

「ああっ……ルカ……！ ルカ……！」

「なつ、なんでゲスかッ!?」

突然発狂し始めるシャルロッタさんにドン引きするぶんちゃん。いきなり大声出されてこつちまでビクつきそうになってしまった。

「気にしないでください。茅森さんのお面が売れるたびに発作を起こしているだけなので。シャルロッタさん、これも推し活です。前線で推す以上、推しの一部が去つていくのは運命です」

「ダードー……。推しの一部が去るのは運命……」

「そうです。ですが、推しそのものが去るわけではありません」

「ダードー。ルカは必ずシャロの元へ戻ってくるのですね」

「そうです。推しを推してくれる者を増やしましょう！　すれば推しは必ず我々を振り向いてくれます！」

「ダードー！　ルカがシャロを振り向いてくれることを信じています」

ところでトラブルを解消するためにここに来たわけだけど。

なんか、ナービィ広場はもうお面の屋台しかないわけだし、別の意味で怖くなってきたから無理に解決しなくてもいいんじやないかと思えてきた。

静かに退散して通りへと出てベンチに座る。茅森さんのお面を被っているぶんちゃんが少しだけ異質だつたけど、静かにわたあめを食べる姿がかわいい。

「ねえ、せっかく二人して浴衣着てるんだから写真とかどう？」

「どこに隠していたのか、イヴアールちゃんがカメラを構える。

「それはいいでゴザルな！　佐月殿もどうでゴザルか？」

アーデルちゃんの視線がわたしに静かに向けられた。

最近写真というものに所縁はなかつたけど、こういう行事にこそ思い出は残したくなる。

「イヴアールちゃん、お願ひできますか？」

そう言つてわたしはアーデルちゃんの側に寄る。

「佐月殿。もうちよつと近くに来るでゴザルよ」

だけど、まだ足りないらしい。

「……ですか？ では、少しだけ……」

「もつと近くに来るでゴザル！ ほら、こっちでゴザルよ」

「んつ……」

やけに積極的な物言いで、身体を引き寄せてくるアーデルちゃん。もはや近くというより密着と言つた方が適切なくらいだつた。

「いい感じじやない。じゃあ撮るわよ。いち足すいちは〜？」

「ヤー！」

思わぬ発言にわたしは吹き出してしまつた。

同時にシャツジャーも切られてしまい、写真にはめいいっぱいの笑顔を浮かべるアーデルちゃんと笑いが堪えきれないわたしが映つているんだと思う。現像されるのが楽しみだ。

「アーデルちゃん」

「どうしたでゴザルか？」

写真を撮り終わって離れてすぐ、アーデルちゃんに振り返る。

じっとわたしを見つめて言葉を待ってくれている妙な間がその場に走る。この時間がずっと続いてくれればいいのに。

「どうか、そのままのアーデルちゃんでいてください」

「佐月殿が一緒なら、ずっとこのままゴザルよ」



「ああっ！ マリってばこんなところにいた！」

佐月の用事も終わり、お祭りを楽しむ方向へと全力を注ぐことに決まり、アーデルたちは再びフレーバー通りへと戻ってきたところで佐月は再び六宇亜に捕まってしまった。

また更なるトラブルに巻き込まれていてるのがその慌てようから察した。

「六宇亜さん。どうかしましたか？」

「どうしたもこうしたもないよ！ マリが担当していたお祭りの準備がここまで激務だなんて知らなくて、もうほんとてんやわんやで……！」

「落ち着いてください。まずは何が起きているのか一つ一つ整理しましょう」

こういうことに慣れているのか、いつだつて佐月は冷静だつた。思い返してみれば、彼女が本気で慌てている姿は見たことがない。

どさくさ紛れに話を聞いてみれば、各屋台の食材が足りなくなつてきていること、使用している機材が故障して予備品と交換しなければならないこと、浅見が酒を飲んで泥酔していること他諸々の問題が起こつてているようだつた。

とはいへ、今日はお祭りを楽しむ側に回りたいと言つていたのだ。先ほどのように六宇亞に任せられるのだろう。そう思つてひとまず待機していたものの、「すみません。アーデルちゃん、少しの間だけここで待つていただけますか?」

どうやらそうも言つていられないほどに大変なことになつてゐるらしい。

「ヤー。いつまでも待つていてゴザルよ」

アーデルが言つた直後に佐月は頭を下げて六宇亞に連れられてしまう。

どれだけの時間がかかるのかはわからないが、放置されるとということはないのはわかつているので気長に待つことにした。

ベンチに座ると揚げ物の匂いが鼻腔びくうをくすぐつた。

見れば31Eのコロッケ屋の屋台がある。お祭りらしさはあまりないが、相も変わらずの破格の安さとおいしさがウリで、多くの客がついているようだつた。

「神崎さん。コロッケ、いかがでしようか?」

一人座っていたアーデルを見た一千子がそう言つて渡してくれる。

アーデルが代金を渡そうとすると、一千子は手のひらを前に出してかぶりを振る。

「佐月さんが六字亞を手伝ってくれているお礼です。一人で待っているのにコロツケじや物足りないかもしませんが」

「ヤー。ありがたく頂戴するでゴザルよ」

物足りないなんてわけもなく、素直に厚意を受け取ることにした。

出来立てで温かい。屋台を見ると今でも四ツ葉と五十鈴の二人が揚げながら接客していく、忙しさが伺える。戻らなくて大丈夫なのだろうか。

「でもよろしいでゴザルか？ 拙者は何もしていないでゴザルよ」

「31Cのみなさんは富士でも大変な目に遭つたみたいですからね。その労いもあります」

「……あとは結局、31Aの仕事でゴザル」

労つてもらえるのは嬉しいことではあるが、役目を終えて喪失感もある。
自分が力不足だと言われているようだつた。

神崎アーデルハイドには出番はないのだと言われているようだつた。
とはいえ、一千子の前ではそんな表情を出すわけにもいかず、作り笑いを浮かべてから貰つたコロツケを口に頬張る。

おいしい。ソースがなくても衣に染みついた油がじやがいもに味が乗つて甘みを引き出し

て いる。お祭りで既にいくつか食べている身だが、もつと食べたいと思えるような一品だ。「これから台風も近づいてきて31Aも任務どころではないみたいですよ?」心の内を悟ったのか、急に任務の話をし出す一千子。まるで31Cにまだ活躍の余地があると言つて いるかのようだ。

ただ、台風は進路から大きく外れていると天音が言つていたのを覚えている。任務どころではないというのは違うだろう。そう思つていたが、「……もしかして、進路変更したでゴザルか?」

台風の話をしていたのが四日前ということもあり、訊ねてみると、一千子は頷いた。
「自然というのはいつまで経つても予想できないものですね。おかげで台風が過ぎるまで何もできないと司令部が嘆いていました」

「そうでゴザつたか……」

台風が迫つて いるのであれば、作戦もお預けになる。31Aが出ようにも出られない状態。
「しかし、どちらにしても31Aが前線に出るのは変わらないでゴザルよ」
アーデルの考えが変わることはない。

あくまで作戦に遅れが生じて いるだけに過ぎないわけで、たつた一日二日でしかない。それくらいの日数でハイドロペリッシュュが迫つてくるのだとしたら今頃ドームは愚か、基地も籠絡していることだろう。

アーデルの出る幕はない。そう決めつけていた。

「本当に、そうでしょうか？」

一千子はアーデルの隣に座る。だが一方でアーデルは、食べかけのコロッケをじっと見つめているだけ。そんな中でも一千子は話を続ける。

「聞けば、空に浮くキヤンサーのため、31Aでも対処に困っているとのこと。まだ誰が適任かもわからない状態です」

確かに、一度作戦を立案したものの、失敗に終わって未だ方向性が定まっていないという話は聞いている。今回の敵が空からの爆撃であるために、早急に対応をしなければならないというのに自分は用済みだと諦めているのはおかしな話ではないだろうか。

「ですから悔しそうな顔をしないでください。神崎さんにもきっと活躍の場はありますよ」指摘されて気づいたアーデルはハツとして自らの頬に触れる。

もちろんそれで自分がどういう顔をしていたかがわかるわけではないが、一千子が言うのであればそういう顔をしていたのだろう。

「確かに……そうでゴザルな」

無意識のうちにしていた表情を崩し、口許を緩ませる。それでもちよつとは無理していることに変わりはなく、一千子に悟られまいと立ち上がる。

お礼を言おうと振り返った。一千子が小さく微笑んで先に口を開く。

「……なんて、わたしが言えた話ではありませんけどね」

彼女の言葉で気持ちが確かに変わった。やや諦めの方向へ気持ちがいつていることに変わりはないものの、少しは自分で動いてみようという気にさせられた。

彼女にどういう考えがあつたとしても、響いた言葉があつた。

「……そんなことないでゴザルよ。一千子殿に勇気を貰えたでゴザル！」

「きっとコロッケのおかげですね」

「魔法のコロッケでゴザル！」

大島家特製のコロッケには、特別な隠し味がある。

※

「あれ、アーデルちゃん……どこ行つたんだろ……」

六宇亜さんの手伝い——もといわたしの尻拭いが終わつてアーデルちゃんの場所へと戻ると、どこを見渡しても姿が見当たらぬ。

遠くへは行つていない、と思う。あの長い金髪さえ捕捉できればそう苦戦しないはずなのに、祭りのせいで通りに人が多くて見つけ辛い。

「アーデルちゃん？　どこですかー？」

目印にしていたコロッケ屋から少し離れた場所も探してみることにした。

近くで他とはまた違つて盛り上がつている様子だった。和太鼓の演奏が響いていて、周辺で踊り明かしているセラフ部隊の面々がチラホラ散見される。楽しそうと思う反面、わたしは太鼓の打撃音が鳴るたびに心臓の音も強く打ち付けるのを感じてしまう。

「あのすみません白河さん。アーデルちゃん見ませんでしたか？」
基地とフレーバー通りを結ぶ橋の方で一人、ポツンと立つている長い髪の人を見つけた。

「あまりにも急に話しかけられたからなのか、身体をビクつかせた白河さん。
少し戸惑った様子を見せるも、すぐに立て直してくれる。

「神崎？ そうだな、私は見ていないがはぐれたのか？」
「はぐれたといいますか。一時的に離れていたといいますか」
「大丈夫か？ 私も探すのを手伝うが」

「いえ、お手を煩わせるわけにもいきませんので」
「そうか。何かあつたらいつでも言つてほしい」

「せつかくの厚意ではあるけども、どこか人通りの少ない場所にあえているような雰囲気が
あつたので遠慮することにした。きっと白河さんのことだ、自分のお面をしている人を見か
けて戸惑っているのかもしれない。

声をかけたわたしが思うのも変な話だけど、今はそつとしておこうと思つた。

「アーデルちゃん！」

デンチョにメツセージも送った。反応はなく、段々焦りが募つてくる。
フレーバー通りに入つては人ごみをかき分けながら探す。広場に出て辺りを見渡すもアーデルちゃんは見当たらない。遠目からでもあの大きなリボンと金髪はわかるはずなのに。

『——は、——死に——』

あの日、星羅ちゃんに言われたことが反芻する。

ドツ……ドツ……つと全身が脈を打つている。

嫌だ……こんなに早くお別れなんてしたくない……。

どこにいるの、アーデルちゃん……。

「アーデルちゃん……どこですか……？」

そう、声を漏らした直後のことだった。

「佐月殿！ 探したでゴザルよ！」

背後から声がして振り返るとアーデルちゃんが立っていた。わたしは一瞬ポカンとした後に思わず声を上げてしまう。

「アーデルちゃん……！ どこ行つてたんですか!?」

「えっ？ 31Eのコロッケを食べた後にお手洗いに行つていただけでゴザルが……」「……お手洗い？」

聞けば、デンチョで送ったメッセージにも返事が来ている。

お互に移動中に受信したこと也有って、気づくまでにラグがあつたみたいだ。そりや返事に時間もかかるわけだ。

「その、ものすごく焦っていたようでゴザルが……」

アーデルちゃんは困惑した様子でわたしを見ていた。

その理由を悟られるわけにはいかなかつたのと、安堵した反動から腰を抜かしてしまう。

「……ですか、お手洗いですか」

「ヤー。そんなに探してくれていたでゴザルか？」

「元いた場所にいなからと変に焦りすぎてすれ違つてしましました」

アーデルちゃんが手を差し出してくれる。厚意に甘えて立ち上がるのを支援してもらつた。ベンチに誘導されて、並んで座る。その後、もう手を離しても大丈夫なはずなのに、ずっと手を繋いでいるのが恥ずかしくて、つい頬を搔いてどことなく視線を逸らしてしまう。

「大丈夫でゴザルか？」

「何ですか？」

アーデルちゃんが歩み寄ってきてわたしの顔を覗き込んできた。

妙に近い。吐息が当たりそうなくらいの距離感で、身体が熱くなつてくる。

「佐月殿がそこまで焦るなんて、よほどのことでゴザルよ」

なんて鋭いのだろう。だけど、わたしはこのことを言うわけにはいかない。
アーデルちゃんには特に。

「……大丈夫ですよ」

「しかし、いつもならもっと軽い言い方を」

「大丈夫、ですよ♪」

「そうでゴザルか……」

笑みを浮かべて言い直すと、アーデルちゃんは諦めてくれる。

「それにしても、佐月殿は拙者がいなくなるとそこまで焦つてくれるでゴザルな」

アーデルちゃんは先に立ち上がつてはわたしに振り返る。

そうだ。わたしは確かにアーデルちゃんがいなくなる、なんてことを考えてしまった。
「わたしらしくなかつたかもしれません。アーデルちゃんがいなくなるなんて、そんなこと
あるはずがないのに」

この平和なお祭りの日にそうなるなんてありえないのに。

それこそ、わたしが勝手に考えていいだけだ。

「拙者はいなくならないでゴザルよ?」

ふと告げられた言葉にわたしが上を向いてしまう。

「え、その……」

わたしはそのときになつて気づいた。心の声がすべて漏れてしまつていたことに。

今、余計なことまで言つていなかつただろうか。アーデルちゃんに知られたくないことを口走りはしなかつただろうか。様々なことが脳裏をよぎる。心配するべきことはいろいろとあるけれども、それよりも今の方が大事だつた。

「今すぐ忘れやがれ♪」

「や、ヤー……」

今日何度目かの作り笑い。こうする度にアーデルちゃんがだんだんわたしを心配しているかのような目になつているのがわかる。これ以上不安にさせたくはない気持ちでいっぱいだ。お祭りなんだから変な空気はこれで終わりにしよう。

「ほら、まだまだ回つていない屋台がありますからたくさん見ていきましょう」

わたしは立ち上がりつてアーデルちゃんの手を引っ張つて屋台のある方へと誘つた。

「お祭りなんですから、欲張つちやいましょう♪ 次は何を食べたいですか？」

「そうでゴザルな……うむ？」

共に歩んでいると、足を止めたアーデルちゃん。その視線の先にあつたのは、

「わたあめですか？」

「違うでゴザル。別に食べたいというわけではなく……」

「でも興味はあるんですね？ それなら行かなきやもつたいないですよ♪」

どこかきよとんとしている様子が不自然ではありつつも、わたしは食い気味に訊ねた。

すると、気分が変わったのか、

「……そうでゴザルな」

興味を示し、屋台へと駆け寄つた。

「伊達殿！ わたあめを二つお願ひするでゴザル！」

「承知しました」

お代を渡すと、31Dの伊達さんが一からわたあめを作り始めてくれる。横では二階堂さんが見守っている。この人はどういう立ち位置でここにいるんだろう。なんだかシュールだ。だけど、シュールな人は隣にもいた。

「アーデルちゃんどうしました？ そんなにまじまじとわたあめ作つてるのを見つめて」「あ、いや……」訊ねると一瞬こちらを見て再び製造機を見つめる。「少し風のことを見つめますよね。わたし以下……わたしはこのわたあめ以下のゴミみた

たしかにわたあめ作つているとき、中で風の流れが可視化されているかのように見えるのだけど、それをまじまじと見つめるなんて子供みたいだ。そんなに珍しいものなのかな。「わかります。こう、風に乗つてこの輪つかの中で形成されていくわたあめを見てゴミみたいだと思いますよね。わたし以下……わたしはこのわたあめ以下のゴミです」「そんなの一言も言ってねえぞ♪」

あと食べ物作つてるとときは黙つて作りやがれ♪

「風……この流れは……」

「できました。ゴミみたいなわたしのわたあめで良ければこちらを……」

「アーデルちゃん。できたみたいですよ?」

何やらブツブツと独り言を呟いていたところに釘を刺すように肩を叩いた。

「あつ、ありがとうゴザル」

ハツとするアーデルちゃんだけど、やっぱり変だ。まるでわたあめそのものではなく、他のことに興味があつたかのようだ、そんな感じ。

「すみませんすみません。あまりのゴミみたいな出来に言葉も出なかつたんですね」

「そういうわけではないでゴザルよ! とてもおいしそうでゴザル!」

というかわためにゴミみたいな出来なんて存在しないような気もする……。
「そんな……所詮わたしが作ったわたあめなんて砂糖の甘さをも吹き飛ばすくらいマズくな
るに決まつて……」

「あ、佐月殿。ちょっとここで待つていてもらえるでゴザルか?」

「え、ちょっとアーデルちゃんっ!?」

伊達さんのネガティブ発言の途中に席を外すことありますか?!

「あまりのマズさに神崎さんも逃げ出してしまいました。やっぱりわたしはわたあめを作る

資格なんてないんです」

アーデルちゃんが消えるまでと目で追つてみると、行き先は……手塚司令官？ 何か話しかけているようだけど、喧騒のせいでの何を話しているのかわからない。

あつちはあつちで気になるけども、こつちの方を放つておけない。

「ちょっと貸していただけますか？」

わたしは屋台の裏へと回り、割り箸を借りる。

ザラメをわたあめ製造機の中心に入れ込み、雲のように作られていく餡を割り箸でキヤツチしていく、形を整えながら回していく。そうは言つても真面目には作らない。お店として最低限のクオリティを担保しつつ、それなりのサイズ感を出す。たつたそれだけ。

よし、できた。

「二階堂さん。わたしと伊達さんの作ったわたあめ、食べ比べてもらつてもよろしいでしょうか？」

わたしが作ったものを渡すと、二階堂さんは一瞬考えを巡らせるようにしてじつと見つめてくる。やがて意図を理解したのか、

「ああ、いいだろう」

いつもと変わらない真面目な顔で受け取つてくれて、わたしのを先に一口、次に伊達さんのを一口と二つのわたあめをテイスティングしていく。

「ええっ、二階堂さん……そんなに無理しなくとも……」

「とは言うものの、伊達さんの発言も虚しく先に食べられてしまう。

「どつちも普通に砂糖の味しかしないな。というか比べるまでもなく、同じ味だ」
そりやあ当然でしょ、とわたしは大きく息を吐いた。

「伊達よ。わたあめなんて所詮は砂糖の形を変えただけだ。どんなにマズく作ろうとしても同じ味になるのだから自分を卑下することなんてない。お前の作ったわたあめもしつかりおいしいぞ」

結局のところ、わたあめなんて砂糖を入れてぐるぐる回せばいいだけ。おいしさそのものに干渉することができるのだとしたらまた別の問題が出てくる。

少なくとも、伊達さんは適当に作っているわけではない。屋台として出すのならばこのくらいでいいように思える。

ただ、わたしも二階堂さんも忘れている。ネガティブを極めている伊達さんは、このくらいで納得するような人ではなかつたのだと。
「つまり、二階堂さんはこんなゴミみたいな仕事じゃないとわたしに安心して任せられない」と、そう思っていたわけですね……」

「なぜそうなる!? 確かに子供でもできることではあるが、お前の作ったやつを単に私が食べたかったというのもあって！ そういうのは自分が作ってもやりがいがないだろう!?」

「それはそうかもしれませんが」

「変に自分を卑下する必要はない。得手不得手関係なく、単純に祭を楽しめばそれでいいではないか。今日はそういう日だ」

「祭を楽しめないわたしはこの場にいてはいけないと暗にそう言っているのですね……」「だから違う！ そういうことが言いたいのではなく……！」

あーだこーだ。

ネガティブとそれを説得する言い争いが始まった。

こうなつたらわたしはもう邪魔なだけかもしれない。

「せつかくなので、伊達さんがお作りしたわたあめをいただきますね」

一口分をちぎっては舌の上に乗せる。中でわたが溶けて、口の中で甘い味が広がった。
「ちょっと、甘すぎるかも？」

さすがは砂糖そのままの味といったところでしようか。

「佐月殿、お待たせしたでゴザルよ」

一人でわたあめをのんびりと食べている途中でアーデルちゃんが戻ってきた。

司令官と話した後とは思えないくらいご機嫌な様子だ。楽しいことがあつたのかな。
「もう用事は済ませてきやがったんですか？」

「ヤー。もしかしたらどうにもできないかもしれないでゴザルが、実現できたらすごいことになるでゴザルよ」

「それは楽しみですね♪」

気にはなりつつもワクワクしていることだし、今ここで詮索しなくてもいいような気がした。どうせ後でわかるんだろうし、今じゃなくてもいい。

さて、お祭りの時間も半分を切っている。そろそろ回りたいところも絞りつつ、もうすぐ打ち上げられる花火を見る準備もしたいところだ。

「寄つてらっしゃい見てらっしゃい！ シーレジエの二人のたこ焼き売り上げ対決！ 味は違えどお互いの愛は同じ！ 愛し合う二人はなぜ戦わなければならぬのか！ 愛とタコが交わる伝説の戦いが今ここに！ さあ熱いうちにおいでなさい。熱いよー。おいしいよー！」と、フレーバー通りにたくさんの人だからができるているその中心に、聞き覚えのある声が実況なのか叩き売りなのかよくわからないことをしている。

このマンドラゴラみたいな甲高い声は、多分國見さんだ。ってことは、たこ焼き屋？
「なんですかあれ」

「何やらいつの間に八百屋みたいたなたこ焼き屋台になつてるでゴザルな」

「せつかくだから食べていきますか」「お祭りには欠かせないでゴザルな」

流れでそういうことになつた。とりあえず人だかりとは別で列があつたので、並んでみると
ことにする。集まっている人の割には三分くらいで順番が来た。

「すみません。たこ焼きを一パックいただけますか？」

「はいな。どっちのたこ焼きにするんや？」

「どっち、とは？」

逢川さんの言つていることがよくわからず首を傾げると、隣でたこ焼きに向き合つている
のは茅森さんと和泉さんの方を指す。どうやらどっちが作つてあるたこ焼きを食べたいかと
言つてゐるらしい。

「おーっと佐月さんと神崎さんの来客です。お二人はどちらのたこ焼きを選ぶのかっ！」

「二人ともショッピング店員と忍者といういかにもたこ焼きの味に厳しそうな舌をしていそ
うですかね。ここは王道のたこ焼きを作つてある和泉さんに軍配が上がるかもしれません」
「國見殿と東城殿は何をしてるでゴザルか……？」

「実況ですが」

「はあ……」「ヤー……」

まるで戦力外通告されたかのようだつた。

「あの、そもそもお二人は対決してゐるみたいですが、違いがわかりません」
せめて看板か何かで違ひが明確にわかれればと思つて見渡してみても、よくわからず。こう

なつたら本人に訊ねてみるしかないようだつた。

「月歌ちゃんチームは味変で勝負して。バナナとかチヨコとかそれはもういろいろと」

「一人なのにチームとは。

「逆にユツキーチームは王道で勝負って感じだね」

だからチームとは。

つてあれ？ バナナとチヨコ？

「待つてください。31Aはたこ焼きの材料しか用意してなかつたはずです」

「ああ、あたしの食材はそこら辺からボ○モンゲットだぜしてきたから」

「つまり野生から拾つてきたつてワケやな」

要するに他の屋台から貰つてきたようだつた。まあ事前に申請されていた食材と別の食材を使つていてるからといってお咎めがあるわけではないし、別にいいか。

「つてことで王道と味変、どっちがええんや？」

改めて逢川さんが訊ねてくるけど、関西人的に邪道はいいのかと疑問に思つてしまふ。いや、逆に関西人だからこそ邪道を許しているのかも？

ちなみに現在の勝敗は王道の和泉さんらしい。普通のたこ焼きを求めている人からしたらバナナとか入れられても……って感じですもんね。仕方ありませんね。でもアーデルちゃんの好みはどうなのかわからないので任せてみようと視線を向けてみた。

「ではせっかくなので両方頂戴するでゴザル！」

アーデルちゃんらしいといえらし回答。しかし、

「えーそこはどつちかを選んで勝負を成立させようよ」

茅森さんによるブーケイングが飛んできた。

「売り上げ貢献してくれてるんだから別にいいだろうが

「ユツキーがてへペりんこすることになつても？」

「いやお前……自分が負けててそれ言つてるのかよ……」

「……てへペりんこ♪」

「はいもうこの勝負意味ないー！　お前自分から負けたときの罰を先に実行すんじやねえよ」

「だつてユツキー的にももう勝負ついてるようなものなんでしょ。じゃあ意味のない勝負はさつさとやめて手を取り合つた方がよくない？」

「お前が始めた勝負なのになんてそらなるんだよ……」

どつちか選べと言つていた茅森さんが自らダブルスタンダードの道へと歩み始めた。

勝負がどうでもよくなつたこともあって王道と邪道、両方のたこ焼きを逢川さんが渡してくれる。出来立てで温かい。早めに食べておきたいところだ。

「なんか知らんが仲直りできてよかつたやん」

「やはり愛し合う二人は戦う意味なんてなかつたんですね！」

「さつきも言つてやろうかと思つたけど愛し合つてねえわ」

「えーあたしはユツキーのことこんなに好きなのに」

「はいはい。それはもういくらでも聞いてきたから。本気にはしねーけど」

「いくらでも……！ 聞き慣れたせいで倦怠期が来てるってわけね」

「だから刺激を求めて売り上げ対決なんて回りくどいことをしたんだ」

「もう何言つても変な解釈取るなこいつら……！」

「いつも来ても31Aは楽しそうだ。」

「そう思いながらわたしたちは静かに去つていく。」

※

屋台を回るのも満足したわたしたちはショッピングの前へとやつてきた。

いつもならジムに寄つていく人も今日ばかりはいなくて、ほんの少し寂しさすら感じられる。ショッピングもジムもお休みだし、わざわざ寄ろうと思わないことには通ることは無いのだからこればかりは仕方ない。

「そういえば風の噂で聞いたでゴザルが、佐月殿は和泉殿に憧れているでゴザるな？」
「え。まあそうですね」

別に隠してはいないので噂も何もないうな気もする。

でも、せつかくだしここで少しアーデルちゃんに話してあげよう。

「和泉さんは31Aのいぶし銀ですから。あのたこ焼き屋台でのやり取りだつて、和泉さんを中心には達することができますよ？」

茅森さんというリーダーをとことん支える存在。隣にいるのが当たり前で、何も言わずとも通じ合える関係。聰明で、縁の下の力持ちのような存在がとても羨ましく思える。ショッピング店員をこなしているわたしには、そういった素質があるとは思うのに、なかなかどうしてあの域には達することができない。

ときどき、わたしには何をするにしても才能がないんじゃないかと思うことすらもあつた。「佐月殿は、ツツコミ役になりたいでゴザルな」

純粹な感想。そのはずなのに、わたしはつい目を見開いてしまつた。

「ふふっ」直後、思わず破顔した。「そうですね。ツツコミ役になりたいのかもしれません」周りがボケきれないとか、既に31Cにはイヴァールちゃんというツツコミ役がいるからだとか、そんな理由が浮かんでくる。

才能の問題じゃないのかもしれない。アーデルちゃんの言葉を聞くと不思議とそう思えた。

「アーデルちゃん」

名前だけ呼ぶと、小首を傾げて返事をするように鼻を鳴らす。

「助けてもらつた忍にもし……会えたとしたら、何をしたいですか？」

この質問に、深い意味はない。

ことによつては叶えてあげようとか、気に留めておきたいとか、そういう気もなかつた。ただの気まぐれ。ただの興味本位。ただ、それだけ。

「そうでゴザルな……」

アーデルちゃんは顎に手をやり、逡巡し始める。

「昔、助けてもらつたことのお礼を言いたいのはもちろんでゴザルが、今の拙者ができる忍術を見てもらいたいでゴザル」

「もつと、ありませんか？」

「えつと……」

困惑した様子で再び考へてくれる。

「忍術を教えてもらつて、兵糧丸も作つて食べ比べもしたいでゴザルな」

「まだ、ないですか？」

「まだ……うーーーーーーむ……」

わたしがしつこく訊ねすぎてさらに悩ませる結果になつてしまつた。

本当に、深い意味はない。けど、ときどき思つていた。

もし、アーデルちゃんの前に”あのとき助けた忍”として姿を現した場合、何をしてあげ

られたら満足してもらえるのか。

満足してもらわないと、長らく抱いていたアーデルちゃんの憧れの気持ちを終わらせてあげることができない。アーデルちゃんには最高の終わらせ方をしてあげたい。
そう願うのはわたしの我儘わがままだろうか。

なんて考えていると、

「花火……」

大きな音と一緒にフレーバー通りの方角で欠けた大輪が咲いていた。

建物に遮られて十分に見ることはできないけど、十分すぎるほどに綺麗に咲いている。
どん、どん、と花火が打ちあがるたびに、わたしを身体の芯まで揺らした。

「花火を、一緒に見たいでゴザル……」

アーデルちゃんは、大輪の花々を見つめながら言つた。

その横顔を見ると、思わず釘付けになつてしまふ。

優しくて、どこか儂く、切ない笑みを浮かべている。

花火を見るくらいに他愛のないことしたいという解釈もできる。だけど、今はただ純粹に憧れの忍に想いを馳せているのだろう。その様子を、わたしは見守ることしかできなかつた。

——カシャツ。

遠くから小さな音が聞こえた。見ると、ぶんちゃんがカメラを持って遠くで立っている。

「いないと思ったらこんなところにおつたか」

「探したでゲス」

「あれ？ イヴアールちゃんはどうしたんですか？」

わたしたちを探していたのはともかくとして、いつの間にかぶんちゃんの同伴者が巫呼ちゃんに代わっていたことに気づいた。お祭りという一大イベントなのに席を外すなんて何かあつたんだろうか？

「あいつなら司令官に呼び出されて一人でどつか行つたわ」

「代わりにカメラを渡されて二人の写真を撮るよう言われたでゲス」

やたら楽しそうにカメラを掲げるぶんちゃん。そんな光景が目の前にあるにも関わらず、わたしは嫌な予感がしてならない。理由はもちろん、イヴアールちゃんと司令官が話をしているという点だ。呼び出されたってどういうことなんだろう。

「そうでゴザつたか。って、二人？ 拙者と佐月殿の写真でゴザルか？」

瞬間、巫呼ちゃんがハツとして——「豊後おーーー！」ぶんちゃんの後ろに回った。

「な、何するでゲス！ ヘルメットをグリグリするなでゲス！」

巫呼ちゃんがわたしに気を遣つてくれているのを見て、思わず前に出た。

「二人組の写真、ですよね。ぶんちゃん、カメラを貸していただけますか？」

わたしとアーデルちゃんの写真ならさつき撮ったので、今度はぶんちゃんと巫呼ちゃんだ。巫呼ちゃん意表を突かれたような表情をされたけど、ぶんちゃんは素直にカメラを渡してくれた。少し距離を取りつつ、グリグリ中の二人の姿をレンズの中に収める。

「アーデルちゃんも中に入ってください」

「ヤー！ 二人より三人のがいいでゴザルな」

誰よりも楽しそうに両手を上げている中でシャッターを切つてみれば、写真の中でも大半分を占めていた。ぶんちゃんや巫呼ちゃんに比べると背も大きい方ではあるので、大変目立つっているように見える。

いい笑顔だ。

忍としてどうなんだろうと思うところではあるけども、一人の女の子として見てみれば写真を撮つてここまで晴れやかに笑ってくれるなら嬉しいことはない。こんなに楽しい思い出があつたことを、後で振り返ることがあつたなら胸がいっぱいになつてくれると確信した。

そんな未来のことについて想いを馳せていると、巫呼ちゃんが手を差し出しているのに気づいた。

「佐月、カメラを寄こせ」

「今度は佐月殿も一緒に撮るでゴザルよ」

無言で巫呼ちゃんにカメラを渡した。けど、そこで気づいてしまう。

「これ、ちゃんと撮ろうとすると一人が持つていないので不便ですね」

「……それならこうすればよろしいかと」

巫呼ちゃんの上からひょいっとカメラを拾つては上から自撮り風に構え、音を鳴らす。31Cの中でも一番背が高い彼女からしてみれば、五人を枠内に収めることなど造作もない。咄嗟に構えたポーズも、慌ただしさが見え隠れしていてわたしたちらしいあなんて思いつつ改めて訊ねる。

「星羅ちゃん。すごいタイミングで来ましたね」

お祭り中は単独で行動していたようだつた。お祭りでも占いの屋台は開かないと言つていだし、人が集まるようなことはあまり好きじゃないのかもしれない。

「……いえ、最初からここにいたところにみんなが集まってきたもので」

「でしたら声をかけてくれればよかつたのに」

「……そうするわけにもいかないでしよう」

「星羅ちゃんはまたそういうことを言いやがるんですね……」

遠くから見守ろうとする星羅ちゃんのスタンスに向けてため息をつきそうになつた。

「何の話でゴザルか？」

だけど、アーデルちゃんがわたしの方を見てきた途端に我に返る。

「二人きりの話をしているところに気を遣つてくれていたみたいですね」
そのままたちまち小さく微笑んでは誤魔化した。

「そうでゴザつたか！ 近くにいたのに気づかなかつたとは、もしや桜庭殿も忍の才能があるでゴザルな？」

「アーデルちゃんも見習いやがれ♪」
「拙者は目立ちたいからこのままでいるでゴザル」

「目立とうとしている根本的な理由も、わたしが既に見つけている時点で自己満足でしかない。わたしが正体を明かせば、アーデルちゃんは忍ぶことを覚える忍者になるのだろうか。アーデルちゃんが忍ぶことを覚えたなら、それはそれでアーデルちゃんらしさを失う気がするし、かといって忍として成長したい本人の意志を尊重するのであれば忍ぶことを覚えてほしいところではある。

まあ、どっちでもいいか。

アーデルちゃんがここから先、どう生きるかなんてわたしが決めることではない。
だからわたしは冗談交じりにいつも言つている。

「忍ベ♪」と。

そう、言おうとしたところだつた。

『31C神崎アーデルハイド。直ちに司令官室へ出頭』

お祭り中に放送で呼び出す司令官の淡々とした声に圧されてしまった。
「アーデルちゃんだけが呼ばれるなんて珍しいですね」

珍しいことだけに、なぜかわたしに悪寒が走っている。

そのことを悟られないよう、わたしはできるかぎりスピーカーを見つめていた。「ヤー。そうかもしれないでゴザルが、きっとあのことでゴザルな」「のこと？」

そういうえばさつき、司令官に直接何かを掛け合っていたようだ。

息を呑む。どうか思っている通りのことが起こらないでほしいと、ただ切実に願う。

「もしよければ佐月殿も一緒に来てほしいでゴザル」

アーデルちゃんの笑みが、わたしの表情を強張らせた。

※

「来たわね。って佐月も一緒なの？」

「来るよう伝えたのは神崎さんだけのはずなのだけど」

司令官室に入るとイヴ・アールちゃんも一緒にいた。といえばイヴ・アールちゃんが呼び出されたって巫呼ちゃんが言つてたつけ。

二人の間には有無をも言わせぬ雰囲気があつた。特に司令官は帽子を深く被つて、わたしに視線を向けてくる。ハツキリと言つてこないものの、どう考へても一つだ。

「すみません。お邪魔ならわたしは退室しま——アーデルちゃん？」
と踵を返したところ、アーデルちゃんが腕で通せんぼしてきた。

「拙者がついてくるようにお願いしたでゴザルよ。目を瞑つてほしいでゴザル」
清々しいほどに愚直な目だった。対抗しているわけでも、下手に出ているでもなく、ただ
真っ直ぐに自分の信念を貫き通すような、そんな目だ。

司令官はイヴアールちゃんに視線を向けた。死角になっていたのでどんな表情をしていた
のかはわからなかつたけど、少なくともわたしがいない方がいいというのはイヴアールちゃ
んの意志でもあつたみたいだ。視線をわたしに戻すと、嘆息した。

「まあいいわ。遅かれ早かれ佐月さんにも関係のある話なわけだしね」

「わたしに関係が……？」

わたしのオウム返しに気にも留めず、司令官が続ける。

「まず神崎さん。先ほどの返答だけど、確かに今の状況でハイドロペリッシュュを倒すきつか
けを作れるのはあなたしかいない。それも、三日後の早朝という限られた時間でね」
「おお！ それはよかつたでゴザル！」

「待つてください！ アーデルちゃんしかいないって、どういうことですかッ!?」

突然の話に、頭に何かで殴られたような衝撃を受けた。
さつき話していたことって、ハイドロペリッシュュのことだつたの……？ アーデルちゃん

は一体何を話したの……？

「奴を地上から銃火器で撃ち落とすのは無理筋だというのはもうわかっているわよね」

「ええ、まあ……」

「ハイドロペリッシュュは高度一万メートルよりも高い成層圏にいる。遠距離の攻撃が効かな
い以上、どうにか近づいて、奴が意図しない爆発を起こして浮遊能力をなくす必要があるの」
「どうにか近づくって、成層圏まで飛んでいくってことですよね？ そんなの……」

いや、飛ぶ……？

絶対に無理なはずなのに、なんとなく想像してしまった。

高度一万メートルまで飛んでいくその姿を。

そう、隣に――。

セラフ部隊で唯一、風を味方にして飛ぶことができる人がいるではありませんか。

「拙者のムササビの術でゴザル！」

嬉々として発言するアーデルちゃんにわたしは声を荒げる。

「無謀すぎます！ だいたいムササビの術があつたとしてもどうやつて成層圏まで行くと言
うんですか!? そんな都合のいい上昇気流があるならまだし……も。三日後の朝……」
声に出しながら今までの話が繋がっていく。気持ちいいようで気持ち悪い感覚があつた。
司令官は時間を指定している。これはつまり、上昇気流がハイドロペリッシュュの付近で発

生していることを意味する。

ショップ店員は日頃より天気に敏感だ。一週間先どころか、一ヶ月先も見据えて品揃えを考えることだつてある。ゆえにわたしは、その条件を揃えてくれる自然現象がわかつてしまふ。

そう。それは——。

「台風……」

「察しがいいわね。神崎さんはハイドロペリッシュュが台風の目と重なる時間がないか訊ねてきたの。それが三日後の朝。神崎さんが上昇気流に乗つて成層圏に到達できる唯一の時間」無謀な話だ。あまりにも馬鹿げている。

だけどここで感情的になつてはダメだ。どうにかして作戦を中止させないと。

馬鹿げている作戦に頼るほど、今の司令部には余裕がない。そこをどうにか突くんだ！

「問題が多すぎます。低気圧の問題や酸欠になる可能性だつてあります」

「一つ、低気圧は軍が配備しているその服で人体をある程度守ってくれる。二つ、これから急ぎで簡易の酸素ボンベを手配する。これで満足？」

「ハイドロペリッシュュは子キヤンサーを生み出します。空中戦になります」

「子キヤンサーは起爆剤にしかならない雑魚でゴザル。一人で十分でゴザルよ」

「アーデルちゃんじやなくともいいはずです。空を飛ぶということなら他の人でも、ドロー

ンに乗るとか、やり方はいくらでも……！」

「そうね。ドローンは確かに有効な手段だわ。でも撃墜されたらその隊員はそれまでになつてしまふ。キャンサーが飛んでいる以上、移動手段は複数あつた方がいい。もちろん神崎さんにはドローンでも移動してもらう。ムササビの術は二の次よ」

「二の矢三の矢が撃てるよう、風呂敷も何枚か持つていくでゴザル！」

そこからは何を聞いても答弁を準備していたと言わんばかりに対策を挙げられてしまう。手塚司令官にも上がっている。それなりに説明していたのかもしれない。今日立てた作戦だといふのに、ガツチリと固まつていて崩すことはできなかつた。

必死に反対するも、やがてわたしのカードが尽きてしまう。

「まだ何かある？」

いつも以上に冷淡に聞こえた。「いえ……」

返事をすると、司令官は改まって帽子の位置を直した。

「では決まりね。祭が終わつたばかりで悪いけど、明日から早速作戦のための前準備に取り掛かつてもらいます。詳細はまた追つて伝えるわ」

「「了解(でゴザル)」」

「「了解しました……」」

言いながら、イヴァールちゃんが罪悪感を孕んだかのような視線を向けてきていた。

（Day 6） オペレーション・ポラリス

——オペレーション・ポラリス。

ハイドロペリッシュ討伐として名付けられた作戦名だ。

まずアーデルちゃんが成層圏まで飛んでいき、撃墜させる。着陸地点は静岡県にある青木ヶ原樹海とされ、周辺にイージスの鎖を複数配備する。イージスの鎖に各部隊を配備し、レベル2のキャンサーながら総動員で討伐に挑むことになった。

撃墜してからは31Aが主力となり、水素の風船を膨らませないよう火を用いた攻撃で小さな爆発を起こしつつ、浮遊を阻止。仮にうまくいかずともイージスの鎖で捕まえ、空へ逃げられないようにしていく。

二重で対応策を執っていく抜け目のない作戦だと思うところではあるけども、ハイドロペリッシュはまだわかっていないことが多いらしく、これでも不安が残っているのだと司令官は言っていた。だつたら今すぐやめるべきだ、と声を上げたくなる。

だけど、本人が行くと言っている以上、わたしに拒否権はない。ここからいくら声を上げたところで作戦は中止にはならないのはわかりきっている。

どうにかして中止にできないものかを考えながら今日の朝食を口にしている最中だった。「聞いたよアーラン。ムササビの術で成層圏に飛んでいくんだって？」

「ヤー！ とはいって、31Aのみんなが主力であることに変わりはないでゴザルよ。落とした後のこととは頼んだでゴザル！」

「いやいや、アーラさんがいなかつたらその後のことは何もできないんだから。主力とか関係なしにお互い頑張ろ。特に今回アーラさんは一人で空に行くんだからさ。みんなが注目するよ」

「そうでゴザルな。拙者の檜舞台ひのきぶたい、とくとご覧あれでゴザル！」

さすがの持ち前の明るさとコミュニケーション能力の高さといったところだろうか。茅森さんをはじめ、アーデルちゃんを見かけた人たちが続々と鼓舞してくれていた。

なんだか複雑な気分だった。わたしはアーデルちゃんが作戦に従事することに大反対だというのに、他の方々は素直に応援して、素直に期待に応えようと照れと気合を入れている様子を見せている。わたしだけが臆病で、独りよがりで、

「拙者、目立つてゴザルよ。まさかこんな形で大舞台がやつてくるとは夢にも思つてなかつたでゴザル」

「よかつたですね。アーデルちゃん」

半分くらい思考停止させての発言だった。そのせいか、わたしの声音に感情が乗っていたのだろう。アーデルちゃんがわたしを訝しげに見つめてくる。

「佐月殿……？ どこか不機嫌そうでゴザルが、どうされたでゴザルか？」

「何もないですよ。よかつたじやないです。作戦が成功した暁にはアーデルちゃんを助け

た忍が会いに来てくれるかもしませんし」

内心、やつてしまつたと思いながら心臓が強く打ち付けてくるのを感じた。後のフォローする言葉にも投げやりだと自覚するくらいだ。言つていて自分が大人げないという思いでいっぱいになる。

「やつぱり何かおかしいでゴザルよ。拙者が何かしたでゴザルか？」

違う。アーデルちゃんはアーデルちゃんのままでしかない。

「本当に何もないんです。アーデルちゃんがわたしに何かしたわけでもありませんまるで悪いことをしたかのようにわたしを見ているけども、この想いを伝えたところでアーデルちゃんはどういう反応をするのだろうか。

「気のせいだぞ♪ そんなことより当日失敗しないように調整しやがれ♪」



「と、佐月殿の様子がおかしいのでゴザルよ。山脇殿は何か知つてゐるゴザルか？」

佐月が去つた後、31C一行が居座つていたテーブルには、山脇と神崎の二人だけが座つていた。

豊後も、天音も桜庭もいない。佐月も神崎と微妙な空氣を作つては去つていき、その余韻

だけが残されてどこまで話したらいいのかわからなくなる。

ひとまず、山脇の立場として少なくとも言えることはある。

「そんなこと言われてもねえ。心当たりなんてわかりやすいと思うんだけど」「教えてほしいでゴザル」

視線を外しながら言うと、神崎は身を乗り出して訊ねてきた。

八方塞がりというわけではないが、ハイドロペリッシュ討伐のためにいろいろと考えるところがいっぱい手が回っていないのかもしれない。

モヤモヤしつぱなしで作戦に臨むより、ちゃんとスッキリしていた方がいいだろうから素直に教えることにする。

「あんたが一人で行くことになつてからよ。あいつは単純に心配してるだけ」

と言いつつ他の心当たりもあるのだが、そつちの方は言わないでおいた。

「心配でゴザルか？ いやいや、いくら大群が相手でも一体一体は強くないでゴザル。そこまで心配するようなことはないでゴザルよ」

「確かにそうかもしれないけど、慢心してると足元掬われるわよ」

「む。気をつけなきやいけないでゴザルな」

神崎の誰よりも素直な点は見習いたいと思うところだった。自殺行為に見えるような猪突猛進さが見られることもあるのが玉に瑕ではあるものの、それもまた神崎がしつかり考えて

の行動もあるし、彼女らしいとも言える。

「ま、その調子ならあんたのことは心配する必要はないよう思えるけどね。以前だつたらまだしも、今の神崎の強さは他の部隊にも引けを取らないわけだし」

「そう言わると照れるでゴザルなあ……！」

こうして褒められると興奮するところも、言う側としては冥利に尽きるというもの。

これも日々、他に引けを取らないくらいの修行を重ねている賜物だろう。山脇としては神崎の強さには誇りを持っている。自慢の部隊員だ。

「とはいって、空中戦を見たわけじゃないから無責任に強いと言えたもんじやないけどね」

空で足場がない状態で戦うなんて今までの訓練でもなかつたことだ。

まあ、きっと大丈夫だ。神崎なら軽々とこなしてしまうのだろう。

「そういえば空中戦なんてやつたことないでゴザルな」

「え……」と山脇の口から乾いた声が飛び出る。「佐月が心配するわけよ。ほら、行くわよ」

山脇が先に立ち上ると、神崎は意図を理解したのかやる気に満ちた表情を見せる。
「アリーナでゴザルな！」

プログラムが組まれると、施設内に強い風が吹き荒れた。

施設内にはジャンプ台も設置され、二人して周囲の状況を改めて見渡す。

山脇は壁側を向き、手を前に出す。ここは上昇気流。

次に内側に手を出すと、緩やかな下降気流ができる。台風の目すなわち、アイウォールと呼ばれる上昇気流と下降気流の境目が見事に造られていた。

そしてキャンサーもところどころに散りばめられている。主に配置されているのがハイドロペリッシュから産まれる子キャンサー。この個体にも名を付けられ、爆発を誘発させるところライグナイトとされた。

「当日の高度九千メートルでの気流を再現しました。天気は常に予測が変わるものなのでこのようにいかないかもしれません。お気を付けてください」

「おー。七瀬殿、ありがとうでゴザル」

ダメもとで頼んではみたものの、台風の再現までできるのかと驚かされた山脇。つくづく軍の技術力には頭が上がらない。

「ここから雑魚を蹴散らしながら雑魚を倒しつつ、ムササビの術で上昇するわけね」

まずは雨と雲なしで風のみでのシミュレーションを行うこととした。

台風の目内部で戦闘および移動ができるかどうかを確かめるのだ。

「ところであんた、飛びながら戦えるわけ?」

「わからないでゴザルが、こういうのは一度イメージをして実践あるのみでゴザルよ!」

言つた直後、バツと風呂敷を広げてムササビを作る神崎。そのまま下降気流の中に微かに

発生している上昇気流を捕まえて浮上していった。

飛べるには飛べる。ただし、

「ヤーツ!?」

捕まえたはずの上昇気流が途切れ、ムササビが崩れてしまつたことにより神崎は墜落した。幸い地面まで大した高さではなかつたので頭や腰をさすりつつ、再び立ち上がる。

「そもそも安定して飛べないでゴザルな」

「え、詰んでない？ 飛べないんじや本末転倒じやない」

台風の目というものは大気が非常に不安定だ。上昇気流を捕まえることはできても、下降気流がほとんどの空間でブツ切りにされてしまい、道を失う。

二人して台風の目の中に上昇気流があるから飛ぶことは可能だとは思つていたものの、早速壁へと当たつてしまつた。

「大丈夫ですか？ もし無理そななら今から司令官に掛け合つて作戦中止を提言しますが」「大丈夫でゴザル。理論上はハイドロペリッシュに到達できるでゴザルよ」

七瀬の心配を払い、神崎は引き続き感覚を掴もうともう一度ジャンプ台に上がつてくる。理論上はできる。神崎の中では。

山脇に言わせてみればムササビの術自体理論上不可能だ。佐月から聞いた話によると、ムササビの術というのは実際の忍者でも使っていなかつたことなのだとか。わずかな風を掴ん

で飛んでみせるようなデータラメを実現してみせる力を持つている。

神崎ができると言えばできる。山脇は信じるしかない。

信じて、頼まれたことを全力でサポートするしかない。

「って、もう普通に飛べてるし……」

数えていたわけではなかつたが、だいたい五回ほど試行錯誤し、うまいこと風を捕まえて安定して飛んでいることに気づく。浮遊するだけじゃなく、アリーナの天井まで上昇していく、目的だつたハイドロペリッシュのいる場所まで飛んで行くことは可能だと示してくれた。神崎はジャンプ台まで戻つてくる。下へと降りてくる場合は上昇するよりか桁違いに楽しうで、無駄な調整などせずにこちらへ真っ直ぐに向かってきた。

「上昇気流がどこにあるかという部分に着目してみればコツが掴むのは簡単だつたでゴザル」「すごいわね……一応聞いてみてもいい?」

聞いたところで参考にもならないのだろうが。

「雲になるでゴザルよ」

「雲?」

「雲の行き先は風だけが知つてゐる。ムササビの術を習得したときと同じでゴザル」

要するに風と対話して上昇気流の在り処を聞いたつてことだろうか。

山脇は薄ら笑いを浮かべては、神崎に向き合つた。

「あんたやつぱり、天才よ」

「天才かはともかく、一つ問題があるでゴザル」

こういうときは照れたりはしないらしい。変なところで律儀なものだ。

「問題って何?」

「空中戦、難しいでゴザル……」

「え? 飛びながら戦えないんじや風呂敷を攻撃されてそのまま墜落するじゃない」

おまけに上昇気流も少ないために道は限られているようなものだ。仮に塞がれでもしたら上昇することは不可能になる。

「ヤー。風呂敷は予備を持ってば攻撃されても大丈夫として、問題は風呂敷を広げながら戦えないことにあるでゴザル」

神崎のムササビの術は風を捕まえて浮遊するということがポイントで、浮遊するまでに僅かなラグが生じる。その時間中は少なからず落下することになり、仮に風呂敷が無限にあつたとしても上昇と落下を繰り返すせいで目標まで到達することができなくなってしまう。

やはり空中にキャンサーがいるのがネックだ。戦えない以上、無理に戦おうとして落下されてしまう困りもの。なるべく戦闘は避けて通りたい。もしくは上昇気流なんかに頼らずに上昇できればいいのだが。いや、後者は簡単にクリアできるかもしれない。

「そういえば当日はドローンも使うのよね。そのドローンってこちらから操作できるの?」

七瀬に確認すると、答えはノーだった。

「周辺にキャンサーがいるとノイズが走ってしまいます。それに、今回用いるドローンの制御信号は届いて二キロ。成層圏には届きません」

「うーん。だったらこっちから神崎の戦闘のサポートをするのは難しそうね」
そんなものをどうして使うことになっているかは簡単だ。ドローンの操縦は上に乗つてい
る者が直接操縦する。至近距離でなら制御は送れる。電波にノイズが乗る心配もない。
ただ、山脇が想定していたことの実現は難しいようだった。

「サポートでゴザルか？」

「操縦しながらの攻撃は無理でしょ？ 私が遠隔でサポートできればと思つたわけ」
「確かにそうしてもらえるならありがたいでゴザルな」

可能なら、と愛想笑いを浮かべてくれる神崎を見て、山脇にやるせない気持ちが湧いてき
た。できることならそうしてやりたいが、無理だ。

神崎のムササビのように技術の問題とはワケが違う。物理的な問題がクリアできない限り
は解決しない。

「やはり修行でゴザルな。忍者は修行をすればすべて解決するでゴザル」

謎の忍者理論が展開された。佐月が聞いたら卒倒するかもしれない。

「修行って、何をどう会得すれば解決するつてのよ全く……」

「無理にずっとドローンやムササビに頼らず、キャンサーを足場にして戦うでゴザルよ」
 「忍者っぽいわね……」

「忍者でゴザルよ」

本物の忍者ですら扱わない忍術を使う忍者なわけで、ネオ忍者みたいなものだろう。
 ただ、キャンサーに乗るなんて考えたこともなかつた。盲点中の盲点だ。
 しかし、これはこれでもう一つ問題がある。

「燃えているキャンサーを足場にするの？」

「倒してから墜落するまでの一瞬の間をこう、飛び移るでゴザルよ」

「忍者っぽいわね……」

「だから忍者でゴザルよ」

むすっとちよつと不機嫌そうになる神崎だつた。かわいい。

きつと言うからには修行すればできるのかもしれない。もちろん神崎のことは信じている。
 「でも時間ないことは念頭に置いておいてよ。もう明後日、いや明日には出発するわけだし」「裏を返せばまだ明日まで時間はあるということでゴザル」

そんな一朝一夕ができるようになることではないだろう。

でも、やるしかない。この機会を逃せば、次にハイドロペリッシュの元へと辿り着くことができないかも知れないから。

「あんたがそう言うなら無理には止めないけど、無理しすぎないようにしなさい。あんたがいなくなるのは私も嫌なんだからね。無理だと思ったら早めに見切りをつけること」「そうさせてもらうでゴザル」

新たな修行の方向性を見出した神崎はさておき、山脇はその場を後にする。
時間を見つけてハイドロペリッシュユ撃墜用の爆弾を作らなければならないのだ。こちらもうかうかしてはいられない。

と、出口に近づくと人影を見つけた。

「……佐月。来てたのね」

遠くから修行で躍起になつてゐる神崎をじつと見つめている。

その目はどこか不安の色を孕んでいた。本人が言うからにはできるのだろうが、不完全な状態のまま当日を迎える可能性がある。そうなつたら死のリスクは高くなつてくる。

「アーデルちゃん、大丈夫ですか」

「本人は大丈夫だと言つてるけど、正直わからない。あんたの気持ちはわかる」
なんてこと、軽々しく言つていいものではないのもわかっている。

「だつたらわたしの代わりに止めてくれてもよかつたのに」

「そういうわけにもいかないでしょ。あいつは自分にしかできることだと胸を張つてる。

そんな神崎に面と向かって絶対に無理だなんて言えるわけがない」

神崎は今回の作戦に誇りを持って挑もうとしている。たとえ命が危うかろうと、無下にすることはできなかつた。

所詮、神崎は危ないだけだから。

「でも……！　このままじやアーデルちゃんは……！」

「佐月。いいからあんたはしばらく大人しくしていなさい。これは隊長命令よ」修行中の耳に入りそうな声を遮る。恨めしい目が山脇に突き刺さつた。

臆することなくじつと見つめてみれば、神崎に視線が向けられた。

再び山脇に視線が行く。この数秒の間に何を感じたのか山脇の知る由もない。

佐月は静かに口を開く。

「場所、変えませんか」

「……あの二人、なんか険悪？」

すぐ側を通る茅森がそう呟いていたのを山脇は聞き逃さなかつた。



「ありや、アーサンが先に訓練してる」

「おー！ 茅森殿も来たでゴザルかー！」

修行をしている途中、31Aが施設内の風を見て驚愕の表情を浮かべながら入ってきた。風も相まって遠くにいる彼女らの声は聞き取りづらかったもので、休憩がてら降りることにする。

「来たのはいいけど、こんな大がかりなステージになつてるわけだし、また出直そうかな」

「それは悪いでゴザル。早めに切り上げて拙者が出でゴザルよ」

せつからく今は台風の再現がされているとはいえ、当日の状況は31Aも経験することになる。同じ条件下で訓練を行うことは可能なはずだ。それに、自分一人のためにアリーナを独り占めするのも悪い気がした。

「いやいや、アーサンは一人で作戦にあたるんだからさ。こっちは六人いるわけだし、最悪連携すればなんとかなると思う」

「そういう慢心は良くねーと思うけどな」

「けど、一人でいる神崎の方が危険なんやし、うちらは待機していた方がええんちやうか」

「不承不承ながら私もそう思います！」

「その間フレーバー通り行つてこようかな。つかささんもどう？」

「そうね。どうせ暇なら息抜きしてこようかしら」

流れるように朝倉と東城の二人が出ていった。

「つてことでもうしばらく自主練してなよ。あたしらを待たせてるとか考えなくていいから」「ありがたいでゴザル！」では、早速やらせてもらうでゴザルよ」

長い休憩になりそうと思っていた中で気を遣つてくれてその場で跳ねるアーデルだった。

「せつかくだし見学させてもらうね」

「見られるのは大歓迎でゴザル！」

そうして再びジャンプ台にまで登り、修行の一連の流れを披露する。

見られていると思うと前よりか多少は動きがよくなつたが、本質的にコツが掴めているわけではなく、途中で形が崩れて落下してしまう。何度も落下しているからか、受け身だけは完璧になりつつあつた。

その様子を見て口をあんぐりと開けている者がいた。和泉だ。

「おいおい……こりや何しようとしてるんだ」

「キャンサーを足場にして跳躍からのムササビの術に切り替える練習でゴザル」

「ほんとに同じ人間かつて思えるくらいの凄技だつたぞ」

「そりやそうでしょ。アーサんだもん」

和泉が「なぜお前が誇らしげなんだよ」とツッコミを入れる。どんな形であろうと褒め称

えられるのは悪い気はしないものだ。

「とはいえる、まだまだでゴザルよ。本当はここからムササビの術に綺麗に持つていきたいでゴザルが、大気が不安定なせいでもたついてしまうでゴザル」

実際やつてみれば、キャンサーを倒し足場にすることはそう難しいことではなかつた。

その後が問題で、ある程度倒してしまえばムササビの術を使用する必要がある。なお、この場でドローンは楽なのはわかりきついていることなので、足として失つた場合で演習している。

「あたしらかしたらもう十分にすごいことだと思うけどね。だからこそアーラさんが一人で行くことになつてんんだろうけども」

「最初から一貫してムササビの術で飛んでいくことはできないのか？ キャンサーはうまく避けながら飛んでいけばそれなりに戦うリスクは避けられるだろ」

「ヤー。できないことはないでゴザルが、キャンサーが多数いる中で避けて通るのは至難の業でゴザルよ」

「だからこうしてキャンサーを足場にして倒しながら移動しようとしているわけだね」

「トランスポートがあるからある程度の補助ができるとはいえる、並大抵の努力としたところができる気がしねえな。倒しながらってことは足場にしようとしているキャンサーも落下してゐるわけだろ……」

「簡単でゴザル。倒すと同時に思いつきり踏み込むだけでゴザル」

「それをできる気がしねーからすぐえつってんだよ」

「同じ要領じゃないけどさ、もしかしたらめぐみんもできるんじやない?」

「む、そうでゴザルか?」

とそこらで國見と遊んでいた逢川に目が向けられた。

「なんや、話聞いとらんかったわ」

「せめてここにいるなら聞いとけよ呑氣だな」

「呑氣というよりやることがないだけではないだろうか。

「サイキックで空中にキャンサー固定して足場にできないの?」

「できんことはないやろうけど、そんな連続してサイキック使うのは無理や
そもそもサイキックで空を飛べるなら今回の作戦に採用されているはずだつた。
そこまで便利な代物ではないことくらいは軍も知っているのだろう。

「なんだ。めぐみんも空に行つて手伝えないかなつて思つたけど、それなら無理そうだね」
「勘弁しいや。キヤンサーもろともスカイダイビングなんてまっぴらごめんやで」

「そもそもどうやつて逢川も空まで行くんだよ。ドローンがあるとはいえ、壊れたら終わり。
第二の選択肢として成層圏までムササビの術を使うつづー常人離れの技を使うんだぞ」
「そこはほら、アーさんのムササビにぶら下がれないかなつて」

適當言い出したと言わんばかりに和泉がげんなりとした表情を作る。

「無理だろ。風だけで二人分の体重支えられるわけがねえ」

「いや、できるでゴザルよ？」

「マジかよ……」

斜め上から衝撃を受けさせる快感を得たアーデルである。

「拙者のムササビの定員は元々二人でゴザル。今回の風量であっても問題ないでゴザル」「でも今回台風で大気が安定してないんだろ？」

「そうでゴザルな。ちょっと誰かで試してみたいところでゴザルな……」

アーデルが悩むと同時に、全員の視線が一番背の小さい者へと向けられる。

「え、どうして私を見るんですか。なぜツ?!」

甲高い声での驚愕が耳を貫いた。高いところは苦手なのだろうか。

「いや、この中で一番軽いのおタマさんだからさ。空の旅ヘレツツ&ゴーしたくない？」

「レツツ&ゴーしたくありません！ 陸と海にいた人類が空に飛び立つなんて無理です！」

「ものは試しだよ。ここなら地面も見えるしさ」

「ま、まあ地面が見えるなら……」

とうまく言いくるめられてしまい、アーデルが國見をジャンプ台まで共に移動した。ちなみに移動中だけでも息を切らしており、高くなるにつれて激しくなつていった。聞いたところ

ろによるとヘリは問題ないらしいのだが、ジャンプ台ともなると怖くなつてくるようだ。

風呂敷は問題ない。万が一のことを考え、國見を抱えて受け身をとるイメージも作った。
「では、行くでゴザル！」

と、アーデルは國見の背中を押し「えっ」紐なしバンジー！

「ぎいいいいいやああああああああああああああああツツ！」

すぐにアーデルも飛び込み、國見を捕まえてからガツチリ掴んでもらい、風呂敷を広げる。
上昇気流の位置はわかつていた。あとは風を捕まえて軌道に乗るだけ。

「ぎいいいいいやああああああああああああああツツ！」無理無理無理無理無理無理無理ツ！

「あー、なんかすごい怖そう。ちょっと不安定だし」

「そりや台風の目なんてほとんどが下降気流で上昇気流は一部分にしかないわけだからな。
むしろそれを掴んでよく飛ぶわ」

なお、國見がアーデルの胴を掴みつつもじたばたと暴れているせいでもある。

暴れられつつも、國見を考慮しゆつくりと下降していくこととした。やがて地面に着くと、
腰を抜かして激しく息を切らす。

「ぜえ……ぜえ……死ぬかと思つた……」

とそこに逢川が近づいていく。飲み物でも渡すのだろうか。
「おいタマあ！」違つた。

「は、はいっ！」

「今度ジェットコースター乗ろうや。バンジージャンプでもええ」

「なんで今の惨状見て誘おうって気になるんだよ。お前は鬼か」

「というかこのご時世にジェットコースターなんてあるのか甚だ疑問である。

「まあ今の感じ見るとおタマさんどころかあたしが行つても無理そうかもね」

「そりやそうだろ。神崎の行先は完全に風の気分次第。誰かが補助についてキャンサーを倒

そうにもこんなジェットコースターみたいな状況で倒すのは困難だろうな」

そもそもその話、誰かが補助につくなんてアーデルは微塵も考えていなかつたので、無理な
ものが無理と証明されただけの話だ。

せめて一緒に来られる者がいるとしたら、それはキャンサーを足場にできるような者でな
ければならない上、空で戦えるような俊敏さが必要。そんな人に来てほしい……。

いろいろ考えていると、何人か心当たりはある。その中でも特に目ぼしい人がいる。

となれば善は急げだ。アーデルは鼻を鳴らして茅森に声をかける。

「茅森殿。拙者は少し席を外すので好きに使つてほしいでゴザルよ」

「それなら遠慮なく使わせてもらおうかな。どこか行くの？」

「佐月殿に協力を仰ごうと思つてるでゴザル」

「マリーのところ？」茅森はデンチョで時間を確認した。「今の時間ならまだいるかな——」

どうして佐月の居場所がわかるのかは訊ねないでおこう。

※

アリーナを離れて少ししてのこと。

場所を変えると言つて選ばれたのは時計塔。まだ明るい時間だからか、ナービィ広場でいちごさんとすももさんがキャッチボールをやつているのが見えるくらいには遠くが見渡せた。台風が近づいてきていることもあり、少し風が強くなりつつあることにも気づく。それは、わたしにとつて運命の時が近づいてきていることを知らせる合図でもあつた。

「……確か当日の31Cはアーデルちゃん以外、樹海近辺に配備されるんですよね」「それがどうかしたの？」

「いえ、わたしも現地に行くんだなあ……と思つただけです」

特に意味のない質問と回答。

アーデルちゃんだけが成層圏まで行き、他の隊員はイージスの鎖の起動および護衛に入る。ハイドロペリッシュが活動しているからか、地上のキャンサーたちも活発化してきているとの情報もある。きっと当日は雨を浴びせられながらキャンサーと戦うような熾烈しれつな戦いになることは容易に想像できる。

こんな無茶な作戦、やめた方がいいのに。と、昨日から同じことを反芻してしまう。

「司令官に言つて、あんたを残して作戦に臨むようにできるけど?」

「イヴアールちゃんはそこまでして止めさせたくないんですか?」

「そういう意味じやない。というか、神崎の実力は私よりも佐月の方が知つてゐるでしょ
知つてゐる……か。確かにそうかもしねれない。」

「……アーデルちゃんは、すごい子なんです」

「それこそ、小さい頃の姿を見てしまったわたしは、アーデルちゃんがどれだけ成長してき
たかを知つてゐる。」

「忍としての才能がないわたしなんかよりも、忍に憧れただけで独学で成長してみせて、空
想のはずの忍術まで会得してしまなうようなすごい子なんです」

本当に、とんでもない子を助けてしまったものだ。

ほとんどが自分のためだつたとはいえ、磨いたら眩しくらいに光る原石を拾つた。数年
後に磨きに磨き抜かれた宝石となつてわたしの前に再び現れてくれた。
だから、

「そんなアーデルちゃんが今回の作戦で命を落とすことになるかもしれない。今でも日々成
長を続いている希望の象徴のような子を早く亡くすなんて、あつてはならないんです」
わたしは、自分の命よりも、大勢の人よりも、アーデルちゃんを選ぶ。

命に代えても、守ると誓つた。

「佐月が神崎をどれだけ買つていて、どれだけ失いたくないのかはわからないけど——」
イヴアールちゃんが時計塔の手すりに腕を乗せた。

「神崎のやろうとしていることは、決して無謀ではないと思う」
「アーデルちゃんが亡くなつてもいいってことですか？」

「元々セラフ部隊ってのはそういう使命を背負つてゐるでしょ。死を覚悟せずにヘラヘラと戦場に足を運ぶ奴なんているわけがないんだから」

あるいはそういう人もいるかもしれないけど、少なくとも31Cの全員はキャンサーを危険分子ということくらいわかつている。

「確かに悪い言い方をしたら、死んでもいいってことになるかもしれない。けどね、私たちは人類のためにみんな命がけで戦つてる。死と隣り合わせの世界で必死に生きようと思いつながら戦つてきた。今までだつてそうでしょ。死にそうになりながら、人類のために戦つてきた。神崎が自ら買って出ているってことは、それだけ救いたい奴らがいるつてことよ」
我ながら嫌な聞き方をした。

こんな問答をしたところで、先の未来に変化があるわけでもないのに。

「…………イヴアールちゃんの言う通りですね」

アーデルちゃんの考えは、セラフ部隊として生きるわたしたちからして至極当然の在り方

だ。助けたい人がいるから自分が前に出る。それがそこらの適当なキャンサーだろうと、ハイドロペリッシュュだろうと関係のないこと。わたしも逆の立場ならそうする。

「今までと何も変わらない。その通り……」

「そうよ。神崎のことを信じてあげなさいな。あいつは一人でも行けると認められるくらいに強い、31Cの主砲なんだから」

「信じる……そうですね。信じて……あげないと……」

そうだ。アーデルちゃんは強い。

きっと一人でも、成層圏まで行つて帰つて来られる。

「信じてあげないと……なのに……」

でも、わたしは。

「どうしてもわたしは、アーデルちゃんを信じきることができないんです……」

「佐月……」

霸気のない声がわたしに刺さる。わたしも同じように、いやそれ以上に弱い聲音で続けた。
「心の中では納得できるんです。アーデルちゃんを信じようって」

いつだか毒を出してくるキャンサーがいたけども、あのときの事情とは少し異なる。

だつてあのときこそ本当に無謀そのものというか、現実すらも見えていない愚直さから毒に冒されたようなものの。

だけど今回も違う。

伊達さんだけが毒の霧に入れたのと同じように。

アーデルちゃんだけが成層圏まで自力で行くことができる。

周囲を渦巻いているキャンサーだって弱くない。

「無事やることをこなして帰ってくる。憧れの忍者に見つけてもらおうと、また修行に臨む。

そんな未来を信じたいんです。信じさせてほしいんです」

「佐月。ちょっと」

イヴアールちゃんがわたしと微妙に視線を逸らしては話を止めようとしてくる。

知るものか。

「わたしも何も知らなかつたら、今まで通りアーデルちゃんを単独で行かせられたかもしれない。でも、今回ばかりは止めたくもありますよ。イヴアールちゃんだけってわかりますよね。ぶんちやんにまでカメラを持たせるくらいなんですから」

わたしは、イヴアールちゃんにも怒りつつある。

あのことを知っていたら、わたしがアーデルちゃんを前線に出したくないって気持ちはわかるはずなのに。どうして……どうして止めてくれないの。

「佐月。いいから落ち着きなさい」

ただただ諭そうとしてくるだけのイヴアールちゃんに、わたしはもう限界が来てしまった。

「落ち着いていられません！　だつてあの占いの結果で……アーデルちゃんが……！」

「——拙者が、どうしたでゴザルか？」

「……ッ！」

背後から聞こえた声に、わたしはバツと振り向いてしまう。

アリーナにいたはずのアーデルちゃんが目を丸くしてわたしを見つめている。

「ど、どうしてここに……」

「ヤー。佐月殿に聞きたいことがあったと呟いていたら茅森殿が教えてくれたでゴザル。山脇殿と時計塔に向かっていた……と」

気づかなかつた。いや、気づけなかつた。

あまりにも感情的になりすぎて、周囲のこと何一つ気がいかなかつたんだ。

突然の出来事に冷や汗が湧いてくる。口の中が一瞬で乾き始めた。

「それで、占いがどうかしたでゴザルか？」

咄嗟に目を逸らす。こんなこと、言えるわけが……。

今のは紛れもなく先週、星羅ちゃんから告げられた占いに関することだ。あの結果をアーデルちゃんに教えてしまつたら……いや、むしろ……。

咄嗟に思いついたことで考えが変わる。こうなつたら、むしろ教えてあげた方がいいんじやないかと、そう思えてきた。

「何でもないわよ。ね、佐月？」

助け舟を出してくれるイヴアールちんだつたけど、わたしは振り払うことに決めた。こうなつたら覚悟を決めるしかない。

「桜庭さんの占いで、アーデルちゃんのことを占つてもらつたんです」

「佐月……あんた……」

イヴアールちゃんに視線を配る。

もちろんついてきたださいますよね、と。

「おー。そだつたでゴザルか！　どんな結果になつたでゴザルか？」

嬉々として訊ねてくるその姿に、悲しい未来を口にした。

「今回の作戦で、アーデルちゃんが亡くなつてしまふ、と」

一瞬、周囲から音が消えたかのような感覚に見舞われた。

風が吹く音も、時計が動く音も、わたしたちが息をする音もすべて。

すべてなくなつてしまつたかのような世界の中で、わたしは再び口を開く。

「アーデルちゃんは、死ぬんです」

何もない世界で心臓の鼓動だけがうるさい。いつもよりも強く打ち付けてきている。

今もまた、死が近づいてきている。

「さ……」

アーデルちゃんの震えた声がきつかけで、時間が再び動き出した。

「佐月殿は冗談がうまいでゴザルな」

「私が冗談で人の死を告げる不届き者に見えますか？」

「や、山脇殿……」

わたしと話すこと諦めてしまつた。

ただただ困惑した表情で、イヴアールちゃんに顔が向けられる。

「私も桜庭の口から結果は聞いた」

「昨日、イヴアールちゃんがカメラを用意してくれていたのはそういう事情があつたんです。
隠していくごめんなさい」

アーデルちゃんには酷だけど、このまままくしたて作戦を諦めもらいたい。
そうすれば死ぬことはない。憧れの忍に想いを馳せる日々が終わることはない。
アーデルちゃんには、生きていてほしい。

そう、思っていたのに。

「ヤー。そうだつたでゴザルか！ これは一本取られたでゴザルな！」
たちまち持ち前の明るさを取り戻し、笑みを浮かべた。

どうしてそんなに笑っていられるの？ どうしてそんなに平氣でいられるの？

何か間違えたことを言つただろうか。そんなはずはない。どうしたら……どうしたら諦めてくれるんだろう……いや、まだ諦めてもらうことはできるはずだ。

「無理して作戦に行く必要はありません。今回は中止にしてもらいましょう」「ナイン。それは無理な相談でゴザル」

「え？」

聞き間違えたかと思つて、もう一度訊ねる。

「行くんですか？ 作戦」

「行くでゴザル」

「死ぬ可能性が高いのにですか？」

「絶対当たるわけではないでゴザルよ。桜庭殿の占いの的中率は53%でゴザル」

違う。星羅ちゃんの占いは必ず当たる。アーデルちゃんはそのことを知らない。

「わたしは……行つてほしくありません」

「それはわかつたでゴザル。だから佐月殿はあんなにも止めてくれていたでゴザルな」

震えるわたしの頬にアーデルちゃんの手が添えられた。

少し、汗ばんでいる。先ほどの練習のことがあつてなのか、急に死ぬことを告げられてなのかはわからない。後者であつてほしいと、願つていた。

「いつ死んでしまうかはわかりません。成層圏へも、片道切符となるかもしれません」

「……佐月殿。桜庭殿は拙者が運命の人と背中で感じるとも占つてくれたでゴザルよ」

「それがどうかしましたか」

「拙者はまだ、運命の人と会っていない。矛盾しているでゴザル。この事実がある限り、死ぬ可能性はさらに低くなるでゴザルよ」

「ですから星羅ちゃんの占いは——」

必ず当たる。そう言いかけたところで噤んだ。

作戦当日、運命の人と会った上で死ぬと告げて何になる？

ただただわたしがアーデルちゃんに死んでほしいと捉えかねない発言だ。

それでも言わなければならない。占いは絶対に当たるのだと、当たるからどうか死に行くようなことはしないで、と。

「それに、行かなければ運命の人に会えないかも知れないでゴザル。残念でゴザルな佐月殿。拙者を行かせたくない気持ちはわかるでゴザルが、むしろ奮い立たせてしまつたでゴザルよ」

強く言いのけるその口は、とても頼もしい。

きっと、アーデルちゃんには何を言つても行こうとするのだろう。

きっと、必ず死ぬと言われても何かと理由をつけてポジティブな考え方をするのだろう。だつたらもう、わたしがこれ以上言うのは野暮ではありませんか。

「そうと決まつたら修行あるのみでゴザルな。二人とも、聞かせてくれて感謝でゴザル」「待つてくださいアーデルちゃん。わたしに聞きたいことって、なんだつたんですか」

踵を返して時計塔を降りようとするので、つい呼び止めてしまつた。

そしたらアーデルちゃんは悲しみの籠つた愛想笑いを浮かべて振り向く。

「……忘れてしまつたでゴザル」

いつもより足早で階段を下りていつてしまつた。

足音がだんだん遠くなつていくたびに、やるせない気持ちが強くなつていく。

「あんたこの前、弟切草が神崎に似合うつて言つてたわよね」

足音がなくなつた途端、イヴアールちゃんが言つた。「聞こえてたんですか？」

「まあね」

ぶんちゃんと遊んでいたと思つていたのに、案外わたしたちのこともずっと気遣ってくれていたらしい。イヴアールちゃんも初めて会つたときから随分と変わつたな、なんて口にはしないけど感じてしまう。

「弟切草。確かに悪いイメージがあるけど、今まさにその通りだつて私も思う」「そうです」アーデルちゃんには伝わっていないけども。「そうなんです……」

さつきのやりとりもわたしにとつて弟切草そのものだつた。

「なんで、伝わらないかなあ……」

と言いつつ、そもそも恥ずかしくて伝えようとしているなかつたわけだけども。

「回りくどいやり方じや、神崎には何も伝わらない」

「そう、ですね」

愚直で、正直なアーデルちゃんには直接伝えないとどうしようもないのだろう。だからわたしは、わたしのやり方でアーデルちゃんを守る。

「イヴァールちゃん。わたし、決めました」

佐月マリ、最後の大勝負。

覚悟なんて生易しいものはいらない。

わたしはこれから、命を賭する。

それが修羅の道だと、関係ない。

どつちみちわたしには、アーデルちゃんがいない世界なんて、生きる意味がないから。「私、段々と31Cが気に入ってきて、今じゃ誰も失いたくないと思つてたわけだけど」と共犯者は、諦めたように笑ってくれた。

「仕方ないから、付き合つてあげる」

（Day7）嵐の前の

「……雨足が強くなつてきました」

朝、星羅ちゃんがカーテンを開ける音で目が覚める。

気になつて外を見てみると、風が相まって雨の角度が傾いているのが見えた。

「本当に、こんな中で作戦を執り行われるんですね」

夜はこの程度では済まない。窓を叩きつけるような雨風となつて眠れないような夜になるんだろう。

「お互いの位置を常に把握しながら支え合わんとな。死人が出てもおかしくない。この先、もつと強くなつていくからな」

台風の目に入る時間だけは晴れて風も少ない環境になるとはいえ、その時間外は熾烈な戦いを強いられることになる。

足場もぬかるんで移動すら困難になる。さらに深夜から早朝にかけての作戦行動。ただでさえ樹海は自殺の名所として名高いのだから特に気を付けなければならぬ。

そして、明日は。

「豊後は私から決して離れないこと。いい？」

「はいでゲス」

31Cの部隊長を務めるイヴアールちゃんにとつて、とても大事な日にもなる。



「空では戦わずに避けてハイドロペリッシュュに近づく。それがあなたの結論ね」

「ヤー。あくまで目的はハブキヤンサーの撃墜。針の穴に糸を通すかのように華麗に辿り着いてみせるでゴザル」

「次に繋いでくれるなら経緯は問わないわ。あと、空は強いキヤンサーはいないそうだけど、無理だと思つたら退却すること」

「了解でゴザル」

作戦前のミーティングは通常、各部隊長のみが参加することとなつてゐるが、今回はアーデルが先陣を切ることから特別に最後の意志確認を行う運びとなつていた。

結果、最初に想定していたようなイグナイトを倒しながらハイドロペリッシュュを撃墜するというわけにはいかなくなつたが、アーデルの意志は固い今まで成層圏まで行く決意が揺らぐことはなかつた。

極端な話、今回の敵は空から爆撃されると一巻の終わりといふこともあり、より一層の緊張感があつた。基地を含め、各ドーム住民の命運はアーデルにかかる。

と、いうのに。

(皆の視線がすべて拙者に……自立つてゐるでゴザル……)

死ぬ運命が待ち受けているというのにあくまでいつも通りなアーデルだった。もちろん緊張感がないわけではない。自分の命とその他大勢の命がかかっている中で、楽観的に作戦に臨むなんて気はさらさらなかつた。

死ぬかもしれない。そうだとしても、守りたい人たちがいる。

セラフ部隊としての矜持を胸にして、飛び立つことを決めた。

「それとわかっていると思うけど、地上のキャンサーたちがいつも以上に活発になつてきてゐるわ。群を為して移動をしているようだから、敵対するときは必ず連携を取ること。単独での行動は避けるように」

部隊長ら全員が一斉に返事をしてミーティングは解散となつた。

そのすぐ後に、七瀬がアーデルに近づく。何やら見覚えのない物を持つていた。

「神崎さん。簡易の酸素ボンベと時限式爆弾になります。予備を含めてお持ちください」

「おおー！ 何やら忍者っぽい作りになつていてるでゴザルな！」

一つは竹筒のようなもの。まさに水団の術を彷彿とさせる出来栄えとなつており、アーデルの忍魂を燻ぶつた。

物を受け取り、隅々まで確認すると横に咥えて使用することがわかる。

「天音が気を利かせて竹筒で作ってくれたのよ。そこに出っ張っている部分を押し込むと中で化学反応が起こって酸素が生成される仕組みになってる」

「そうでゴザルか。天音殿……」

「忍らしさを求めて作成してくれる天音の優しさが身に染みるようであつた。

「ちなみに爆弾の方は山脇さんにも助力いただいています」

「別に言わなくてもいいのに……」

七瀬が言った側で頭を搔く山脇である。

爆弾の方は箱にタイマーと四つの吸盤がくつついている形となっていた。ハイドロペリッシュの風船に吸盤でくつつける。タイマーはデフォルトで三分となつており、任意で時間を変えることができるボタンもついている。

「……爆発と同時にセラフ由来の電流が流れるよう桶口に作つてもらつてる」

せつから浮遊できなくなつたとしてもすぐ風船作られたんじや徒労に終わるだけになる。
それを未然に防止するための策として講じているようだつた。

「さすがでゴザルな。山脇殿は」

「さすがも何もないわよ。私はあくまで頼んだだけ。何もしてないも同然」

「それなら拙者はその何もしていなることに感謝しておくでゴザル」
「はいはい」

部屋を出ると、柱の影からある二人が覗き込んできているのが見えた。

大きな水晶と大きな帽子。こんなにも目立つていては一介の忍として突っ込まざるを得ない。ちょうどいい。天音お手製の酸素ボンベを作ってくれたお礼をすることにしよう。

「桜庭殿に天音殿。こんなところで何しててゴザルか？」

「……神崎さん」

「桜庭殿……？」何やら水晶を構えてじつと見つめてくる桜庭である。髪で見えはしないもの、その奥にある瞳に吸い込まれそうになってしまう。

桜庭が一呼吸終えると、次第に口を開く。

「……いえ、特に。ちょうど今、神崎さんの今後について占つていたところでした」隣で天音が帽子を深く被つて「趣味の悪い奴だ」などと悪態をつく。既に死ぬことを占つておいて、再び占つて確認するなんて見てている側としてもいい思いをしていないのかもしれない。

それでも桜庭はアーデルの運命が変わることを願つたのだろう。確かな想いを乗せて占つてくれたことはわかるからこそ、アーデルは嫌な気分になることはなかつた。

「結果を聞かせてもらつてもいいでゴザルか？」

「……しかし、悪い結果かもしません」

「そうだ。ただでさえ大型キャンサー討伐の要である貴様が占いの結果など聞いてもみよ。
作戦に支障が出るかもしれません」

天音は既に結果を聞いたのか、聞かせることに反対しているようだ。だが、結果がどうだ
ろうと、アーデルの意志が変わることは決してない。

「既に占つてもらつたのだから遠慮はいらないでゴザルよ。教えてほしいでゴザル」

アーデルにとつての占いとはあくまで決起付け。いい結果ならいい結果を楽しみに待つし、
悪い結果だったなら悪くなるのを避けようとあがく。ただそれだけ。

それに、悪い結果なのはわかつていて。既に死ぬ未来が出ているというのに、何を遠慮し
ているのだろうか。

「……そうですね。黙つていたなら変に邪推させてしまうかもしれません」

「それこそ支障となりかねないか」

天音の言葉に桜庭が頷いた。占いの結果を知らされずにモヤモヤさせられるよりも、今伝
えられる方がよっぽどいい。

桜庭は天音に視線を向けた。天音は踵を返した。

「元よりわしは占いなんて非科学的なものは信じておらぬからな。占いそのものの力を知つ
ている桜庭の好きにするといい」
「では神崎さん。今後の運命ですが——」

天音にお礼を言う前にその場を離れられてしまった。まあ、後でその機会くらいはあるだろうと思い、今は占いの結果を聞くことに集中しようと思つた。

改めて聞く覚悟をすると、桜庭は静かに告げる。

「弟切草が、すべてを指示示しています」

佐月の顔がアーデルの脳裏をよぎつた。



ときは平安時代。はるより 晴頼とねり という 鷹匠たかじょう がいた。

晴頼は飼っている鷹が傷ついても薬草を用いて治すことで有名だったが、薬草の名は秘密にして決して口外することがなかつたという。鷹匠の仲間だとしても頑なに教えることがなかつたとのことだ。

しかしある日、晴頼の弟がその薬草の名を他人に漏らしてしまつた。これを知つた晴頼は激怒して即座に弟を斬り殺してしまつた。そのときに庭に栽培していた薬草に弟のちしお 血潮ちしお 飛び散つてしまつ。その出来事以来、秘密の薬草は弟切草と呼ばれることとなる。

この由来より花言葉は『恨み』『秘密』『敵意』とあまりいい印象を受けない単語ばかりで、綺麗な花ではあるものの佐月から似てていると言われた際には困惑したのがまだ記憶に新しい。

見た目だけからそう言われたのだしたらまだいいものの、他に何か含みがあつてのことだつたのかと邪推してしまう。

(もしかして、佐月殿に何か秘密があるのでゴザルか……)

恨みを買った覚えはないし、敵意を向けられる謂れもない。含みについて考えるのでれば消去法で『秘密』があるのだということに行きつくるのが自然だろう。

だが、強烈な違和感がある。

『秘密』と重ねて『似ている』と発言していたところはどうしても不自然だつた。やはり単純に見た目だけの問題だつたのか。

(いや、そんなことはどうでもいいでゴザルな)

だつて、秘密を知る前に自分が死ぬかもしれないから。

桜庭の占いが当たる確率は53%。当たつているのかは神のみぞ知るところではある。

だがアーデルはどこか覚悟していた。周囲に佐月や山脇がいるときこそいつも通りに振舞つてはいたものの、死を宣告されて平氣でいられるわけがない。

もう一つ。運命の人を背中で感じるという結果があるのがまだ救いではあるが、占いがすべて当たつているならこれが果たされた上で死が待つていて。会いたかった人に会えるのは嬉しいけども、話したいことがたくさんあるのだ。そう簡単に死を受け入れられるものか。だから人知れず抗うと決めた。

でも、必死にあがいてあがいて、死に抗つたとしても。

きっと運命に逆らえないのだろう。

そうなつたら——。

(せめて、最後に佐月殿ともう一度だけ話をしたいでゴザル)
色々と考えを巡らせていると、自然と身体が動いた。

佐月が任されているショップを見に行く。どういうわけか、六宇亜が代わりに入っていた。
カフェテリアおよび購買を見に行く。いない。

フレーバー通りは封鎖されている。アリーナは31Aが使っていた。

31Cの部屋も山脇が豊後を寝かせていて、他はない。勢いよく入つてみれば「しーつ」と静かにするように注意されてしまった。今日は深夜に移動することになるために今のうちに寝る隊員が多い。まだまだこれから成長する豊後も例外ではない。

「神崎何してるの？」もうすぐ出発しなきやいけないんだから今のうちに休んでおかないと
雨に濡れている姿を見かねた山脇が訊ねてきた。「そうでゴザルが……」
「もしかして佐月を探してる？」

「よくわかつたでゴザルな」

「そりや、最近はあんたとつきつきりだつたわけだし」
そう言われるくらいにはベッタリだつたらしい。

自他共に認めるくらい佐月のことが大好きなのだ。

「佐月ならもうここであんたと話すことはないって言つてどつかに行つたわ」
だが、思いもよらないことを告げられ、頭の中が真っ白になつた。

「……拙者は、佐月殿に嫌われたのでゴザルか」

自分で言つていて悲しくなる。避けられる理由は心配しているからこそなのだと考えられる者の、嫌われる理由は何一つとて自覚がなかつたからだ。

もうすぐ死ぬかもしれない。その心配を誰よりもしていたのは佐月ではなかつたか。それを受けてもう話すことがないというのは、嫌いになつたから何一つ心残りがなくなつたということなのだろうか。

「別に嫌われたわけじやなくて、ここで話すことはないってだけの話よ」

アーデルは思いつきり首を傾げる。「意味がわからないでゴザル」

「わかりなさいよ。あいつのためにも、これ以上余計なことは言わないからね」

大きなため息をつく山脇。少なくとも嫌いになつたわけではないと断言するので、佐月に何か考えがあるとかだろうか。

でも、やっぱり。

最後の日になるかもしれないのだから、少しくらいは話をしたかった。

☆

夕方までしつかりと睡眠をとり、深夜の活動に備える。
ただそれだけの話のはずが、アーデルの中で心残りが多くてなかなか眠りにつくことができなかつた。

気づいた時にはアラームが鳴つていた。準備をして松本拠点へ移動をしなければならない。
刻一刻と決戦の刻が近づいてきている。

鬼が出るか蛇が出るか。占いが当たつているのかは、きっと自分にかかっている。
気持ちを切り替えないことにはどうしようもない。

そんなことは、わかつていた。

「それでは、拙者は別行動でゴザルな」

基地の外に置かれた雨避けのテントの下で一人。傘をさして軍用車の前に出た。
佐月以外の31Cの面々が揃つて見送つてくれている。どうせ松本拠点には全員行くことになるのだが、作戦前最後の顔合わせとなつていてる。

「……神崎さんに星々の祝福を願つています」

「頑張るでゲス」

「なんとしてでも生きて帰つてくるのだぞ」

「天音殿だけ何やら言葉が重いでゴザルな」

むずがゆくなり、そう頬を搔いて言いつつも、ここから先は必死になつて命のやり取りをしなければならないのが現実。成層圏まで行つて死ぬ可能性が半分以上もあるのだ。もしかしたら、彼らの顔を見るのも生涯で最後になるかも知れない。

アーデルは、基地の入口から先を見つめる。

(佐月殿は……やつぱりいないでゴザルな)

雨が強くてその先は全く見えない。気配すら感じられない。

話すことはできないにしろ、せめて顔くらいは見ておきたかった。

「神崎。あんたならやれるって信じてる」

「行つてくるでゴザル！」

気分は乗らなかつたが、精一杯の笑みを浮かべて手を振つて車に乗つた。

軍用車は一人で乗るにはかなり広く感じられる。アーデルとしては幼少期にリムジンに乗つたことはあるものの、どういうわけか自分が小さくなつたように思えて落ち着かない。

「運転手殿、松本拠点までお願いするでゴザル」

移動しているうちに慣れてくるだろう。そう思つて運転席に準備ができたことを伝える。なんとなくミラー越しに見てみると、目こそ帽子で隠れているが髪の長い女性だつた。彼女はすぐに出発することなく、後部座席に振り向いてくる。

「すみません。助手席に座つてもらつてもいいですか♪」

「了解でゴザ……」瞬間、聞きたかった声が聞こえた気がして、顔を上げる。「この声……」「ここから先は、地獄行きだぞ♪」

帽子をとった佐月が、笑顔で運転席に座つていた。

※

アーデルちゃんが後部座席で目をぱちくりとさせている。遠くを見つめるよう、どこか距離をとつているようにも見えた。

「どういうことでゴザルか？　あのような見送りの言葉があつたのに……まさか、拙者を行かせないようにするために」

「そんなんじやねえぞわたしを何だと思つてんだこんちきしょーめ♪」

いつもの調子で話をしたところで警戒されたままだつた。

イヴアールちゃんに言い残したことが伝わっているのは知つている。あんなことを言つておいて、今さらわたしの方から話をされたところで身構えられても仕方のないことだ。本当ならこのままこの車でどこか遠い所へ逃げ出してしまいたい。

「とにかく助手席に座つてください。アーデルちゃんが隣にいると安心できます」

「ヤー……では、失礼するでゴザル」

強い雨が車を叩きつける音も相まって、アーデルちゃんはいつもより静かに移動しているように見えた。運転席と助手席の間を縫つて入つてくるのも妙に時間をかけている。

アーデルちゃんがシートベルトをしっかりと装着したのを確認した上でペダルを踏んだ。

松本拠点までの長い道のりの始まりだ。

「免許、持つてたのでゴザルか？」やや不安そうに訊ねてきた。
わたしは笑顔を保ったまま告げる。

「今の車って便利ですよね♪ 自動運転もしつかりついていて事故の心配もありません♪」

「そうなんでゴザルな。知らなかつたでゴザル！ ところで佐月殿。免許は……？」

「雨足がどんどん強くなっていますね」

「台風は近づいてきてるでゴザルよ。ところで佐月殿。免許は……？」

再三訊ねてくるアーデルちゃん。そろそろ誤魔化しが効かなくなってきた。

諦めたわたしは、運転中といえど左に振り向いて口許を引き攣らせる。

「アーデルちゃん。ブレーキペダルつてどっちでしたっけ？」

「免許以前の問題でゴザルー!? なにゅえ運転を名乗り出たでゴザルか!? 前つ！ しつか
り前を見るでゴザルッ！」

前を指差して慌てふためく姿を一度見て、満足して前を見直した。

「なんて冗談ですよ。ブレークわからなかつたらそもそも発進もできませんし」

焦りを募らせてたちまちパニックになるアーデルちゃんが面白くてつい笑ってしまう。

破顔したわたしを見たアーデルちゃんがたちまち表情を柔らかくしていく。

「佐月殿は冗談がうまい。ゴザルな……。こんなにヒヤヒヤしたのは久しぶりでゴザル」「こんな世界じや免許なんて発行する機関が存在しませんしね」

「そうでゴザつたか。拙者、そこまでのことは知らなかつたでゴザル」

「まあ無理もありません。自動運転もありますし、大抵は軍の人が運転しますから」

じやあどうしてわたしが運転できているかというと、これはまた普通に練習したからだ。他の部隊の中にバイク使える方もいるという話は聞くし、何ら特別なことではない。

「ところで先ほどの質問に答えていますね。わたしがいる理由ですが、わたしもアーデルちゃんと一緒に成層圏まで行くからです♪」

柔らかくなりつつあつたアーデルちゃんの表情が一気に驚きへと変貌を遂げる。

「いやいや……待つでゴザル！ 拙者と同じく空へ行く手段はどうするでゴザルか!?」

「荷台に二人分のドローンを積んでいます♪ あと、最悪アーデルちゃんのムササビにぶら下がつちやうぞ♪」

「手段があるならいいでゴザルが、手持ち無沙汰になるだけでゴザル。所詮は爆弾を取り付けて降下するだけの仕事。佐月殿が出る幕はないかもしれないでゴザル」

「ムササビの術を使用しながらの攻撃ができないんだから驕おごった発言はやめやがれ♪」
正論を吐くとアーデルちゃんが「うつ……」と何かが刺さったような声を出した。

なお、このことは司令官も知っている。最初に話したときには無理と一蹴いつしきゅうされてしまつたけども、アーデルちゃんが空での対抗手段がないことを詰めると同行を許可してくれた。付け焼き刃で作戦を立てた司令部としても痛いところではあつたんだと思う。

「わたしが行くことで手持ち無沙汰になるなんてことはないと思います。むしろアーデルちゃんに近づかせないよう周囲のキヤンサーをブチ殺してやります♪」

何せわたしのセラフは銃型。アーデルちゃんにぶら下がつっていても遠くから攻撃を当てる
ことだつてできる。何一つ問題はない。

「大丈夫でゴザルか……？」ドローンや拙者にぶら下がるとはいえ、その状態で――
「これでも忍を目指していたんだぞ♪ 大船に乗つたつもりで飛びやがれ♪」

その台詞こそ、軽い口調ではあつたけども。

「助けてもらつた忍に、会えるかもしれないんですよね？」

わたしは決してアーデルちゃんを死なせたりはしない。

一番近いところで、わたしの命に代えてなんとしてでも守り抜いてみせる。

「……お願ねがいできるでゴザルか？」

「そのつもりで來たんだぞ♪」

（Day 8）滅びゆく樹海ときみの背中

松本拠点に着いたときには前がほとんど見えない強くなつていて、握るハンドルが重くなることすらあつた。普段運転をしないわたしからしたらちよつと危険ではあつたけども、なんとか辿り着けてよかつたと思う。

そこからは先に着いていた七瀬さんたちが準備を終えるまで少し仮眠をとつた。準備が終わる少し前に軍の人が知らせに来てくれたので、多少の時間を用いて身体を慣らす。外を見ると風の強さがピークに達していた。拠点のところどころに配備されている明かりも、枝などが刺さつて使い物にならないものもいくつかある。

台風の目が近づいてきている。アーデルちゃんの生死を分ける戦いも。時間は朝四時。雨合羽を着て外に出ると、ヘリの前で七瀬さんが待つていた。「お待ちしておりました」

変わらない冷淡な物言い。わたしにとつてはそれが逆に安心できる。

「いつものヘリと変わらないでゴザルな」

「成層圏付近までは耐えられます。乗り捨てるになりますので帰りはパラシュートをお使いください」

ヘリを使うことができるのは子キヤンサーことイグナイトが蔓延はびこる高度九千メートル付

近まで。そこから先は予めアリーナで訓練したようにドローンやムササビを使って上昇することになる。

もしドローンもムササビも使えなくなつたらそくなつたら終わりだ。パラシユートを使つてのんびりと帰るのみ。それはそれで構わないが、

「台風の中でパラシユートだなんて、随分な無茶ぶりですよね」

果たして雨風が強い中で使えるのか、甚だ疑問に思うところ。

「引き返すなら今が最後でゴザルよ」

「ご冗談を♪」

言葉狩りをしてきたアーデルちゃんを差し置いて、わたしが先にヘリの中に入していく。



午前三時。松本拠点から青木ヶ原樹海への移動中。

軍用車の中で移動も兼ねて仮眠をとつていると、共に乗つている31Bの会話が聞こえる。「すもも、出没するキヤンサーの情報確認したか?」

ストイックに作戦に臨むいちごが暗い中でデンチョを開き、内容を確認している。

山地を走り、揺られに揺られる中で画面を見ることができることに山脇は羨ましく思う。

「見たにや。前にビヤツコの視界を奪つた憎き個体がいるにや」

「ヴァウウウウウウウ」

すももはついでと言わんばかりにカルバスをビヤツコにあげていた。小さな食べ物の割に相変わらずよく噛んで食べるものだ。もしかしたら人類よりも食に感謝している節があるかもしれない。

「その個体だけ注視するんじやなく他のことにも目を向ければいいものを。合理性に欠ける」「樋口さんはまたそう元も子もないことを……」

柊は呆れてため息をついた。樋口の言っていることは正論ではあるが、同じ部隊内で状況が違つたなら山脇も感情的になつていていたことだろう。

車の中では仮眠もできずなんとなしに別部隊の会話を聞くと、自然と部隊長として自らを見つめ直していた。こういうときに別部隊を近くで見ていると、また得られるものがある。ずっと見ていていたのは彼女らも気分が悪いだろうと思い、外の状況を見る。

雨。宵闇。日照時間が長い夏とはいえ、日の出時刻はまだまだ先。何も見えずにただ窓に打ち付けられる雨粒を数えることくらいしかやることがなさそうだつた。

「あの二人、そろそろ空へ行くのよね」

「あやつらの方が先に出たからな。佐月の運転の技量はわからぬが、台風を考量した速度であつてももう着いている頃合いだ」

目を瞑つたまま天音が口を開いた。起きていたことに気づいてなくて少し肝を冷やした。

「……指定の時間まであと二時間。神崎さんの運命は神崎さん自身と佐月さんの二人次第」

そして桜庭も起きているようだつた。こつちは目元が見えないので常に起きているのかわからない状態である。

作戦上のタイムスケジュールとしては、二時間後にハイドロペリッシュと台風の目の中心が重なる時間が重なることになつていて。ただ、神崎がムササビを使うとなると高度九千メートルから千メートル上昇するのにかかる時間が大まかでしか把握はできない。

逆に爆発が起きてから落下までの速度は計算ができていることだつたが、結局最後までハイドロペリッシュの詳細がわかつていないので、キャンサーがノイズを発している以上、二人との連絡手段がないために急な開戦となるのは必至だ。

ただ、その前に最初のステップ。成層圏での爆破が上手くいくかにかかっている。

「あの二人次第……ね」

山脇は寝ている豊後の頭を撫でた。

神崎なら大丈夫。佐月がいたなら百人力だ。

それなのに、どうしてだろう。

山脇の中で胸騒ぎが収まることを知らない。

「天音。わかつてるとと思うけど、今日は豊後の薬は投与しないようにね」

「ああ……わかった」

こんなことを確認しなければならないのも心苦しい。

どうか何一つ問題が起きずに明日を迎えることができたなら、と切実に願う。

と、目の前でカルパスを食していた白い虎がのしのしと山脇の側へと寄つてくる。

「ビヤツコ……？」 私に何か用？』

鳴くこともなくただ側で身を寄せたビヤツコ。動物がこうして寄つてくることなどあまり経験してこなかつた山脇としては戸惑うばかりだ。

「山脇のことを励まそうとしてくれているのにや」

「私を？ そう……」

すももに聞けば、ビヤツコは心が弱つてゐる者に寄り添うのだと言う。

人の心がわかるのだ。

彼女が人の言葉をすべて理解できるのかはひとまず置いておいて、大事な作戦の前だ。今のうちに吐き出してしまおう。

「私ね。セラフ部隊に入つたばかりのときは、豊後さえ守れればそれでいいと思つてたんだけどさ、任務をこなしてくると31Cが全員いない状態つてのが想像つかなくなってきたの」「ヴァウウウウ……」

「今もそだろつて言つてるにや」

「私が言いたいのはそういうことじゃ……」

ビヤツコとすももの実直な言葉に山脇は一瞬目を見開き、首を垂らす。

「いや、そうね……うん……そうよね」

すべてを吐き出す前に、たつた一言で納得させられてしまった。

「離れているとしても、一緒に戦う仲間である事実は変わらないのよね」

もうじき、開戦の狼煙（のろし）が上げられる。

山脇は見えない空を見上げて、こう言うのだ。

「佐月。神崎のこと、頼んだわよ」

神崎を絶対に死なせない戦いが始まろうとしていた。



予定ではヘリで行けるところまで行き、キャンサーと会敵次第ドローンに切り替えて上昇するような算段になっている。

七瀬の事前情報では人工知能による完全自動操縦で安定しているとの話を聞いたものの、想像以上に過酷な乗り心地で早くもムササビで上がりたくなってしまうアーデルだつた。

まだ台風の目に入っていない以上、雨にさらされること請け合いで、訓練していない飛び

方を強いられることになる。ドローンも雨には十分耐えられるようにもなっているが、ヘリほど速く飛ぶことのできる手段はないものだ。

「さすが台風。最高の乗り心地でゴザルな」

「風は強いし、雨で視界も悪い。最高のアトラクションです♪」

強がつたジョークをかましてみれば、佐月が乗ってくれる。安全性が担保されていない乗り物は故障しているアトラクションと似たようなものだ。これではスリルを楽しむというより死に急いでいる気がした。

「これで墜落しても驚かないでゴザル。その心配は占いのおかげでほぼないでゴザルが」運命の人を背中で感じる、という占いの結果がアーデルの中でお守りと化していた。

ただの願掛けにしかなっていないのかもしれない。でも元々占いというのは――。
「思い出したけど、アーデルちゃんは星羅ちゃんの占いをポジティブに捉えますよね」
「占いとはそういうものではゴザらぬか？」

「そういうものの、ですか？」

アーデルの解釈に疑問を呈した佐月が僅かに目を見開いた。

「ヤー。最初から嫌なことになると思つて占うことはほとんどないでゴザルよ。佐月殿も大抵は何かしらの希望を抱いて良き結果を求めるものではゴザらぬか？」

人々アーデルがポジティブな考え方をしているだけかもしれないが、悪いことが続いている

る人だとしても未来に希望を持ちたくて占いに縋^{すが}るものだと考えていた。

「ですが、良き結果を求めたとしても、意表を突かれて悪い結果にもなります。アーデルちゃんはその結果すらもポジティブに捉えていますよね」

「悪い結果が出てきたなら予め知られたことに感謝してどう避けるか考えるでゴザル」

そんな単純な話。

こんなことを桜庭の前で言うことはできないが、占いというのは真に受け過ぎずに自分の行いの方を信じるべきなのだとアーデルは思う。

「それに佐月殿。日本には、当たるも八卦^{はつが}当たらぬも八卦という言葉があるのでゴザル」

「あ、はい。そうですね……?」

唐突なことわざにそんな素つ気ない反応を示された。

占いは当たるとは限らないから、吉凶どっちでも気にすることはない、というたとえだ。
「もしかしたらいい結果は当たって、悪い結果は外れて、そんな都合のいい未来が待つているかもしれないでゴザル」

「逆だった場合は、どうするんですか?」

ポジティブな考え方しかなかつたアーデルにとつて、その質問はあまりにも唐突過ぎた。
憧れの忍者にも会えず、ただ死ぬだけの結果になつた場合。どうするか……。
「そのときは……そうでゴザルな」

考える素振りを見せるが、結論はすぐに出る。

「笑つてごまかすしかないかもしけないでゴザル」

そう、笑みを浮かべた。

自分なりに必死に足搔いた結果なのだから、どうするもこうするもない。

そのときは笑つてやろうと思つた。憧れの人にも会えない人生だつたけども、大好きな人たちに囲まれていい人生だつたことに変わりはないのだから。

そうだ。存分に笑つてやろう。

「……なんだか。アーデルちゃんつて忍らしくはないですよね」

「む、そうでゴザルか？」

確かに普段から「忍ベ♪」とは言われている。

ただ、この言葉はそれとはまた別の話のようだつた。

「わたしの知つている忍なら感情を捨てます。そんなポジティブ思考を続けていられるのは

どちらかというと、正義のヒーローみたいですね」

「だとしたら拙者を助けてくれた忍者殿は正義のヒーローでもあつたでゴザルな」

佐月は首を垂らす。その心の機敏は、何一つ窺いることはできない。

ただただ一点を見据えて、ヘリに呼応するように髪を揺らしている。

「その人は、感情を捨てきれていなかつたんですね……」

「ヤー。温かかったでゴザルよ
温かかった？ 何がですか？」

顔を上げてアーデルを見つめる佐月。意外という言葉が瞳に映っている。
ただ思つた通りのことをアーデルは口にするのみ。

「あのとき感じた温もりを忘れたことはないでゴザル。とても温かくて、強くて、頼りになる背中。忍者殿には、助けられたことに安堵しているような、そんなやさしさがあつたでゴザル」

悪い者から助けてくれるヒーローな忍者。それが、最初で最後に見た理想の忍者。
アーデルは、その残滓だけを追い求めて修行を重ねてきたのだ。

「だから、感情を捨てる忍者が模範的という話ならそれは拙者の理想とはかけ離れているでゴザル。拙者は、あの日助けてもらつたあの忍者殿を目指しているでゴザルよ」
「アーデルちゃん……」

名を口にした佐月は、自らの手を胸にして前を見る。

「絶対にアーデルちゃんのことを守つてみせます」

なんて真面目な表情で言うので、アーデルは口許くちもとを緩ませる。

自分が死ぬかもしれない以上、その危険が及ぶのは佐月とて同じことだ。だから――。
「拙者も佐月殿を守つてみせるでゴザル」

「まずは自分の心配をしやがれ♪」

言葉を準備していたかのように即返されてしまう。

確かにそうだ、とアーデルは活気あふれる表情になつて声を上げるのだ。

「絶対、生きて帰るでゴザル！」

午前五時を回ろうとしていた。

少し日が出てきて、夕方のような黄金色の景色が見える時間だ。

「まもなく台風の目に入ります。アーデルちゃん、準備はできましたか？」

佐月がデンチョで現在地を確認し、アーデルが頷く。

雨と雲で視界は真っ白。ただ少し、目の前から光が漏れてくる。

それももうすぐ抜けて晴れた空の中に入ることになる。ある意味で一番落ち着く時間がやつてくるが、ある意味で気が抜けない時間もある。

ハイドロペリッシュに近づきつつある今、ヘリが飛ぶ方向はただ上へと参るのみ。アーデルは覚悟を決めた。

——絶対に死はない、と。

そして、その時はやつてくる。

「なつ……んですか……このキャンサーの大群は……」

「少し思っていたよりも、多いでゴザルな……」

アイウオールを抜けた瞬間、上空を位置どるイグナイトの大群に二人は圧倒された。半径十数キロ。台風の目内部で見えるだけでも軽く千を超えそうな勢いだ。キヤンサーとて知性を持っている。もしかしたらミサイルを警戒して大量に配備したのかかもしれない。これでは戦闘は必須。避けてドローンでも縫うように目的高度まで辿り着くことは難しいだろう。

「きやつ！」

「ヤーッ!?」

突如ヘリに衝撃が走り、大きく揺れる。佐月が顔を出して上を見上げた。

「アーデルちゃんプロペラが損傷しました。今すぐヘリを出ましょう！」

佐月が慌ててドローンを用意するものの、アーデルはあることに気づく。

ムササビに執着するあまり、起動する方法を確認していなかつた。用意されているドローンが思っていたものと違つており、バイクのような乗り方をする形だったのだ。佐月の見よう見まねで動かそうかとも思ったが、もたつくこと必至。そんな時間はない。それならば、と体一つでヘリを飛び出した。

「アーデルちゃん!?」

一秒後、佐月もヘリからドローンで脱出した。

直後にアーデルの背中から風呂敷が展開される。僅かな上昇気流を掴み取り、宙に浮いた。佐月はアーデルを見やり、シートの上に立ち上がる。

「わたし一人で迎撃します。アーデルちゃんは上昇に集中してください！」

「了解でゴザル！」

言い訳をしている余裕はない。直後、佐月がセラフを呼び出して周囲のキャンサーを一掃。一体一体が雑魚であることも相まって一撃で駆除されていく様はなかなか爽快だ。そして、感じるのはもう一つ。

（佐月殿が倒してくれるおかげで安心して上昇できるでゴザル）

自分が犯したミスについては今はできる限り考えないようにしつつ、状況を見渡す。

（しかしうかうかしてはいられないでゴザルな。あのドローンの機体も墮とされたら佐月殿の足を失ってしまうことになるでゴザル。早急にハイドロペリッシュュの元へ行かねば……！）

「あっ……」

大きな音と共に何かがドローンのプロペラに衝撃を与え、不安定になる。ただでさえシートの上に立つ危険な乗り方をしていたのだ。佐月以外だつたら落下していたところだろう。もう飛べないと判断した佐月はそのままアーデルに向かつて飛んできた。

「佐月殿！」

手を伸ばすわけにはいかなかつたのでしつかりと胸を掴めるように前に出た。

だが、僅かにズれていたようで胸ではなく腕を掴まれる。それでも落下されるよりはいい。「すみませんアーデルちゃん。タクシーの手配をお願いできますか？」

「ムササビによければあるでゴザルよ。あと乗ってから言うのはズルいでゴザル」

「なにぶん急いでいたもので♪ ここから先は手すりにさせてもらいますね♪」

「佐月殿の忍としての真骨頂、とくと見物させてもらうでゴザル！」

「忍じやなくてショッピング店員だぞ♪」

ミスに言及することなく、佐月が腕の力でアーデルから飛び出した。

「全員まとめて凍りやがれ！」

ダイヤモンドダストでキャンサー群を凍らせ、トランスポートで瞬時の足場にしていく。ドローンが使えない分、代わりの手段としてアーデルの道を切り開いてくれるようだつた。（しかしものすごい大群でゴザル……これを対処しながら上昇だなんてそれこそ針の穴に糸を通すような所業。佐月殿がいてくれて本当に助かつたでゴザル）

トル先まで先に行っているのがわかる。

ムササビが視界を邪魔しているせいで上空の状況は見えない。音で判断するに、数百メートル先まで先に行っているのがわかる。

ただ、あまり離れすぎていてはアーデルに危険が及ぶと判断したのか、

「只今戻りました♪ しばらくは安泰です♪」

凍つたイグナイトと共に落下してきては、足場にして飛んで再びアーデルと合流した。

「現在の高度は八千メートル。同じことをあと二回こなせばすぐです♪」
予定会敵高度から千メートルも低いところから始まることとなってしまったが、この調子だと問題なく辿り着けそうではある。

台風の目が過ぎ去るまでの制限時間は一時間ほど。完全に日が出てくるタイミングまで余裕があるので十分に間に合う。

「佐月殿と一緒なら簡単でゴザル」

一人じやないから、できると信じている。

「ですが、少し気になることがあります」

「どうしたでゴザルか？」

ぶら下がりながら思案し始めた佐月。先ほどの流れでおかしい点があつたようだつた。

「わたしが使用していたドローンですが、キャンサーが撃墜したという割には周囲から攻撃の前兆が見られませんでした」

どのキャンサーも、攻撃してくる際には発光するなど、わかりやすい前兆が見られる。

だとすればただただ突っ込んできたなどだろうか。それにしても気配に敏感な佐月が気づかないわけがない。

「周囲を見落としていた、というわけではなさそうでゴザルな」

「何かが上空にあるのかもしれません。少し注視しないと足元……いえ、ムササビを掬われることになりそうです」

「それはそれは……できれば予備は残しておきたいでゴザルな」

アーデルが所持している風呂敷の予備は三枚。できることなら地上に降りる用として最低限二枚は確保した上で任務を遂行したいところだ。

「そうですね。ただ、ここから上空の様子も見られるわけではないのでここからは一気に殲滅するのではなく、キャンサーを足場にして少しづつ上がつていこうかと思います」

「持久戦になるでゴザルが、大丈夫でゴザルか？」

「わたしを誰だと思ってるんだこんちきしょーめ♪」

間もなく第二ラウンドが始まろうとしてた。

だが、ハイドロペリッシュユは簡単に近づけようとしてくれないらしく、

「ツ……！」上からの何かが風呂敷に直撃した。「ヤーッ!?」

謎の落下物によって風呂敷が破かれる。ギリギリアーデルには当たらなかつたものの、風呂敷が早速一枚使い物にならなくなつた。咄嗟に予備の風呂敷を取り出し、再びムササビを作ることとなつた。

トランスポートで佐月に近づき掴んでもらつた後に上昇気流を捕まえて態勢を立て直した。

「ありがとうございます。アーデルちゃん、助かりました」

「はあ……はあ……危なかつたでゴザル」

思わぬ出来事に息切れを起こすアーデルである。ただでさえ酸素が薄い高度まで来ているのだ。簡易の酸素ボンベがなかつたら呼吸器に何か異常をきたしたかもしない。

「ドローンがやられた攻撃と恐らく同じですね。何かが投下されているのでしょうか」アーデルは落下物に関して感じたことを思い出す。

「急に衝撃が走つたと思つたら急に柔らかくなつた感じがしたでゴザルな」

「衝撃が柔らかくなつた？ それつて……アーデルちゃん、もう少し前へ出てください！」言われた通り前へ出る。次の瞬間、背後を白い物体が落下していった。

見覚えがある。強い力が加わるほど硬くなる、ハイドロペリッシュが生み出している液体。「非ニュートン流体です！ ハイドロペリッシュと垂直に重ならないようにしてください！」

「了解でゴザル！」

上の状況こそわからないが、落下物がどこにくるかでだいたいの居場所は把握できる。

奴とてこちらの正確な位置を把握して狙つた攻撃はできないはずだと判断した。

その判断は正解だったようで、非ニュートン流体が定期的に落下していくのが確認できた。先ほどからある程度上昇し、現在高度は九千メートル。大きさからして流体の重さを二百グラムと仮定。千メートルほど落下してきていることを考えると、時速五百キロで飛んできているようなものだ。野球ボールよりも重いものをそんな速度で受け止められるわけがない。

ドローンが使い物にならなくなるわけだ、とアーデルは腑に落ちた。だが、対処法がわかつてしまえばこちらのもの。

周囲のキャンサーも佐月が一掃し、順調に上昇。千メートルもあつという間に飛んでいく。もはやこの空間において、アーデルは気分屋の風を手遊びにするようだつた。

少ない上昇気流を掴んでいるのではない。上昇気流がアーデルに寄ってきているかのよう。驚くほどに順調だ。このままいけば問題なく作戦が終わるかも知れない。

そう希望を抱いて、佐月と共に歩んでいく。
そして、ついに。

「ついに！ 並んだでゴザル！」

「どうもお久しぶりです♪ 不意打ちのお返しをしに来たぞ♪」

台風の目、その成層圏。

空気も澄んで、辺り一面に雲の海がドーナツ状に広がる幻想的な景色が二人の目に入る。中心で風船を膨らませてている気球のような形をした大型キャンサー。ハイドロペリッシュュの姿を上から見下ろす形で会敵することとなつた。

「一気に近づくでゴザルよ！」

アーデルは落下で一気に速度を上げては徐々に角度を変えて勢いよく前進していく。だが、周囲のイグナイトがハイドロペリッシュュに近づくことを許さない。

「おっと♪ アーデルちゃんに近づく虫は漏れなく撃ち落とすぞ♪」

佐月がアーデルから垂直に回転し、セラフから弾丸の嵐を浴びせ一掃する。炎を纏つていいようが、ダイヤモンドダストで一瞬の足場を作り落下する前に移動を重ねる。絶対にアーデルを守る意思を持つた頼もしい相棒だ。

「やー！」

風呂敷を閉じて本体に捕まつたアーデル。相変わらずの無機質で硬い外殻だった。

「こんな台風のど真ん中で高みの見物とはいご身分でゴザルな……！」

側面からイグナイトが生み出されてアーデルに襲い掛かる。セラフを呼び出して自ら斬りかかつたところでハイドロペリッシュュが身体を揺らした。

「くうっ……！ 振り落とそうつたつてそやはいかないでゴザルよ！」

体幹は鍛えている。この程度で振り落とされるほど下手な修行をしていない。

近づくことでさらにわかることがわかつた。遠目からだとわかりにくかつたが、約五メートルほどの直方体。その下に見渡せるほど大きな白い風船が膨らんでいる。ぶら下げている風船は形を保ちながら表面でぶよぶよと波を打つていてどこか気持ち悪い。このまま身体を入れたら飲み込まれてしまいそうだつた。

形が保たれているのは中からの空気圧によるものなのだろう。渡された爆弾を取り出し、タイマーをセット。直後に風船の中へと放り込む。表面の波が気になつたものの、吸盤がア

メンボみたいに浮いてそのまま時間が進むのが確認できた。

この後、爆弾が非ニュートン流体と空気圧の境目にできている硬い膜まで針を伸ばすらしい。セラフ由来の電流付き爆弾が爆発することで水素爆発も誘発させるとのことだった。

——大丈夫。上手くいく。

そう自分に言い聞かせてタイマーから目を離した。

「仕掛けたでゴザルッ！ 佐月殿！」

「アーデルちゃん！」

目的を果たしたアーデルがハイドロペリッシュから飛び降り、佐月が呼応する。

佐月が身体を傾けて同じ高さまで並んできて、手を取つて微笑んだ。

「……思いましたけど、こうして一緒に落ちる必要はないんですね」

確かに、地上まで降りるにあたって佐月にはパラシューがあるし、アーデルにはムササビがある。安全に着陸するのであれば離れていた方が得策だろう。
でもまだ……こうしてみたい。

佐月の手の温かさが、どういうわけかとても落ち着いたから。

「こうして一緒に落ちていると、この上ない世界の終わりを感じるでゴザル」「この世の終わり、ですか？」

佐月がアーデルの横顔を見た。

「ヤー。今いるこの空の世界にいるのは拙者と佐月殿だけ。十キロという長いようで短いフリーフォールは、二人だけしか楽しめないでゴザルよ」

手を繋いだまま、佐月が仰向ける。

「空には何もない、あるのは風と雲だけ」

言いながら、その瞳にキャンサーの大群が目に映つてることだろう。アーデルは考えていた。

もし、このまま落ちるのみで二人だけでいられたらどうなつてしまふのだろうと。

運命の人とも会うこともない。死ぬこともない。そんな世界があつたとして、せめて一人だけ。佐月マリだけは共にいてほしい。

佐月マリを、もつと知りたい。

「アーデルちゃん、そろそろですよ」

爆弾を仕掛けてからカツ。ブラーーメンができる時間が経つた。

佐月の合図でアーデルも仰向けるになる。

ドカン、と遠くで大きな爆発が起きた。

セラフ由来の電流があるせいか、空中でスパークも発生している。まるで、祭りのあとのようにうだつた。

「花火」上からの爆風がアーデルの髪をなびかせる。「佐月殿と見る、最後の花火でゴザル」
こんなことを言うと、死ぬ覚悟をしていることに怒られるかもと思ったが、

「きつたねえ花火ですね♪」

むしろ変わらない発言をしてきたことに、アーデルはこの上なく安心させられた。

遠ざかる爆発の痕。だが確実に、水素が詰まつた風船が破裂したのを確認した。

落下速度も速くなつてきていて。地上に着くまで秒読みといったところで佐月が言う。
「アーデルちゃん。パラシュートを開くので離れてください♪

「む。 そうでゴザルな」

手を離すと、佐月がパラシュートを広げて一気に減速させる。アーデルもムササビを開いて速度を合わせた。

ただ、大気が不安定で揺られてしまう。風を掴んでいるアーデルからしたら着地地点を調整するのは簡単だが、佐月からしたらそうではない。

「……さすがに台風の中だと、全然安定しませんね」

「地上に到達するまでに全然違う場所に着くかもしれないでゴザルな」

「そうなつたら、どうやつて帰りましようか

「歩いて帰るしかないかもしれないでゴザルな」

どっちにしろ自分の出番はもう終わりだ。あの仕事は31Aが担ってくれる。
 結局占いなんて当たらないのだ。ここから死ぬこともない。
 安堵するアーデル。でもどこか、寂しさがあった。

このまま終わったらあの忍者にも会うことはないのだろう。
 少しモヤモヤを遣しながら、静かに降りていく。

——はずだった。

(……やー？ 何か横切ったような)

気のせいではない。アーデルのすぐ横を何かが落ちていくのを見た。
 嫌な予感が瞬時によぎつた。「佐月殿ッ！」

「えつ……？」

何かがパラシユートを貫通して佐月の脳天を直撃する。空気抵抗を失い、パラシユートに抱えられたまま垂直に落ちてしまう。

急いでムササビを解除し、アーデルが救いに行く。

佐月の容態を確認。頭から血を流している。気を失っている。

「佐月殿……！ 佐月殿……！ 目を覚ますでゴザル！」

返事がない。アーデルから血の気が引いていく。

何が起きたのか把握すべく周囲を見渡した。

ハイドロペリッシュから爆ぜた後、白い液体が飛び散つてきているのが見える。

(ダメでゴザル。非ニュートン流体が頭に直撃したことによる脳震盪。のうしんとう無理に起こしたらかえって危ないでゴザル……!)

たかが千メートルだろうと時速五百キロもの速度で落ちてくることに気づいていたはずだった。爆発の後にこのような危険があることにも気づけたはずだった。

予めリスクマネジメントができなかつた自分のせいだ。

だが、落ち込んでいる場合ではない。

(パラシユートが破けてしまつていてゴザル。このままの落下は危険……)

瞬時に状況を把握し、一か八かで通信を試みた。

「司令官殿！ 至急応答してほしいでゴザル！」

ザつと小さなノイズが走つた直後に電波を拾つた。

『聞こえているわ。ハイドロペリッシュの落下を確認。よくやつたわね』

「それどころじゃないでゴザル！ 佐月殿が落下物によつて脳震盪を起こしてしまつたでゴザル……！ 出血も酷いことに……！」

簡易的に状況を報告すると、短い間があつた。

『わかつたわ。応援を送る。ただ……』

アーデルにとつて、辛い現実が手塚の口から告げられる。

『地上までの到達については、助けを出せない』

「まあ、そうでゴザルな……」

期待したところで急に助けなんて出せないことくらい、わかつていた。

『ごめんなさい……』

静かに謝られる。返事をしている余裕もなくて、無視する形になつてしまつた。

自分で何とかするしかない、と迫り来る地面を前に頭をフル回転させる。

佐月を片手で抱えつつ、両足と片手の三点で風呂敷を広げた。

（両足が塞がっている分心許ないでゴザルが、これでもやらないよりかはマシでゴザル）

片手が塞がって風を掴むことすらままならない。減衰しきれない。

おまけに落下速度のあまり一人分を布切れ一つで支え切れなかつた。

（あとは……！　あとは……！　あとは……！）

大地に到達するまであと約二十秒。

周囲を見渡す。減衰しきれないならこのまま着地するしかないのでないか。

（落下しても問題ない場所はどこでゴザルか!?　水はダメ。固い地面もダメ。できるだけクッショングになる柔らかい場所はないでゴザルか……）

ここは樹海の真ん中。辺り一面、木しかない中で着地しようにも無理だ。木の枝だつてこんな速度では身体のどこかにも刺さってしまうかもしねれない。

(全然見当たらないでゴザル……！ 他の方法を考えるべきでゴザルか……)
横で白い液体ではない別の落下物を確認した。

(……ハイドロペリッシュの子キャンサー)

炎を纏つたイグナイトが浮遊もせずに落下している。

アーデルは爆発と共にスパークが発生していたのを思い出した。あのせいで周囲にいたイグナイトまでもが麻痺してしまったのではないか。

「はっ！」最後の足搔きとしてあることが脳裏に浮かんだ「イツツニンジャショータイム！」セラフを呼び出し、一片氷心を繰り出す。

うまい具合に凍つたのを確認すると風呂敷を置んで重心を前に寄せた。
大地まであと数秒。

「ちよつと上を失礼するでゴザルよ！」

凍つたキャンサー足の踏み場にして強く踏み抜いてジャンプする。

落下とは逆方向の力を加えてできる限り落下速度を抑えていった。

(よしつ！ ここまでくればあとはムササビで抑えきれ……)

再び風呂敷を広げるも少し遅く、衝撃に備えるべく佐月を強く抱き抱えた。

「うぐつ……！」

地面へと激突すると、背中に激痛が走ると共に呼吸ができなくなる。一過性の麻痺だ。

身体の中で嫌な音もした。骨にヒビが入ったか、もしくは折れたか。どっちでもいい。

「や、ヤー……。やっぱり空中戦はやるものではないでゴザルな」

呼吸を取り戻すと大の字に身体を広げて佐月の容態を確認する。

相変わらず頭から血が流れたままだ。応急処置を施さないといけない。

悔やんではいる間もない。手塚と連絡を取つて誰かに助けてもらおうと思った。

「こちら神崎。司令官殿、応答願うでゴザル」

デンチヨを手にして司令官を呼び出した。だが、ノイズしか聞こえない。

「マズいでゴザルな……この状況は……」

息を呑む。ノイズがあるということがどういうことか、アーデルは想像に難くなかった。
そう。ここはハブキヤンサーが統治するエリアだ。

「この状態で大群を一人で相手にできる自信は、さすがにないでゴザルよ……」

雑魚だけではない統率の取れたキヤンサーたちが姿を現す。

アーデルは、今度こそ死を覚悟した。

♪

空で大きな爆発が起きてすぐ。

31Aは白い液体が飛び散ってきたのを避けていると、同時にキャンサーが降りてきたのを確認。たちまち臨戦態勢に入る。

「来た！ めぐみん、出番だ！」

「つしや。まかしどき！」

月歌の合図でめぐみが前に出る。

麻痺しているとはいえ、ハイドロペリッシュは既に動きつつあった。再び動き出して浮遊する前にめぐみのサイキックで身動きを止めた。

「——捕らえたで！」

樹海のド真ん中。ハイドロペリッシュは各地から良く見える高さで固定された。

「こちら31A！ イージスの鎖を頼む！」

『了解。イージスの鎖、発射します』

月歌が司令部に連絡すると、各方面から大きな音と共にレーザーのような放射物がハイドロペリッシュを襲う。めぐみのサイキックが功を奏し、問題なく四点止めが完成された。

これでもう身動きは取れまい。

「ぎょええ～ッ！ また爆弾膨らませてます……！」

水素爆弾が作られていく様子を見て尻込みしてしまったタマであつたが、彼女の横を突っ切つてカレンが炎を纏つた鎌を大振りする。

「うひやひやあー！ だつたら大きくなる前に爆発させればいいー！」
ポンッ、と軽い破裂音だけがした。さすがのカレンも爆発音に殺人鬼
か、手を広げて愉悦に浸っている。

爆発こそあつたものの、中途半端にしか膨らんでいない間であれば大したことはない。

この繰り返しさえすれば大きな脅威に成り得ないのだ。元々ハイドロペリッシュュがレベル2のキャンサーである所以がここにあつた。本体は強くなく、浮遊と極めて大きな爆弾を作らせてことさえ封じてしまえば十分に対処できる。

「月歌！また爆弾作り始めたぞ！」

「おつけ——つと」

ユキの掛け声で今度は月歌が前に出ようとしたところ。

「ひひひひひ！ ワシがやるう！」

爆発に快感を憶えたカレンが再び飛び出していくが、その横を炎弾が通過する。

邪魔。はい、ばーん！

—東城一ツ！ ワシの邪魔をするなあ一ツ！」

「そんなポンポンと技出してたら疲弊するじゃない。ペースを考えなさい」

連携ができるのかいないのか。感情的になるカレンと合理的に発言するつかさが戦闘中であろうと対立する。強気な物言いからわかる通り、覚醒中であつた。

実際のところ、つかさによる遠距離による炎攻撃の方が爆発に巻き込まれなくて済んで合理的だ。剣や釜を用いた近接攻撃は自らも巻き込まれる諸刃の剣にしかならない。

「爆弾を作り始めたら距離を取ろう。つかさっちとユッキーが爆破させて、前衛三人で畳みかけるぞ」

「むう……仕方あるまい」

「あれつ。もしかして私、ここにいる意味なくないでしようか!?」

カレンが月歌の指示を素直に聞き入れた様子を見てつかさが鼻を鳴らす。

ハイドロペリッシュが身体を揺らし、憲りずに風船を膨らませ始めた。すかさずつかさがメメントモリを繰り出して爆破させると、続いて三人が一斉に前に出る。

「行くぞめぐみん、カレンちゃん！」

「ほな行くでえつ！」

「ぶつ殺おゝす！」

前衛三人による一斉斬撃が直方体のキヤンサーに大ダメージを与えた。

今度は側面から子キヤンサーを生み出す。爆弾を作り始めたので距離を取る。

身体が弱弱しく揺らしているあたり、間違いなく効いている。パターン化させてしまえば簡単だつた。それこそ、

「勝ち確です。ありがとうございました」

ほぼ何もしていないうタマが胸を張る始末である。

ユキが牡丹ばたんを繰り出し、花火を上げた。周囲のキャンサーもろとも消え去り、三人が再び置みかける。

「妙ね……」

「妙つて、何がだよ」

何やら引っかかるところがあるらしいつかさの言葉に、ユキが訊ねる。

「成層圏まで逃げられて苦戦させられたというのに、地上へ引きずり込んだらこうもあっけないんだもの。ハブキャンサーの割にこうもあっさり終わるなんて、変だと思わない?」

「別に変ではないだろ。ハブキャンサーといえどフラットハンドとかスカルフエザー級の強いキャンサーばかりじやないんだから」

現に最初に31Aが相手にしたデスマラッガなんて、当時は苦戦を強いられたものの、今同じように戦つたら楽に勝つことができるとユキは分析していた。

もちろん、自分たちを基準にしたところでキャンサー本来の強さに直結するわけではない。

ただ、事前に話があつた通り本体の強さはそこまでではなさそうで、地上戦に持ち込めば31Aが出る幕でもなかつたかのように思える。

「ばーん」

もはや造作もなくつかさが爆発させる。前衛の状況よりも気になることがあるらしく、三

人が前に出たのを確認してから飛び散った白い液体を掬^{すく}い、見つめた。

「この液体、奴は無限に分泌できるのかしら」

「さあな。何にしてもそろそろ終わりそうだぞ」

本体の青いヒビが身体全体に広がりつつある。討伐まであと少し。

「…………！」

「なんだ!?」「なんやこの音!？」

限界が来つつあるのか、ハイドロペリッシュュが高音を発した。耳が割れそうな音量だったが、一瞬で収まる。おかげで一同が弛みかけていた気を引き締めるきっかけとなつた。

爆弾生成の予備動作が始まつた。ユキがセラフを構えて爆発させる準備をする。

牡丹を放つ前に、異変があつた。

「なんか爆弾が変色してねえか……？」

白だつた水素爆弾が黒へと変わつていることに気づく。

それどころか、膨らむ速度も倍以上になつていて。

「色が変わつたくらいで何だつてのさ。早く爆破させちやつてよ」

「いやでも……少し様子見てみた方がいいんじやねえのか。何があるかわからねえぞ」

月歌の言う通り、変わつたのは色だけかもしれない。

ユキの中にはとてつもない胸騒ぎがあつた。つかさも同様で、ユキが視線を向けると頷く。

慎重に動いた方がいい。そう思っていたはずなのに。

「もう倒せそうなのにじつとしていられるかあ～～～～～～～ツ！」

「そうだよ。何があつてもここで一気に倒せば関係ない！」

「また風が強くならんうちに討伐したる！」

「おい待て！」「待ちなさいツ！」

爆弾が変わろうと本体に直接攻撃してしまえば問題はない。そう信じた三人が静止を無視して猪突猛進。全員が刃を振りかざそうとしたところで、状況が一変する。

「なっ！」「なんじゃあ！」「なんやこれツ！」

爆弾——いや、爆弾だつたはずのそれから触手のようなものが三人にまとわりついた。

全員が暴れて引き剥がそうとするも、粘性が強くて振り落とせない。カレンが切り落としてもすぐに復活し、さらに空中で掴みかかれたせいでの場で落下してしまい、風船の中へと飲み込まれていく。

「待つてろ月歌！ 今すぐ爆発をツ！」

セラフを構えるユキだつたが、つかさが腕を掴む。

「待ちなさい。あの三人も巻き込まれるわ」

「だつたらどうしろってんだよ！ あのまま飲み込まれるのを見てろってか！ あのまま飲み込まれるより爆発に巻き込まれた方がまだマシだろ！」

感情的になつてゐるユキを見て、つかさはハイドロペリッシュュを一瞥した。

カレンのセラフには炎が纏つてゐることを確認して、目を閉じる。

「そうね。けど、多分……今の奴には効かないと思う」

諦めを受けて、効かないと言われようが、仲間に当たることに心苦しく思いながらもユキは花火を放つた。

だが言われた通り、爆発が起きずに吸収する。ハイドロペリッシュュが学習し、中で水素が生成されなくなつたようで、風船が性質を変えてただ人や物を飲み込むだけとなつた。

「ユッ……き……」

「月歌ツ！ 月歌ツ！」

「やめなさい！ あなたも巻き込まれる！」「ユキさん落ち着いて！」

手を伸ばしてユキに手を伸ばす月歌。彼女を救い出そうとユキも手を伸ばすも、つかさとタマが静止する。現状、三人を救い出す手立てがなく、手詰まりだ。

そして、そのまま三人が完全に飲み込まれてしまい、姿を消す。

ユキは放心状態になり、地に膝をついた。

ハイドロペリッシュュはそれでも風船を膨らませ続ける。浮遊能力はなくなつたが、触れたら飲み込まれるそれが大きくなり続けて本体への攻撃も届きそうにないところまで來た。物も、人も、なりふり構わず飲み込んでいく。

まるで闇のようだつた。

すぐそこまで来たところで、つかさが決断する。

「二人とも、逃げるわよ」

「でも……」

つかさの提案に戸惑うタマ。ユキに至っては動こうとしない。

「逃げて対策を練らないことには次に繋がらないでしょ」

「……………ですね……ユキさんも行きましょう」

「……………」

タマが呼びかけるも、黙り込んだまま何も発しない。それどこか、立ち上がつて前進した。

「馬鹿ッ！」

手を差し伸べ、ユキを連れ戻そうとした。だが風船から触手が伸びユキの身体を巻き付く。

「ツ……………もう…………！」

合理的で冷静な覚醒したつかさが自暴自棄になりかけた。

ときにも冷酷なこともあるが、これでも仲間を見捨てることは絶対にしない。助けられるな

ら助けてないとそう強い意志があつた。

「行きましょう」

その末、つかさは見捨てる選んだ。

「でも……！ ユキさんが……！」

「見たでしょ。切り落としてもすぐ復活する。助ける手立てがないの。触れられた時点でもう無理よ。彼女はもう助からない」

「ユキさん……！ 早く逃げてください……！」

タマが呼びかけるも、依然としてユキは反応なし。まるで飲み込まれるのを受け入れているかのようにさえ見えた。

やがて姿を消すと、タマが踵を返す。

「どうして……どうして諦めちやうんですかあ……」

顔こそ見えなかつたが、鼻声になつていて。

つかさもそこから逃げ、司令部に通信を送つた。



『全部隊に通達。31A部隊茅森、和泉、朝倉、逢川。以上四名が消息不明。急遽作戦を中止します。ハイドロペリッシュの黒のドームには決して近づかないこと。繰り返します――』

その一分後のことだつた。

『全部隊に通達。31Xおよび31Bの全隊員が消息不明。聞こえている者は全員撤退する

こと。また樹海中心の黒のドームには決して近づかないこと。繰り返します——

(何が……起こっているでゴザルか)

一人でキャンサーと戦闘を繰り返す度に通信が入ってきては戦闘不能者が続出する異常事態。かつてここまで犠牲者が出たことはあつただろうか。

『こちら30G白河。情報が欲しい。消息不明とは具体的にどういうことだ』

『黒のドームは外からの攻撃を受け付けず、触れた時点で飲み込まれてしまう。ただ、まだ生体反応はある。焦らずに一旦撤退して態勢を立て直したい』

『それは倒したらまだ救えると——』

キャンサーと会敵すると通信が途絶える。このノイズが原因でうまく情報が行き渡らず、犠牲者を出してしまっているのかもしれない。

アーデルは他部隊のことを気にしている余裕もなかつた。佐月をおぶりながら戦うのは困難で、少しづつダメージを受けてしまう。アーデルが力不足だつたこともあって、一度吹き飛ばされて佐月にも怪我を負わせてしまつた。

どうにか佐月を安全な場所で応急処置を施したいところだつた。ただでさえ頭から血を流している中で早く処置しないと死んでしまう。

「佐月……殿。大丈夫……大丈夫でゴザルよ」

依然として気を失つたままの佐月に呼びかけながら足を運ばせる。

アーデルももう満身創痍だつた。これ以上一人で戦うのは無理がある。佐月のなるべく見晴らしのいいところまで来ると、31Aが戦つていたはずの場所が見えた。

そこを中心に、黒のドームが樹海を覆いつつあつた。

触れたら飲み込まれる。近づくことすら困難。

だが、アーデルはドームの頂点にヒビが入つてハイドロペリッシュュ本体の姿を見つけた。あともう少しダメージを与えることさえできれば倒せそうだつた。

そこまで行けたなら、の話だ。

ちょうどドームのある方向からキャンサーの大群がこちらへと向かつてきているのが見える。この状態の佐月を抱えたままこのまま一人で戦うわけにはいかず、追いつかれそうではあっても逃げることを選んだ。やむを得ない決断をさせられ、つくづく不甲斐ないことを実感してしまう。

「神崎！ その怪我……！」

樹海で彷徨つていると聞き覚えのある声が聞こえた。小さい身体ながら大きな帽子を被つた天音巫呼がボロボロな状態になつていた。31Cの他の人はどうしたのだろうか。

「天音殿、山脇殿たちは……？」

「31Bがやられ、撤退中に戦闘になり、わしだけが分断されてしまった。三人は……多分、無事だろう」

「ということは、あの黒い物体を間近で見たでゴザルか」
天音は静かに頷いた。

「為す術もなかつた。ビヤツコが先に飲み込まれ、追うように水瀬姉妹が消え、柊と樋口も逃げようとはしない。未知の物体が迫り来る恐怖があの場にはあつた」

今は情報が来ているとはいへ、当時はキャンサーに囮まれてドームの正体すらわかつていなかつた。わけもわからずただ飲み込まれる惨劇。聞くだけでも恐ろしい。
ぽた、と地面に水滴が落ちた。

「雨……」台風の目が過ぎようとしている。「これから風も強くなつてくるでゴザルな」

佐月の応急処置もしたいため、二人で雨宿りができる場所を探した。

すると巨大なキャンサーは入つて来られそうにない洞窟を見つける。すぐに逃げることができるように奥には入口近くに留めておいた。

佐月を寝かせると、天音が包帯を用意し、止血してくれる。薬はもうないらしい。

それならばなおのこと、事態を収束させなければならぬではないか。

「天音殿。佐月殿をお願いしたいでゴザル」

「お願いなど聞いていられるか。わしに任せて貴様はどうすると言うのだ」

天音はあくまで落ち着いていた。まるでこう言つてくるのが予測できていたかのようだ。
「拙者？ もちろんハイドロペリッシュを倒しにいくでゴザルよ」

「その怪我でか？ 無理に決まつておる」

声が震えている。

「早く逃げなければ死ぬのだぞ。現に31Aでさえ……」

「まだ生体反応はあると聞いているでゴザル。倒せばまだ間に合う。そうではゴザらぬか？」
「だからといって一人で敵う相手でないのはわかつておろう!? 何をそこまで死に急ぐ必要があるのだ！」

突如として声を荒げる天音だつたが、アーデルは真っ直ぐ向き合う。
もちろんアーデルは死に急いでいるつもりなど到底ない。

そのつもりでも、そう見られてしまうのは致し方ないことではあつた。

「天音殿。拙者は、どうやら死ぬ運命にあるのでゴザルよ」

「何を……言つておるのだ」

この反応。彼女は知らなかつたようだ。「桜庭殿の占いがそう教えてくれたのでゴザル」

「貴様はまだそんなことを言つておるのか」

「全員死ぬくらいなら、拙者は喜んでこの身を捧げるでゴザルよ」

「わしが聞きたいのはそういう答えではない！ まだ気づいておらぬのか!?」

「気づくって……何をでゴザルか？」

訊き返して、天音が言葉を失う。今までの話に何か変なことがあつたのかと振り返るも、

アーデルには心当たりがなかつた。

まあ、何でもいい。どちらにしても、アーデルの気持ちは変わらないのだから。

「何をそこまで貴様を駆り立てる。セラフ部隊としての使命を背負つてゐるからか？ 忍としての使命を全うするためか？」

幼少期。アーデルは忍に助けられ、憧れ、成長してきた。そしてセラフ部隊に入隊し、任務を遂行するため今日ここに立つてゐる。

今一度考えてみた。なぜ自分は死相が出ておきながら戦おうとするのか。

もちろん使命を全うしなければならないというのはあるのだろう。

だが、アーデルは一つの答えに行きついた。

「ナイン。セラフ部隊だからとか、忍だからとか、そういうのはちょっとしかないでゴザル」「だつたらなぜ……」

改めて問いを投げてくる天音に向か、アーデルは考えがまとまつた迷いのない目を向けた。

「……言うならば、意地でゴザル」

「意地？ セラフ部隊としての意地か？」

「人としての意地でゴザル。憧れの人々に救われた命を、これまで出会つてきた大好きな人たちのために使いたいのでゴザルよ」

忍というのは主君に仕える身と佐月は言つていた。

アーデルからしたら、主君というのは司令部のことを指すのだろう。順当に考えれば撤退に従うべきだと思う。

しかし、アーデルは主君よりも自分の意地の方を優先したかつた。
救いたい人がいるから救いたい。

佐月がここまでしてくれたことに対する恩返しをしたい。
これが、アーデルの意地。

「そのために、自らが犠牲になるのか」

「見くびつてもらつては困るでゴザルよ。ちゃんと生きて帰るつもりで戦うでゴザル」
決意を胸にして、ボロボロになつた服をはたく。しわを伸ばし、身なりを整えた。
傷ついていた身体も、多少休んだら楽になつた。背中こそ骨にヒビが入つてゐる感じが残
つてゐるもの、このくらいなんてことはない。
「……約束しろ」と、天音が小さく言つた。

「何をでゴザルか？」

天音は洞窟から出さんとばかりに出口を塞いで両手を広げる。
「絶対生きて帰るつて約束しろ。そうしたら行かせてやる」

「しかし、拙者は占いで……」

「53%で死ぬ可能性がある以上、約束はできなかつた。

「占いの結果などどうでもいい！ わしは貴様にその意地の強さとやらを問うておる！ 貴様の意地は、約束ができないほど弱いもののかッ!?」

「天音、殿……！」

訊いてきているのは、アーデルに意地でも死に抗う気があるかどうか。
占いなんて、所詮当たる確率は53%。全力で外しにかかればいい。
当たるというのなら、全力で運命に抗えればいい。

ただそれだけのことを問いかけてきている。

「どうなんだ神崎アーデルハイド。貴様は占いの結果をも覆す忍なのか」
改めて訊ねてくる天音の言葉に、意地を感じた。

絶対に生きていてほしいと願つたその思いに、胸がいっぱいになる。

「ヤー！ 絶対に生きて帰るでゴザル！」

雨が本格的に降り、風が強くなってきた。

洞窟を出たアーデルは、黒いドームに向かいながら一人呟く。

「そうでゴザルな。絶対生きようって思わなければ、会いたい人にも会えないでゴザル」
絶対に生きる。そのために、絶対にあの人人に会おう。

もはや忍者に会うことがついでのようにも思えるがそれもまた運命の巡り合わせ。

でも、その前に。

「イツツニンジャショータイム！」

ドームと共に迫り来るキャンサーの大群を、まずは片付けないことには佐月を守れない。セラフを呼び出して大剣を構える。

「待ちくたびれたでゴザルよ！」

これは、アーデルとキャンサーの闘いではない。

意地と占いの闘いだ。

※

ぼた、と身体のどこかに水滴が落ちてきたような感覚があつた。

しばらくすると頬にもう一度落ちてくる。

ぼた、ぼた、と落ちてくる度にわたしの意識がはつきりとしてきた。

「はつ……ツ！」

悪い夢を見ていたわけじゃないというのに、わたしは勢いよく起き上がった。同時に前進に痛みが伴ってきて、乾いた悲鳴が上がってくる。身体を見ると、全身傷だらけになっていた。最後の記憶はハイドロペリッシュに仕掛けた

爆弾が爆発して空から落ちて、そこからの記憶がない。どうしてこんな洞窟にいるんだろう。外を見る。雨風が強まっていることを考へるとあまり時間が経っていないよう思える。少なくともあれから三時間は経つていい。

「起きたか。応急処置はしているが、あまり動かない方がいい」

声に気づいたのか、側にいた巫呼ちゃんがこちらに寄ってきてわたしの調子を確認していく。アーデルちゃんはどこに行つたのか、他のみんなはどうしたのかとか、聞きたいことはたくさんあつた。

「巫呼ちゃん……？ アーデルちゃんは……？」

「まずは状況を説明する」

一番訊きたいことを後にされたけど、順を追つて話してくれた。

ハイドロペリッシュの撃墜は成功したこと。そこから奴の爆弾が突然変異して他の部隊もろとも消息不明になつていてこと。それに伴つてパニック状態に陥つた中、巫呼ちゃんは他のみんなとはぐれてしまつたこと。気を失つたわたしを抱えて、アーデルちゃんが一人でキンサンサーと戦つていたこと。

脳震盪を起こしたばかりのわたしにはあまりにも情報量が多くすぎた。

「あの、アーデルちゃんはどこに」

「大丈夫だ。そのうち戻つてくる」

「どこに行つたのか聞いてるんです。答えてください」

はぐらかされた気がして強く出た。

そんなわたしを見た巫呼ちゃんが言葉を詰まらせるも、圧し負けてくれる。

「神崎は……このわしにお前を託して勝算のない戦いへと向かつた」

全身から血の気が引いていく。「それを一人で行かせたんですかッ!?」

怒声のせいで怪我に響いたけども、そんなのを気にしている場合でもない。

巫呼ちゃんはわたしの想いを知っていたはずなのに。占いのことも知っていて、どうして行かせようだなんて思ったの……。

「ならどうすればよかつた!? 気を失っていた貴様を放置するわけにもいかなかつた。山脇も桜庭も豊後もどこにいるのかもわからない」

「あの31Aのみなさんですら飲み込まれてしまつたのなら体制を整えるしかないじゃないですか。何もアーデルちゃんが行く必要はなかつたはずです」

大声に向けて正論を吐くも、巫呼ちゃんは何の反応も示さない。

自分でそうるべきだったとわかつていたんだと思う。

「なのに……わしは……止められなかつた……」と、後悔の声が漏れる。

ちょっとした一言でとんでもない暴言も吐いてしまいそうな、ギリギリの心境。こんな言い合いをしている場合じやないのに。

早く話を終わらせて薬を貰おう。

「佐月よ。神崎は31Cの誇りだとわしは思う。こんな危機的状況にあつても、一切目を曇らさせることなく、ただ真っ直ぐに目的だけを見据えて前に進もうとする。わしはそんな奴の背中を見て『絶対に生きて帰る』という言葉を実行してくる。そんな気がした」

状況が違つていたらやさしい言葉の一つや二つをかけていたんだろうけど、今のわたしにはその言葉が完全な開き直りにしか見えなくて、わたしは歯軋はぎしりした。

「そんなの、ただの無責任な過大評価じやないですか」

「過大評価、か……。そうかもしないな。きっと、後で神崎の死に顔を見たときには後悔してもしきれないほどに罪悪感に蝕まれることになるかもしねぬ」

小さな手を強く握りしめていた。わたしはさらに正論を突きつけようとした。

「それでも、そだとしても」とまだ話を続ける。「神崎は大好きな人たちを救いたいのだと発した。その中の一番が誰だか知つておるか」

一瞬、頭が真っ白になつた。

何を言つているんだろう。アーデルちゃんが大事な人たちとしか言つていらないのなら、巫

呼ちゃんにそのうちの一番なんて知つたようなことが言えるはずがないのに。

あまりにも突拍子もないことを言いだしたからか、妙に落ち着きを取り戻してしまつた。
「わたしには皆目見当がつきません。何せ、アーデルちゃんは顔が広いものでして」

「そうか。わしにも明確に確信がついているわけではないが、ただ一つ言えることがある」
巫呼ちゃんはわたしをまっすぐ見つめて言いのける。

「失礼なことに、わしと話している最中の神崎は、お前のことしか見とらんかった」

わたしは、視線を落とした。

巫呼ちゃんの言っていることが本当だとしても、わたしの想いは変わらない。

「誰が一番とかそういうこと言つてる場合ではないじゃないですか」

「そうかもしれないな」

アーデルちゃんが今、一人で戦っている。巫呼ちゃんはそうなることをわかっていて、行
かせた。この事実も変わらない。

「それに、ただ心配していただけかもしません」

「だとしたらわしのことを信用していなかつたのだな」

誤魔化すような笑みを浮かべている。

なんて悲しそうに笑うんだろう、って思つてしまつた。

「巫呼ちゃん。今すぐに動ける薬はありませんか」

「さつき、神崎にはないと伝えたが、あるにはある」

本筋に入ると、いつもの表情に変わる。あるなら、素直にくれるのだろうと思つていた。

「だが、お前には渡すわけにはいかぬ」

「なぜですか？」

その一言にまた空気が一段と冷え込む。

「話を聞いておらんかったか。わしは神崎にお前を託されたのだ。行かせては本末転倒だ」「ですがアーデルちゃんが一人で戦つてるんですよ!?」

「それが何だと言うのだ。貴様を死地に送り込むことこそ、より危険度が増す。違うか？」
違う。それはわたしの都合だ。巫呼ちゃんはアーデルちゃんのことを何も考えていない。
再び頭に血が上つてくる。

「ふざけないでください！ これでアーデルちゃんが亡くなつたら、巫呼ちゃんは責任が取
れるんですか!?」

「責任、か。取るとのたまえば満足か？ 佐月よ」

完全に開き直りやがつた。誰が責任を取ればいいとかそういう話にしたいわけじゃないの
に、わかっていてわざと言つてきている。

怪我に響くとわかっていてももう限界だつた。

「それで満足するわけないじやないですかッ！」

洞窟内で強く響く怒声。巫呼ちゃんは身体をビクつかせることなく、ただただわたしを見
つめて言葉を待つていてる。

「わたしがどれだけアーデルちゃんを死なせたくないと思つてゐるかわかつていましたよね……！ わかつていてなんですかその言い方ッ!? 全部わかつていて……わかつていて……」

「それまでよ。佐月」

言葉の途中で、洞窟の入り口から声が聞こえた。

「イヴァール……ちや……ん……」

星羅ちゃんも一緒だ。無事だつたことに安堵するべきなんだろうけど、イヴァールちゃんの口の方が早かつた。

「酷い怪我してるわね。そして、顔も酷い」

指摘されて頬を撫でる。ぱた、と滴り落ちた。

「イヴァールちゃん……わたし……」

罵声を浴びせようとしたけども、肝心なときに出でこなかつた。

巫呼ちゃんの想いはわかつてゐる。アーデルちゃんを死なせたくないという気持ちが、別の想いと交錯してゐることもわかつてゐる。考えに考えて、出した結論に罵声でわからせようとしたわたしがどれだけ愚かだつたか、気づかされてしまう。

「無理に言おうとしなくても言いたいことはわかるわよ。あんたの覚悟はあのとき聞かせてもらつたから」

そうだ。イヴァールちゃんなら、わたしをわかつてくれてゐる。

だから樹海まで来てくれたんだ。ここまで来てくれたんだ。
わたしのわがままにも付き合つてくれたんだ。

「私がここに来たのはね。あんたに豊後を託しに来たの」

そして、もうどうすることもできないところまで来ていることに気づかされる。

「豊後を……？　いやしかしここには……まさか!?」

「ええ、飲み込まれた。豊後だけじゃなく、他31Dも数名。戦闘不能者が続出していることを受けてハイドロペリッシュのレベルが2から4に上げられた。撤退が言い渡されてるわけだし、そろそろ戻らないといけないわ」

「……私たちは連絡が取れないお二人にこれらをお伝えしに来ました」

巫呼ちゃんはイヴアールちゃんの胸ぐらを掴んだ。

「山脇よ。貴様はそれで納得できてるのか!?　生体反応があるとはいえ、撤退するということは時間が経てばそのうち——」

「納得できるわけがないでしょッ！」

大声で手が離される。

「豊後は私のすべてだつた。それを私が弱いせいで守りきれなくて、何としてでも取り返そうと無謀な戦いに挑もうとすらした！　でも無理なの。31Aですらダメだったキャンサーを相手に、私だけで勝てる見込みなんてありやしない！　だから……だから……」

イヴァールちゃんは、わたしに近づき、深々と頭を下げた。

「私に力を貸して……31Cで奴を確実に倒せるのは佐月、あんたしかいないの……」

こんなお願ひ、絶対にしたくなかったんだろう。

ぶんちゃんのために流される涙を見て、とても愛されていることがわかる。

羨ましい、なんて思いつつ、わたしは最初から一貫している言葉をもう一度口にする。

「巫呼ちゃん。改めてお願ひします。薬を、ください」

「……天音さん。私からもお願ひします」

これでわたしを行かせたくない人は巫呼ちゃんだけ。ここまで票が集まれば諦めてくれる
と思っていた。

「ならぬ……」だけど。「ならぬならぬならぬならぬッ！」

さらに強情になつた巫呼ちゃんがその場で声を上げる。

「揃いも揃つて全員佐月を行かせようとしあつて！ わかつておるのか!? 佐月が行くとい
うことがどういうことを示しているのかを！ 特に山脇！ 豊後が飲み込まれたことは察す
るが、これ以上被害を出さないように判断するのもリーダーの務めであろう!？」

もう滅茶苦茶だ。ぶんちゃんを助けるべきとか、被害を出さないようにするとか、誰を優
先すべきで、どうしたらしいのかわからなくなつてきている。

頭の良い巫呼ちゃんが、ダブルスタンダードを開拓するほどまでに追い詰められている。

「わかつて。だから、命令違反の責任は私が取る。こう言えればあんたは満足するでしょ」
だからこそ、イヴ・アールちゃんは冷静に急所を突いた。

その言葉は、ついさつき責任の話をした巫呼ちゃんにとつて、痛い話になる。

「山脇……それはただのエゴだぞ」

「エゴでも何でも構わない。私は豊後はもちろん、神崎にも佐月にも生きていてほしいとい
う気持ちがある。それだけはしつかり胸を張って言える。これは31C全員が明日を生きる
上で最善の選択なの。わかつてほしい」

巫呼ちゃんはわたしを一瞥して、辺りを見渡した。

次いでイヴ・アールちゃんを、星羅ちゃんをと視線をやつて、
「全員が、明日を生きる……か」

そう言って、視線を落とした。

「何がエゴだ。わしがただ保身に回っていただけではないか。占いを信じていないわしが振
り回されて、バカみたいではないか」

「……天音さんがそれほど31Cを大事に想つてくれているだけです。バカとは思いません」

そうだ。バカとは思わない。

みんなそれほどまでに星羅ちゃんの占いは信じていて、それでいて本気で結果を変えよう
としている。みんなの想いが空回りして、今こうしてぶつかっているだけなんだ。

だけどもう、その必要はない。

「佐月、これを」

ぶつかつた末に、未来へと進む覚悟ができたから。

巫呼ちゃんがタブレット状の薬を渡してくれる。「ありがとうございます」

「ただし気をつけろ。使用時と効果が切れたときの二回、激痛が伴うこととなる」

「ならわたしにぴったりではありますんか」

わたしにはもう何も残されていない。アーデルちゃんがいなくなつたらそれこそ、生きる価値はない。占いからしてみれば、激痛が伴うのだつてきっと織り込み済みなんだろう。

薬を飲んで少ししてのことだつた。

「うぐっ……あっ……ああああああつッ！」

「……佐月さん！」

身体が火照る。全身に電気が流れているような感覚もする。

直接神経を壊されているかのような、強い痛みがわたしを襲つた。

「天音、激痛ってこれ本当に大丈夫なの!?」

「大丈夫だ。これはただ身体を急激に修復している合図だからな。発作が収まると全快し、

しばらく痛みを感じることもなくなる」

「そうは言つてもこれはさすがに……」

悲痛な叫びを聞いては居ても立つても居られないのかもしれないけど、服用してしまった以上引き返すことはできない。その分、効果は絶大だ。

「大丈……夫……です。イヴアールちや……ん……」

所詮、一時的なものだ。心配することないと声を上げる。

それに、わたしはこの痛みを背負う理由がある。

「アーデルちゃんは……わたしの背中を追つて……今日まで頑張ってきたんです……」
きつかけはわたしの小さな意地でしかなかつた。

今思えば、なんてちっぽけな打算だったんだろうって思う。

「わたしは……この半年にも満たない短い期間で……忍としてアーデルちゃんが成長していく姿を見てきました……。何も成長できていないわたしを置いていきそうなくらいの才能を持つて……努力を重ねてきたんです」

でも、あのとき助けた人がこうして今、誰かを、大勢を助けるために尽力していることを受けて、わたしは誇りに思う。それこそ、自分は忍を諦めた身であると自戒していたにも関わらず、その道をもう一度歩むことに光を見出してしまうくらいには。

「だから……わたしは……」

そうだ。この痛みは、忍として生きることを諦めたわたしへの罰。

そして、アーデルちゃんが迫つてこられるような背中を取り戻すためのズル。

だからわたしは……！　わたしは……！

「わたしは……アーデルちゃんが……誇れるような忍になるんだああああああつツツツ！！！」
痛みがピークに達し、誤魔化すような大声を発したその直後。

「はあ……はあ……」

「傷が、なくなつた」

徐々に和らぐと、次第に身体全体が楽になつていく。

「だが、再び動けるようになつたツケとして一時間後に激痛が走る。気をつけろ」

「そんなもの、関係ありません」

むしろ、一時間もあれば十分だ。

「今度こそ、憎きヤンサーに引導を渡してやります」

☆

「ヤー！」

樹海の真ん中でアーデルの声が木霊した。

大量のヤンサーに対し範囲技を繰り出しても、雑魚が一掃されていく。
ただ、状況は芳しくない。

一見無双しているかのように思えるが、アーデルはもう限界が近づいていた。

キャンサーからの攻撃は可能な限り回避しているため、デフレクタはまだ問題ないものの、大量の敵を一気に相手にしていることもあるって大きな技を強いられてしまう。そのため、体力の方が尽きてしまいそうだった。

おまけに落下によるダメージがアーデルを襲う。天音の前では平静を装っていたが、足の捻挫に、木の枝が裂いた傷口を雨が抉っている。それらを今の今まで痛みを誤魔化し続けてきた。さらに出血のせいか少し意識が朦朧としてきている。

いつ倒れてもおかしくない状況だった。

だが、諦めるわけにはいかない。

絶対に生きて帰ると約束したから。

背中で感じるという運命の人ともまだ会っていないから。

そして、もう一つ。研究施設での作戦時のやり取りを思い出す。

『もつと佐月殿のことを聞かせてほしいでゴザル』

『忍者ではないので望む話は聞けないかもしだせんよ』

『違うでゴザルよ。佐月マリのことを聞きたいのでゴザル』

お祭りの屋台を回って、ショッピング店員ではい佐月マリを知った。

今回の作戦に反対して、自分の身を案じて必死になる佐月マリを知った。

でも、まだ足りない。足りなきすぎる。

「拙者はまだ、佐月マリのことを探して知らないでゴザル……！」

小型キヤンサーへの一振り。セラフ本来の力を發揮せず、自身が持つ力での攻撃だ。

——意地でも生きて帰る。

あのときの願いへの執念が、アーデルを奮い立たせていた。

「ツ……！」

突如三時方向から緑のエネルギー弾が放たれたのを察知し、飛び込み前回り受け身を取る。「ああああああああああああああああああああ！」

が、地面に着弾したと思いきや液体が飛び散つてアーデルの顔にかかってしまった。視界が緑色に染まっていく。間もなくして朦朧としていつてしまう。

その間にこの攻撃を放った奴の正体を視界に捉える。直後に視界を失った。

見えたのは蜘蛛型の大型キヤンサー。ビヤツコの視界をも奪つたと報告があつた毒を使うとされる個体。確かに名はポイズンスクーパーといったか。

(マズいでゴザルな……目を失つた以上、音と気配で見るしかないでゴザルよ……)

目に頼らない訓練をしている。気配斬りなんて、アリーナでたくさんやつてきた。

ゆえに目を潰されたからといってすぐに倒せると思つたら大間違いだ。迫り来る音、風、気配。五感のうち一つを失つたなら、他の部分で察知し、キヤンサーを斬りつける。

手ごたえはあった。大丈夫、戦える。

「つ……ああうつ……！」

だが、戦えるだけであって大群を相手にできるとは限らない。

アーデルは後方からの遠距離攻撃に気づかず、デフレクタを一気に消耗してしまった。

そのことをきっかけに、キャンサー側の士気が上がつてしまつたのか少しずつ攻撃を許してしまった。

(本当に……マズい状況。拙者は……本当に死んでしまうでゴザルか……)

訓練でやつてきた以上に敵の数が多い。雨だつて降つていて。想定していたよりも過酷な状況で対処しきれるはずもなく、アーデルの身体はもうとつくに限界がやつてきていた。

正面から蜘蛛型キャンサーが一斉に押し寄せてくるのを察知。セラフで返り討ちにする構えを取つた。その一方で背後から再び大きなエネルギーを感じ取つた。遠距離攻撃を仕掛けてくるのだろう。

(つ……！　もう足が……動かないでゴザル！)

こちらからの攻撃を止め、回避に専念しようとしたが、足が震えている。

作戦変更だ。正面からの一撃を対処し、背後はなんとか耐えるしかない。

ただ、デフレクタももう残つていない。これ以上戦つてもキャンサーから直接攻撃を受けことになつてしまふ。あまりにも無謀な賭けだった。ここで耐えられたとしても、その後

の戦いで倒しきることなど不可能に近いというのに。

(それでも拙者は戦うと誓つたでゴザル)

どれだけ傷を負つても、どれだけのキャンサーを相手にすることになろうとも。会いたい人がいる。

守りたい人がいる。

だけど、ここまで足搔いて足搔いて、ダメだつたときは……。

「あはは……」

心にもない笑みが、一瞬零れてしまう。

楽しいわけではない。嬉しいわけでもない。満身創痍になつてているというのに、絶望の中で笑つてしまつた。

いや、笑うしかなかつた。

「ヤーッ！」

正面からの攻撃を薙ぎ払う。押し寄せてくるキャンサー群を、ノンストップで剣を振るいまくる。

自分にできるのは、もうここまでだ。

背中からへの攻撃は諦め、そのまま受け止める覚悟を決めた。

……。
……。

(……あれ?)

覚悟を決めたというのに、背後からの攻撃が一向に来やしない。それに、遠距離攻撃でなくともいいはずだ。前からの対処に精一杯で後ろはガラ空きだというのに攻めてこない。

(いや、違う……。誰か……いるでゴザル……)

押し寄せてくるキヤンサーを対処するのに精いっぱいで気づかなかつたが、微かに人の気配がする。

さらに感覚を研ぎ澄ませてみれば銃弾の音がする。後ろを……守ってくれているのか。

(誰でゴザルか……)

目は見えないけども、近くで誰かが戦っているのはわかる。

キヤンサーを相手にしているということは間違いなくセラフ部隊の誰かであることは間違いない。

アーデルを守るかのように必ず近くに立ち、迫り来る敵を一網打尽にしている。もちろんアーデルも攻撃を止めることはない。雨に消されつつある微かな音だけを頼りに

キヤンサーを捕捉し、迎え撃つ。

倒しきれない分は、助つ人がどうにかしてくれた。

——誰だろう。

——誰だかわからないけど……頼もし。

傷だらけになつて動くことすらまもなくなつたため、佐月ではないことは確かだ。気になつて仕方がない。どうして声を出してくれないのか。

いや、違う。

(もしかして、声を出せないのでゴザルか……?)

だとしたら、後ろにいる人はもしかして……。

微かな希望が芽生えたその瞬間。

とん、とアーデルの背中に固いものが当たつて、確信する。

雨が降つてゐるというのに、ほのかに温かい。

等身大だが、感じる以上に大きな背中。

身のこなしと、確かに感じられる強かな気配。

そして、正体を悟られまいと閉ざした強固な口。

間違いない。

この人は……。

「やつと……会えた……」



ずっと会いたかった。

あの日、助けてくれた恩人が一緒に戦ってくれている。

それがわかつた途端、アーデルの開けない目から熱いものが込みあがつた。お礼を言いたくて。でも叶わなくて。だつたら遠くから見つけてもらい、元気にやつていることさえ伝えられればいいと思いながら日々精進して。何年も、何年も。自分と、キャンサーと一緒に戦い続けてきてようやく会うことができたのだ。

みつともないと思われるのが嫌で堪えようとしたが、無理な話だつた。もつとも、瞼から流れたとしても雨で流されてしまつてはいる上に、今はキャンサーに囲まれて顔をじつと見ている余裕すらない。

だからこそ、今だけは遠慮なく”うれしい”を爆発させることができる。

「忍者殿……！ 忍者殿……！ 忍者殿……！ 忍者殿……！」

目をやられ、デフレクタも枯渇。キャンサーからの攻撃に絶対当たるわけにいかないこの状況。

だけど、もう大丈夫。

一人で戦うのが無理だつたとしても。

憧れの人と共にいるから。

背中を守ってくれている……！

そう信じる力が、強さへと変わっていく。

「ヤー！」

心の目で見据えた大型キャンサーへの大きな一太刀が放たれる。

攻撃を当てた対象の気配が消えると、周囲の小型キャンサーが一瞬たじろいだ。

多勢に無勢なんて、誰にも言わせない。

※

わたしが合流すると、アーデルちゃんが視力を失っていることに気づいた。

それでも気配斬りでなんとかキャンサーと互角に戦うことができている。

そう。互角……ハイドロペリッシュュとの戦いがすぐそこまでに控えている中では少しでも体力を残しておきたい。ましてやこんな大群を相手に少しずつ消耗しているのではいつか燃え尽きてしまうだろう。

だからわたしは、アーデルちゃんが対応しきれない部分を補うことにする。一体一体ならばそこまで強くもないキャンサーには、その程度で十分。むしろ、守ることに徹することができるのだからわたしにとつては願つたり叶つたりだった。

そうしているうちに、アーデルちゃんが一步下がるとわたしの背中がぶつかってしまった。

わたしのことを運命の人だと認識して、気づく。そうだ、この状況占いの……。

「忍者殿、お願ひがあるでゴザル」

キャンサー共と距離が離れたその時、アーデルちゃんが言葉を発する。

運命の忍だと思っているうちは、絶対にこちらから話してはいけない。

「恥ずかしながらこのアーデルハイド。目をやられてしまい、音と気配でしかキャンサーを捉えることができないでゴザル」

ああ、わかっている。その状態でよく頑張っている。

精いっぱいの言葉で労つてあげたい。

よくがんばりましたね……と、声をかけてあげたい。

だけど、今のわたしはアーデルちゃんの憧れを壊すわけにはいかないんだ。
多分、明日にはバレてしまっているかもしれないけど、それでも今だけは……。

「忍者殿のセラフは銃型とお見受け致したでゴザル。どうか、危なくなつたときには銃ではない別の音、もしくは直接身体を導いてほしいでゴザル」

わたしはスカートの影に隠し持っていた苦無^{くな}を取り出した。

苦無同士で金属音を鳴らす。これでどうだ、と言う合図だ。

アーデルちゃんが不敵な笑みを浮かべた。

「いい音でゴザルな。では、それでお願いしたいでゴザル」

では早速、戦うとしましよう。

アーデルちゃんに迫ったキャンサーに苦無を当て、金属音がコングのように鳴り響いた。音に反応してアーデルちゃんが剣を振るう。わたしはその背後について、銃をぶつ放す。たまに前方を注意しつつ、アーデルちゃんに危害が及ばないよう配慮。でも、常に気張つている必要はなく、気配だけでキャンサーを掃討している。

満身創痍で危なかつたはずなのに、水を得た魚のように舞っている。

その戦いぶりに美しさすら感じられた。

(つと、危ないッ!)

キンッ! と苦無が当たる音の直後に「ヤー!」と声が木霊した。

大群を相手にしていると、察知しきれていない部分も見られる。倒すか音を出すかの判断を瞬時に下し、目となつたわたしが導いていく。

アーデルちゃんが腕を振るい、わたしにその実力を見せてくれている。
金属音が鳴るたびに、踊っている。キャンサーを殺す、協和音が響き渡る。
さあ踊れ、風のように! 踊れ、雲のように!

そう。ここは音と気配の世界。

この世界において、異物はいらない。

ただ一駆けに、セラフを振るうのみ!

「はあ……はあ……」

キャンサーがすべて殲滅されると、アーデルちゃんがセラフを杖替わりにして膝をつく。「おかしいでゴザル……まだやることがあるのに……話したいこと、たくさんあるのに……疲れ切った身体は、限界に達していた。

大群と戦つただけでも十分すぎる。とてもいい 殿しんがり役でした。

「忍者……殿……」

最後の力を振り絞つて、言葉を発する。

「また、いつか……会いたいでゴザル……」

倒れそうになつたところをわたしが受け止めた。

そのときになつてようやく「よく、がんばりましたね」と。言葉を発することができた。

「神崎ッ！ 大丈夫なの!?」

遅れてイヴァールちゃんたちがやつてきた。

わたしが先走りすぎて随分と時間が経つてからの合流になつてしまつたけど、その分かけがえのない最後を飾ることができたと思う。

「大丈夫です。疲れて気を失っているだけです」

アーデルちゃんを一番背の高い星羅ちゃんにお願いする。

水晶をしまい、わたしの代わりにアーデルちゃんを受け持つてくれた。

「アーデルちゃんを頼みます」

「……佐月さん。確かに承りました」

わたしは樹海中心部を見た。そのはずなのに、黒のドームがすぐそこまでに迫ってきていることに気づかされる。思ったよりも成長速度が速い。このまま倒さなければ明日か明後日には生活圏も飲み込んでしまいそうな勢いだ。

早く、なんとかしないと。

「ではみなさん、行ってきます」

そう言い残すと、今にも泣きだしそうな表情でイヴアールちゃんと巫呼ちゃんが発する。

「ごめん、佐月」

「不甲斐ないわしを許してくれ」

まったく、二人してなんて言葉を吐きやがるんですか。

「絶対に倒してくるから首をクソ長くして待つっていやがれ♪」

雨風強まる台風の中、わたしは木の上に飛ぶ。

ハイドロペリッシュの周りを飛び交うイグナイトたちが、雨にやられて炎を失い、ただの足場と化している。わざわざ倒さなくて済むのは好都合だった。

さて、最後の一仕事と行きましょうか。

※

下にはハイドロペリッシュが生み出す闇。触れた時点で何もかもを飲み込む黒のドームが渦巻いている。

同時に、イグナイトも生み出してくれるのが不幸中の幸いといったところ。雨が降つていいるおかげで火も纏つておらず、遠慮なく踏むことができる。とはいって、自ら突進してきたりするわけで危険がないわけじやない。わたしはそんな奴らを倒しつつ、一人で本体の討伐へと向かっていた。

『佐月——何し——の。撤退を——渡したはずよ』

司令官からのノイズの混じつた通信が入る。ニュアンスで何を言いたいのかはわかるけど、何と言つてるかはわからない。わかりたくもない。

お願ひだからわたしの覚悟を邪魔しないでほしい。

通信を切る。わたしに、これはもういらぬ。

キャンサーを駆除しながら樹海中心部へと向かっていると、直方体のキャンサーが見える。側面からはイグナイトを、下部からはドームに向けて黒い何かを生成し続けていて、周囲は守るように配備されている。

「ツ……！」

突然ドームから黒の触手が飛び出して、わたしを捕まえようとしてきた。

空中で避けるのはさほど難しくはない。弾丸を喰らわせた。決定打にはならないけども、セラフの攻撃で形が崩れていく。

一つ一つを冷静に処理していけば問題はないものの、数が問題だった。この触手も際限なく飛び出してきて、気を抜いたら一巻の終わりだ。

イグナイト以外にも対応しなければならないことが増えるのはとても厄介だ。どうしたものかと考えていると、一つだけ対策を思いついた。

けどその前に、ご挨拶だ。

「どうもお久しぶりです♪ 返してもらいに来ましたよ。それはもう、いろいろと♪」

周囲を渦巻く触手とイグナイトを差し置いてハイドロペリッシュュの上に乗つかり、セラフを構えた。

わたしの攻撃はどうしても威力に欠けてしまう部分がある。一筋縄ではいかないってことくらいはわかっていてここに来た。

だから、一対一で持久戦に持ち込む。一時間以内の短い持久戦だ。

そうするためには、やはり氷だ。わたしのダイヤモンド・ダストで氷の壁を作つて外部からの攻撃を遮断する。

「喰らいやがれえッ！！」

一つ一つは弱い弾丸だらうと関係ない。

雨垂れ石を穿うがつという言葉があるように、たとえ小さな攻撃でも、粘り強く撃ち続ける。これがわたしの考えた対策。一人ではどうしようもなくて、こうするしかなかつた。周囲のイグナイトと触手が氷の壁を殴つてきている音がする。多分、長くは持たない。そうなつたらまたダイヤモンド・ダストで壁を開けるだけだ。

身体を揺らされようとも、わたしの体幹を以てして体勢を崩せるわけもない。大丈夫、やれる。やらなきや、いけない。

ピキ……と氷の壁にヒビが入りつつあつた。壊れた直後に次の壁の準備をしようとしたところ、イグナイトのよる三方向同時攻撃がやつてくる。これはまずい……！

「銃型セラフ所持者全員ツ！ 佐月を援護しろツツ！」

遠くから樹海全体に響きそうな凄まじい声が聞こえた直後、目の前で爆撃が行われた。このスピーカー越しに聞こえる声は、白河さん？ 撤退したんぢや……。

「佐月！」

名を呼ばれて振り返る。顔も見えないほど遠くに、30Gの部隊長が立つていた。

命令を無視しているのはわたくしだけじゃないんですね。

「頼む！ お前しか飲み込まれた者を救い出す方法がない。お前にかかるといふ！」震えた声音で発せられたお願ひを聞いて、すぐに氷の壁を作る。

白河さんの激励を聞いて、改めて感じることがあった。

元々、セラフ部隊というのはキャンサーから人類を救うための軍組織。今回の作戦においては、ハイドロペリッシュュという脅威に立ち向かうべく、アーデルちゃんとわたしで、成層圏まで飛んで行つた。

それがまさかこんな未来が待ち受けていただなんて、思いもしなくて。

そうだなあ……もつとたくさん、星羅ちゃんに占つてもらつていたら、こんな未来にならなくて済んだのかな。いや、絶対当たる占いなら関係ないか。

わたしは、いつの間にか人類のために戦つているわけじやなくて、アーデルちゃんのために戦つっていた。

いつからだろう。

多分、占いを最初に聞いた時からかな。

「ははは……」

乾いた笑いが漏れ出る。わたしは、何のために戦つているのか。

迷つてはいるわけではない。迷つたことなんて、一度もない。

だから聞こえないように、叫んでやろう。

「言われなくてもわかつてるつつうーのツツツ！」

再びハイドロペリッシュュへの乱射を始める。小さな連撃だろうと着実にダメージが入つて

いるようで、青いヒビが大きくなりつつある。

もう少しだ。もう少し……倒せる……！

そう信じた次の瞬間だつた。

「げほっ……！　えつ……？」

口から吐き出される血を見て、わけもわからずその場でフリーズしてしまった。黒の触手がお腹を氷の壁ごと貫いている。痛みも感じないという薬の悪い部分が露呈した。でも、動ける。まだ、戦える。

「うぐっ……！」

触手が先端で広がり、わたしを壁から出そうと引っ張り出そうとしてくる。

壁の穴はまだ小さい。ここで埋めてさらに厚く、他の触手が入つて来られないようにした。だけど、わたしの腹を貫いているこの触手だけはどうも手癖が悪くて、あちこちへと身体を動かされてしまう。こうなつたら、最後の手段だ。

セラフの銃口をわたし自身に向ける。こんなことをやるのは、最初で最後。「凍れええッ！」

わたしに開いた風穴、そして足を凍らせ、ハイドロペリッシュの身体にガツチリと固定させて移動もできないようにした。

身体が凍っているというのに、冷たくない。

いや……熱い。今のわたしにとつて、この氷すら熱く感じられる。

痛みを知らないわたしは止まらない。止められることができるのは、時間だけ。絶対に、死んでも倒してみせる。

「いい加減、くたばりやがれえ／＼ツツ！」

その瞬間、石が穿たれるときが訪れた。

無機質な叫びの後に、白い尖塔が立つ。

それは、上に立っていたわたしを跳ね除けるように伸びていった。

黒のドームも自然消滅し、わたしはそのまま地面へと落下していく。

「佐月ツ！」

イヴァールちゃんの声が聞こえる。

残念ながらわたしを受け止めることはできなかつたみたいだ。背中に衝撃が走つて、息をすることもままならない。

痛く……ないなあ……。うん、痛くない。

痛くないけど、どうしてだろう。もう力が出ない。

「佐月、待つてなさい。今すぐ応急処置をするから――」

手当てをしようとするイヴァールちゃんの手を握りしめ、そのまま首を振つた。

すぐ近くで、茅森さんを含めたハイドロペリッシュに飲み込まれた人たちが倒れているのを見つけた。薄ら呼吸もしていて、無事なのがわかる。

「弟切草……」

声を取り戻したわたしは、アーデルちゃんに似た花を見つける。

弟切草は、一日花。一日しか花を咲かせない。

もしかしたら、わたしにも似ているところはあるのかも。さつきのように、唯一大きなキンセンサーを倒すために、今日一日だけ、ひと際大きな大輪を咲かせたのだから。そして、花言葉も日本においては秘密という意味がある。

わたしは、アーデルちゃんに最後まで秘密を抱えたまま——。なんて、自惚れすぎか。

「しつかりしなさい佐月っ！ 手を離してつ……じゃないと、あんたがいないと私は……！」

「イ……ヴアール……ちゃん……」

「さんい……ち……しーを……」

きっと、31Cはわたしがいなくてもなんとかなります。
ですから——。

「よろしく……お願ひしま……え……」

ハイドロペリッシュとの戦いは、わたしだけが命を落とすという結果に落ち着いた。

心から、安堵した。よかつた、と。

これで……占い通りだ。

（Day9） その時、ショップ店員は言つた

目を覚ますと、アーデルは様々なことに違和感を覚えた。
病室のベッドにいたこともそうだったが、夏だというのにセミの鳴き声が全く聞こえなか
つたのだ。

（拙者が気を失つてからそう時間は経つてなさそうでゴザルな）

身体を起こしながら考える余裕はある。体力が尽きて気を失つたところまでは覚えている
が、そこから台風が過ぎ去つてそう時間が経たない今に至るまで寝ていたようだ。

まだ疲れが残つているのか満足に動くことは叶わないが、普通に歩くことはできる。
行きたいところがある。勝手に出ていってはならないとわかついても、気持ちが抑えき
れずにいた。走り出したいくらいだったが、はやる気持ちを抑えて静かに歩んでいく。
自分の無事を伝えたい。

運命を退けることができたと伝えたい。

ずっと会いたかった人に会えたと伝えたい。

大好きな人に、自分の使命をやり遂げることができたと報告したくて前へと進む。

（佐月殿はもう、回復してゴザルか……？）

もしかしたら怪我なんてなかつたかのようにケロツとしているかもしれない。

(だとしたらもうショップで接客しているかもしれないでゴザルな)
怪我をしていてもいつものように働いている姿が目に浮かぶようだ。

(佐月殿……今行くでゴザルよ……)

いつもより小さい歩幅で歩み続ける。動けるのになぜか足取りが重く感じられた。
そこにチン、と高い音が鳴り響いた。乗ろうとしていたエレベーターがちょうど今いる階層に止まつたことに気づいた。

「神崎……？ もう大丈夫なわけ？」

エレベーターから山脇が出てきて神崎の姿に驚いた様子だった。

無理やり感情を抑えつけたようにゆつくり、震えた声音で心配してくれる。

「この通りでゴザルよ。それより山脇殿、佐月殿はどこにいるでゴザルか？」

「…………」

「山脇殿？」

沈黙を告げる山脇にアーデルは小首を傾げた。

昨日は確かに自分よりも怪我が酷く、先に意識を失っていたとはいえ、後のことば天音に任せたため無事であることは間違いない。それなのに何も言わないというのは変だつた。せめて知らないなら知らないと言つてくれてもいいのに。

「もしや拙者を驚かせようと近くに隠れてるでゴザルな？」

そうだサプライズだ。近くにいるから山脇は言いにくいのだとアーデルは察した。

「佐月殿ー！ どこでゴザルか！ 拙者は今起きたでゴザルよ！」

全快ではないが、なんとか声を振り絞ってどの病室にも聞こえる声量を出した。他の患者には迷惑をかけているのも構いなし。近くに佐月がいることを強く願つた。

「佐月殿ー！ アーデルはここにいるでゴザルー！」

「やめなさい神崎……」

「佐月殿！ お願いでゴザル！ ここに来てほしいでゴザル！」

「やめなさい神崎ツ！」

「ツ……！」

山脇の怒声にアーデルがたじろいだ。

山脇の目は下を向きながらも酷く揺れている。これから告げられることに察しがつかないほどアーデルは馬鹿ではない。むしろ、沈黙の時点では嫌な予感はしていた。

「佐月は、死んだわ」

心の準備を待たずに突然告げられた。だが、不思議と取り乱すことはない。

不自然なくらいに、心から何かが喪失していく感覚があつた。

「そう、で、すか」

どうして？

天音に預けたあとに動けるはずはなかつた。あの後に何かあつて動けたというのか。
だとしたらあのとき、背後にいたあの人は……。あの温もりは……。

懐かしさと同時に、よく知つてゐる背中だと思つてゐた。ツインテールのような髪、ロン
グスカート。銃型セラフであつたこともそうだし、自分の動きをまるで手に取るようにわか
つていたことも不自然だつた。

わかつてゐたけども、わかつてゐないふりをしてゐた。

山脇から真相を聞いてもいらないのに自ら最悪の方向へと思考を巡らせていく。
そして当たつてゐるかはともかくとして、ある結論へと辿り着いてしまつた。

そう――拙者が、恩人を殺してしまつた、と。

自分の中にあつた憧れが、不の感情へと変わつていく。

「いつ……にんじや……しょーたいむ」

突然アーデルの口からセラフイムコードが発せられ、セラフが呼び出される。

「神崎今すぐそれをしまいなさいッ！」

院内に山脇の怒声が響き渡つた。これからアーデルが何をしようとしているのかすぐに察
したようで、距離を詰めるが、遅い。

ぱた、とアーデルの頸から水滴が滴り落ちる。セラフの刃を自らの首元へと当て、山脇へ
と言葉を向けた。

「アーデルのせいです……」

何が忍者だ。

自分が憧れて研鑽を重ねた結果、恩人を殺してしまった。

こんな恩を仇で返すようなことをして、何よりも自分が許せない。

「あんたのせいじゃない……落ち着きなさい……お願ひだから……」

「いいやアーデルハイドのせいです……！」

アーデルハイドがもつと強ければ……！ 無謀な賭けに出なければ佐月さんを巻き込まずに済んだというのに……ッ！

山脇が宥めるように手を少しだけ前に出すも、アーデルは手を震わせながらセラフを首に接触させた。

血が、首を伝つた。

「神崎」

やがて、目を瞑ると、

「神崎やめなさい！」

「山脇さん……ごめんなさい……アーデルは……！」

セラフを強く握った瞬間、山脇は歯軋りしてアーデルに詰め寄る。

「最初からッ！ 佐月は死ぬ運命だったの！」

「えつ……」

セラフを持つ手の震えが止まる。

その次の瞬間だった。

「神崎さん、あなたはもう少し寝ていなさい」

手塚が背後にアーデルの首筋に注射器を射すと、そのまま意識を失ってしまった。



イヴァールが最初にその知らせを聞いたのはいつのことだったか。

そうだ。今回の国道一号線開通任務が始まつたのを一日目とするならば、二日目のことだ。
「……星が仰いました。来週の水曜日。佐月さんが亡くなると」

桜庭の話を聞いて耳を疑つた。仲間にについてそんな冗談を言つてくるとは。

彼女の占いの的中率は約半分だつたはずだ。命のやり取りを当たるかわからない占いに委ねて警戒しろだなんて馬鹿げている。

つい感情的になつてしまふイヴァールだつたが、何を言われようと毅然とした物言いを続ける桜庭を見て確信する。

「あんた、本物なの……？」

「……私は星から未来を訊いているだけです」

いち早く佐月の死を知ったイヴアールは、どうにか運命を変えられないかと考えた。過去に、既に出た結果を変えた事例はなかつたか。

命を落とす原因から根本的に離れてみたら結果を変えることができるのではないか。桜庭に訊ねてみると、最終的な結果は変わらないと断言されてしまったのである。それでも簡単に諦めるようなことはしなかつた。

「わたしが……死ぬ……？」 そうですか……」

次の日、イヴアールは桜庭の口から佐月に告げられる瞬間を目の当たりにした。

佐月は直前で桜庭の占いが必ず当たるものであると言い当てたようで、衝撃的な事実の当たりにしてもそこまで驚いていない様子だった。

恐ろしいほど、驚いていなかつた。

セラフ部隊として生きている以上、死は常に隣り合わせだ。だが、簡単に死ぬような訓練は受けてきていない。

それでも死ぬのだ。

占いの結果を告げられ、どんなに死の原因を把握しようとも運命を変えることはできない。

「人は、自らの死ぬと知ったときに逆に落ち着けるんですね」

そう言つて佐月は微笑んでいた。

知りたくない事実だ、と本人よりも先に泣きそうになつて、必死に堪えたが、佐月に見破

られてしまう。

「泣きそうなときは泣いてください。今のわたしは泣き方がわからないから、誰かが代わりに泣いてくれるだけわたしは幸せ者です」
まだ命を落としたわけでもないのに。
目の前に本人がいるのに。

イヴアールは涙を流した。

その日をきっかけに、イヴアールはある決意をする。

佐月を絶対に生かすべく、運命に抗うこと。

運命の日を全員で力を合わせて佐月の死を退けようとしたのだ。

ただ、そのことを佐月に伝えたら、

「アーデルちゃんには伝えないでもらつてもよろしいでしょうか」
言っている意味がわからなかつた。

動ける人数は多い方がいい。31Cの中でも豊後だけは伝えるべきではないという判断はしていたものの、神崎を追加するという選択肢はイヴアールの中になかつた。

おまけに神崎は31Cの主力だ。そんな彼女を仲間の死に抗うための力として制限をかけるわけにはいかない。

「星羅ちゃん。アーデルちゃんが亡くなる未来はまだ出ていませんでしたよね」

「……今朝見たところ、豊後さんが一週間後に焼肉を食していたという話はしましたね」

「それがどうかしたわけ?」

「そんな占いをしていたことは初耳だつた。」

「……豊後さんの隣に、神崎さんもいました」

因果関係もわからず、怪訝に首を傾げていたイヴァールだつたが、すぐに気づく。
一週間後がポイントだ。佐月が亡くなるのは来週の水曜日。今日から数えて五日後。
つまり、佐月が亡くなるような出来事の後に、普通に食事をしている。それは、二人は命
に別状がないと担保されているのだ。

佐月がイヴァールに振り向き、続ける。

「もし、運命が変わることがあればアーデルちゃんを巻き込むことになつてしまふ。
それだけは嫌なんです」

そんなことはない、と言いかけて息を呑む。

仮定に仮定を重ねた話だ。その通りになる確率はかなり低いようと思える。
ただ、イヴァールとしてはその考えを尊重しないわけにはいかなかつた。

——彼女にとつて最も大事な、豊後の命まで人質に取られた気がしたから。

一刻と運命の日は近づいていった。

気になつて毎日同じ占いをしてもらおうと桜庭に頼んでみるも、結果は同じ。

佐月が死に。豊後と神崎は焼肉を食べている。

ハイドロペリッシュ討伐を31Aが担当することになつたとしても、変わらなかつた。

佐月を作戦そのものから遠ざけたところで運命は変わらないのではないかと諦めの気持ちも出てきた。

それどころか状況は悪化した。神崎が自ら成層圏へ行くと名乗りを上げたのだ。

また占つてもらうも、結果は変わらない。

桜庭も、表情こそよく見えなかつたが「いくら占つたところで変わらない」と、そう言つてゐるような雰囲気すら感じてしまつた。本当にそう言つてゐるのかはともかくとして、純粋な気持ちを裏切つて いるような気がして心底気持ち悪い。

だから31Cに佐月がいたことを遺せればいいと思い、豊後に祭りで写真を撮らせたり、神崎が成層圏に行くのに大反対して、微妙な空気が流れつつあつた間柄を取り持とうとした。そしたらどうなつただろう。

「アーデルちゃんは、死ぬんです」

佐月が神崎に占いの結果に嘘をつくという暴挙に出たのだ。

もちろん佐月が生きることを諦めたわけではなかつたが、このときにはもうほとんど無理だと思っていた。

しかし、佐月は違う意味で諦めてはいなかつた。

自分が助からないと見据えた上で。

できるだけ神崎に危険が及ばないよう作戦に携わることを諦めさせようとしていた。自分のことなどどうでもいい。この身を賭してでも神崎が生きる運命だけは変えさせない。そう覚悟を決めた目を向けていたが、神崎に伝わるわけもなく、そのまま仲違いが続くこととなつた。

でも、それでも。

そんな佐月の覚悟に、イヴァールは根負けしてしまつたのである。

そこからることはあまりにも必死だつた。

イヴァール自ら司令部に直談判をして佐月も成層圏へ行くことの許可を取つたり、爆弾の製作をしつつ、当日の作戦陣営の確認もして作戦を遂行することだけを考える時間が訪れた。部隊長として佐月に最後になるかもしれない出来事もあつた。

仲間が死ぬとわかっていて、何をしているんだろうと思いもした。

せめて最後まで、彼女が生きることを諦めないようにしよう。

佐月の意志は尊重しつつ、明日も生きていられる未来はあるはずだ。
最後まで諦めない。

諦めたくない。

『31A部隊・茅森、和泉、朝倉、逢川。以上四名が消息不明。急遽作戦を中止します』

神崎と佐月によるハイドロペリッシュユ撃墜が功を奏し、あとは31Aが総叩きで倒せるはずが、半壊にまで及ぶこととなつた。

(いや、作戦が中止なら佐月は生きられる……？　って、私……なんでこんなこと……)

茅森たちには豊後の件で世話にもなつていたというのに、ここまで冷ややかな感情を持つ自分が嫌になる。

近しい仲間は大事であることには変わりはない。佐月は、生きられる。

半ば悪魔の囁きのような声に、安堵と罪悪感が両方入り混じる感覚に見舞われた。

反吐が出しそうだつた。

それでも撤退を他の三人に伝え、帰路につく。犠牲になつた者はいるが、仕方のない犠牲だと割り切るしかなかつた。

割り切るしかなかつたのに。

割り切れなかつた。

「……やまわ……き……さ……」

「豊後ツ！　豊後ツ——！」

「山脇さんまで巻き込まれてしまします！　どうか……どうか……！」

帰路の途中で大量のキャンサーに襲われ、拳銃の果てには豊後が変異したハイドロペリッシュの白濁ドームに飲み込まれてしまつた。

イヴアールはものの一瞬で取り乱し、豊後を救おうと自分も手を突っ込みかけた。だが、桜庭に止められて踏みとどまる。

後に触れた時点で抜け出すことができないため、31Aどころか大量に犠牲者が出ているのだと司令部から連絡が入つた。あの31Aが半壊するわけだ、とイヴアールは酷い喪失感に見舞われる。自分のすべてが目の前でなくなつたのだ。

「うるさいッ！ 豊後がいなくなつたら今までの私の努力はどうなるの!? あんただつて近くで見てきたでしょ!? 私がどれだけ豊後を……豊後を……」

「……山脇さんわかっています。わかつていますから、落ち着いて」

誰かに当たつたところで仕方がないくらい、わかつていた。

それでも山脇は感情を表に出さずにはいられなかつた。表に出し過ぎて後でハツとするも、筋違いであることに変わりなく、新たに自責の念に囚われてしまう。

どうして守れなかつたのか。

明日には焼肉を食べているのではなかつたのか。
運命が変わつてしまつたのか。

だとしたら佐月にとつていいことではあるのかもしれない。豊後が犠牲になることで佐月が助かる。これはそういう運命なのかも知れない。

「いや、そんなもの。納得できるわけがない。」

どこかにきっとあるはずだ。豊後も助かる未来が。

「ねえ桜庭。豊後を助ける方法はまだ失われたわけではないんでしょう。占いを良く知っている桜庭なら、きっとわかるはずだ。」

「……はい。豊後さんを助ける方法なら、あります」

桜庭は、いつも以上に霸気のない声音で発していた。

そして事は、佐月と天音がいる場所を突き止めたときに進む。

二人がいたのは小さな洞窟だった。台風の目も過ぎ去り、風も次第に吹き始めている中で、何やら言い合いをしているかのような強い声が木霊していた。

何やら撤退命令を無視して神崎がキヤンサーと戦っているのを助けに行くかで揉めている様子だ。

「——それまでよ。佐月」

満身創痍のまま立っているのがやつとな佐月を呼び止めた。

こちらを認識し頭を拌んだ。見てるだけで痛々しい。頭から血を流し、腕もよからぬ方

向へ曲がっている。こんなんで神崎を助けに行こうなど無謀が過ぎるというもの。

それでも言わなければならない。

自分の首を絞めることになろうとも、佐月に無理をさせることができわかっていても、どうしてもお願ひしなければならないことがある。

「31Cで奴を倒せるのは佐月、あんたしかいないの……」

酷い怪我をしている人に頼んでいいことじゃない。

そんなことわかっている。

だが、絶対に当たる占いの結果は悲惨なものだつた。

最初から佐月が死ぬことに変わりはない。豊後だって生きている。その未来があるのは、佐月が自らの身を賭してハイドロペリッシュを倒す結末があつたからこそだつた。

イヴアールはそのことにずっと気づきながら、見ないふりをしていた。

見ないふりをして、どうにか佐月を救う方法を考え、豊後が飲み込まれてからようやく向き合うことにした。

我ながら酷いものだ、とイヴアールは歯軋りする。

こんなのは自分の都合で犠牲になるようにお願いしているようなものだ。

豊後、およびその他セラフ部隊を佐月の命と引き換えに救う。
最悪のトロツコ問題だ。

自分の最も大切な人を人質に取られたのでは、仲間の命を差し出すしかないではないか。
「イ……ヴァール……ちゃん……」

最悪だ。最悪だ。最悪だ。

「さんい……ち……しーを……」

本当に、最悪だ。

「よろしく……お願ひしま……す……え……」

最悪な部隊長である山脇・ボン・イヴ・アールは、

「自分のこともちよつとは大切にしなさいよ……馬鹿……」

薄ら笑みを浮かべてこの世を去る佐月マリを、ただ見つめることしかできなかつた。

☆

同じベッドの上で目を覚ますと、山脇がこれまであつた事情を話してくれる。

佐月が死ぬとわかつて、なんとかアーデルを巻き込まないよう奮闘してのこと。

31Cで豊後以外の全員がそれを知つていて、佐月が箱口令^{かんこうれい}を敷いていたこと。

佐月は死ぬことを受け入れていて、裏で山脇が頑張つていたこと。
目を覚ましたばかりの朦朧^{もうろう}としていた頭で、アーデルは静かに聞いていた。

「そうそう。司令官が申し訳なさそうにしてたわよ。麻酔で眠らせるのは強引すぎたって、でも取り乱して自殺しようとしていたあんたを救うためにはああするしかなかつた」「すみません。理解はできていますが、どうしたらよかつたのかわからなかつたのです」「なんかその喋り方、調子狂うわね。いや、こんなこと言えた義理ではないんだけど」「……申し訳ありません」

普通の喋り方をしていても難癖をつけられているような雰囲気になつてしまふ。

ドイツ人のアーデルが忍者に憧れて今の今まで日本語を習得してきた中、忍者らしく振舞うことをやめようと思つたら自然とこのような喋り方になつてしまつた。元お嬢様らしく、清楚な言動が表に出てきてしまつてゐる。

「あんた、まだ死にたいと思つたりはしないわよね？」

「……わかりません」

山脇の問いに、アーデルはかぶりを振る。

ただ、一つはつきりしていることがあるのだとしたら。

「佐月さんが亡くなつたのはアーデルのせいです。アーデルがあの場で前線に出なければ佐月さんは助けに行く必要がなかつた。そうですよね？」

「でもそれは、佐月があんただけは生きてほしいと願つたからで」「わかつています……！ それも……わかつています……！」

わかつていても、そう簡単に自分を許すことなんてできやしない。
昔助けてもらつた恩を、仇で返してしまつた。その事実はどう足搔いても消えることはない。

自分が殺してしまつたと思えば思うほど、自分を許せなくなつてまたこの世から消えてしまいたい思いが強くなつていく。今は山脇が隣にいるから口には出さないものの、そのうち去つていつた後を見計らつて自ら手にかけようとすら考えていた。

しかし、山脇は病室を出ようとしない。

きつとわかつてているのだろう。病室から出た後に何をするのかを。

「こういうとき、部隊長らしく何かしら説得した方がいいのはわかつてんんだけど」

静かに何かの前置きをして、山脇は近くにあつた机にある機器を置いた。

ボイスレコーダーだ。誰のものなのかは、なんとなく察することができる。

「佐月が作戦前に残したボイスメッセージよ。悪いけど、録音してるところを聞いたら中身は聞いているわ」

山脇は廊下を指差した。一人で訊きたいかを訊ねているのだろう。

静かに頷くと、病室から足音一つ立てずに去つていく。

部屋から去つたとはいえ、気配はある。それはそれで構わなかつた。
それよりも佐月が残したというボイスメッセージの中身だ。

どんなメッセージがあるのだろう。

少し怖い。だけど、声を聞きたい。かつて憧れた大好きな人の声を今すぐ聞きたい。
期待半分恐怖半分の中、親指でゆっくりと再生ボタンを押した。

『アーデルちゃん。聞こえてやがりますか？もし別の人気が聞いていたらこれをアーデルち
やんに渡していただけますでしょうか。よろしくお願ひします』

……ああ、聞こえている。

もうどこにもいない、二度と聞くことのできない声が。

口は悪いが、心地良い。安心できる声が聞こえている。

『ここまで再生しているということは、きっとアーデルちゃんが聞いてくれてているんでしょ
う。そして、わたしはもう無様に死んだんでしょうね♪ ざまあみろ♪』

これから死ぬというときに、なんて晴れやかな言葉を吐くのだろう。

佐月らしい言葉に安心するところではあるが、無理に明るく振る舞っているかのようにも
聞こえてどこか不安にもさせられる。

『わたしの嘘はどうでしたか。アーデルちゃんが作戦に参加しない方針を固めれば絶対に死
ないだろうという想いでついた愚かな嘘です。アーデルちゃんが行くと決めたときには失
敗したかと思いましたが、結果的にわたしだけが死んで、アーデルちゃんは生きているので
すから嘘は大成功ですね♪』

本当に、とんでもない嘘をついてくれた。

桜庭の占いが絶対当たると知った今、きっと嘘のあるなしにも関わらず、佐月が亡くなる運命は変わらなかつたと考える。

本当のことを見つた上で共に抗いたかつた。あるいは、逃げたかつた。

そう思うのは、アーデルのわがままでしかないのでどうか。

『そしてわたしが死んでから、アーデルちゃんはきっといろいろなことに気づくと思います。もし気づいていたなら、わたしはアーデルちゃんが今を生きていて忍を志していたことにどれだけ救われたか……ということだけ言つておきます。何のことかわからなかつたらそのまま忘れやがれこのニブチンめ♪』
.....。

わからないなんてことはない。

多少ばかしているものの、今の言葉で確信が持てた。

『わたしは忍になることを諦めました。今のわたしはショップ店員であり、それ以外に何も取り柄がない普通の人なんです。そんなわたしにとつて、アーデルちゃんが忍に憧れ、自ら修行を重ねている日々を見て思つたことがあるんです』

ここからちよつとした間があつた。

声の後ろに雨と風の音が聞こえてくる。台風が近づいていた一昨日くらいに録音したのだ

ろう。

『そのうちわたしを忘れる人もいます。何せわたしはアーデルちゃんのよう目に目立ちたがり屋というわけでもありませんし、ただのショッピング店員でしかなかつたから』

『そんなこと……ありません……』

ショッピング店員以外の一面もたくさん見てきた。

普通の女の子として祭りを楽しむ一面も。忍として幼い頃に助けてくれた心優しい一面も。全部、全部この目に焼き付いている。

『そんなことありません……！』

声を大にして、ボイスレコーダーに向かって言いのけた。

『ですから、一つだけお願ひがあります』

一つとは言わずいくらでもいい。

いくらでもお願ひを聞くから、声を聞かせてほしいと強く願つた。

『わたしはアーデルちゃんには……アーデルちゃんにだけは忘れてほしくない。ずっととは言いません。時々でいいんです。わたしのことをたまに思い出してほしいんです』

忘れるものか。

かつて人類のために命を賭した佐月マリという忍がいたことを、忘れたりはしない。『たつた一人だけでもいい。アーデルちゃんがわたしのことを想つて生きていてくれたなら、

わたしは胸を張つてくたばることができます。だから……だから……』震えた声音。佐月は最後に自らを落ち着かせてからゆつくりと発する。

『何十年かした後に、地獄で待つてゐるぞ♪』

※

雨が強く降る中、録音を停止し、深く息を吐いた。

募る想いを吐露していたら思わず泣きそうだつた。つい感情に任せて余計なことまで言つてしまいそうだつたし、ギリギリ留まることができてよかつた。

「佐月。言いたいことは言いきつた？」

ふと、目の前から声が聞こえた。

話している内容が内容だつたから周囲には気を遣つていたはず。声の主はわたし以上に慎重に動いていたのか、それともこの録音に集中しすぎていたのか。

まあどつちでもいいか。

「……イヴ・アールちゃん。よくここにいるとわかりましたね」

「桜庭に聞いたのよ。据わつた目をしてボイスレコーダーを持つていたつて」

また星羅ちゃんですか……と言いたいところだけど、今回ばかりは占いを使わずに持ち物

だけを伝えただけみたいなので許すことにしよう。

イヴアールちゃんは雨粒に叩きつけられている墓に視線を落とした。

「それに、31Cにとつてはまだあまり縁がないところだしね。ここ」

“まだ”という部分に皮肉が込められていた気がしたのは勘違いではないと思う。

ここは葬儀場。多数のセラフ部隊の亡骸（なきがら）が送られた場所。

アーデルちゃんに聞かれたくないことを言うならと選んだのがここだ。どうせ店だと真っ先に見つけられるだろうし、わざわざこんな台風が近づいている中、外で何かしようなどとは思わない。

あとはイヴアールちゃんの言つた通りだ。

こういうことを言つては不快に思う人もいることは承知であえて説明すると、わたしたちにとつてここは蒼井さんと藏さんが送られたくないの場所でしかない。他の人に比べて所縁がなさすぎる。強いて言うなら、もうすぐ命を落とすわたしに関係はあるかもしれないけど。

「最後の日くらい神崎と話をしたらいいじゃない」

ああ、イヴアールちゃんはそんなことを言いに来たのか。「わたしもそう思っています」

「ならどうして？」

「明日のためにいろいろと準備をしてきたからです」
密かにいろんなことを準備してきた。

お祭りだつて他の人に任せてきたし、わたしがいなくなつた後のことを考えてショッピングは大島家のみなさんにマニュアルを渡してきた。特に六宇亜さんが今日はわたしの代わりにショッピングを見てくれている。少しさは思い出が残るようイヴァールちゃんが写真を残してくれた。もういつでも死ぬ準備はできている。

けど思えば、ショッピング以外のことであまり大したことやつてなかつたな、と軽く笑いそうになつた。

「それにわたしは、もうここでアーデルちゃんと話すことは何もありません」

「お祭りで話したいことは全部話したつてこと?」

「是とも否とも言わない。ある意味でそうではあるし、ある意味でそうではない。

「あんた、神崎と微妙なままここを去るつもり?」

「微妙でいいんですよ。イヴァールちゃん」

「どういうこと?」

「これ以上アーデルちゃんと話をしたらわたしは、どんな手を使つても作戦を中止にしたくなつてしまふ。それはアーデルちゃんの運命を変えてしまうかもしれない。わたしだけが死ぬことになっている今の未来を、変えるわけにはいかないんです」

アーデルちゃんが占つてもらつた結果に、運命の人を側で感じるというのがあつた。

わたし視点で解釈をすると、きっと何らかのきっかけでアーデルちゃんに正体がバレてしまつた。

まうのではないかと思う。

だけど、それはわたしにとつて悪いことだけではない。この未来は、恐らくアーデルちゃんがこのまま予定通り作戦に参加した末の出来事だ。

「でもさ、やつぱり納得できない。準備はできているとか 嘘うそ いってるけど、そんな微妙な別れ方をして平氣でいられるわけ？」

平氣でいられる……か。

そんなの、わかつてゐるくせに。

「……なわけ……ないですか」

「……え？」

「平氣なわけないじやないですかツツツツツツツツ！」

「ツ……！」

わたしの怒声にイヴアールちゃんが肩をビクつかせた。

今までに向けられたことのないような恐怖の視線を感じる。やりすぎてしまつた。謝らないと、謝らないと。

「ごめんなさい。急に大声を出して……」

そう言いつつ、目は合わせられなかつた。

「別に……私こそ悪かつたわねこんな、踏み込むようなマネをして」

「いいんです……わたしも意地になつてましたといいますか……」

気まずい時間が訪れた。作戦前日にこんなことになるなんて。わたしはどこまで不甲斐ないんだろう。

いや、でも。

よく考えてみたらイヴアールちゃん相手だからこそ、本音をぶちまけるべきなのかと思つたりもする。

死ぬこともわかつてゐる。ボイスレコーダーのことも聞かれている。

だつたらもう失うものは何もない。

「その、イヴアールちゃん。やつぱりひとつだけ、話を聞いてくれませんか?」

「ん。言つてみなさいな」

意を決して言つてみれば、イヴアールちゃんは優しく微笑んでくれた。

「死ぬのはやつぱり怖いです」

「そりや怖いでしうね。私だつて余命宣告されたときには同じこと思うわよ」

イヴアールちゃんは今にも辛そうだけど、精いっぱいの作り笑いを浮かべてゐる。

「そうなんです。感じる痛みは一瞬なんでしうけど、心残りが多すぎるんです。そのため準備をしてきたというのに、変な話ですよね。準備をしてもしても、やりきれないんです

よ」

わたしも笑つて返した。楽しい話にしたい。イヴァールちゃんとする最後の笑える話にしたい。

「もし、キャンサーがいなかつたらわたしは今頃どんな風に過ごしていたんでしょうか。お母さんが望んでいたように忍でもない、ショッピング店員でもない普通の女の子として過ごせていたんでしょうか。普通に恋をして、普通に結婚して、普通に幸せな日々を過ごせていましたんでしょうか。」

そんな人生を送れたなら、よかつたですよね……。

ええ、ほんと……サイコーですね。

だけど、なんかもうわたしにはそんな心残りもすべて飲み込まなきやいけないんです。

わたしがいなくなつたら31Cはどうなつちやうのかな。ぶんちゃんはわたしのことを持つさり忘れるかもしれないですね。巫呼ちゃんは案外死ぬまでずっと覚えていてくれそうですね。星羅ちゃんは……地獄へ行くところを天国へ軌道修正させてくれそう。イヴァールちゃんは、そうです。わたしが死んで、できないことを引き受けてくれますか？ そうです。今、アーデルちゃんに向けて遣したこのボイスレコーダーを渡してほしいんです。それさえ終われば、とりあえずは大きな心残りはなくなるかもしれません。

でも……そうだなあ……。

せめて、アーデルちゃんの忍としての生き方をもつと見ていたかった。

目立ちたがり屋で、少し変なところもあるけど、誰よりも忍の才能がある。

最初は目立ちたがり屋の忍なんて忍らしくないと思つていたんですけど、今はもうそれも忍として一つの形なんだって思うようにもなれました。

この前助けた女の子のように、アーデルちゃんの強さを知つた人が、憧れて、志していく。ドイツ人の女の子が日本で希望を作つていくんです。

まるで弟切草みたいですよね。

ずっと間近で見ていたかった……。

見ていたかったなあ……。

やつぱり、生きていきたいなあ……。

うん。生きていきたい

やつぱり、段々と辛くなってきた。作り笑いを浮かべても、表情が崩れていく。

「どうしてこんな思いをしなきゃいけないんだろう……！」

キンセンサーがこの世界にいるから？ セラフ部隊として配属されたから？

それともわたしが最後まで忍として才能がなかつたから？

もしかしたら全部かもしれないし、全部違うかもしれない。

もうわたしには何もわからないんです。

時間が残されていないから、心残りに対してもう準備をしたらいいのか。精一杯の抵抗で

どう生きる道を探したらしいのか。どう生きていたら本当は幸せだったのか。

全部全部、わからない！

教えてくださいイヴアールちゃん。わたしは……！
わたしは幸せだったのでしょうか……！」

「そうね……」

お互にギリギリ涙が出ないくらいの表情だつた。

イヴアールちゃんはしばし思案して、答えてくれる。

「少なくとも、31Cの全員はあなたのことは大好きよ」

「…………愚問、でしたね」

わたしは静かに視線を落とした。

優しい言葉と表情を正面から受けたら今度こそ何もかも崩れそうだつたから。

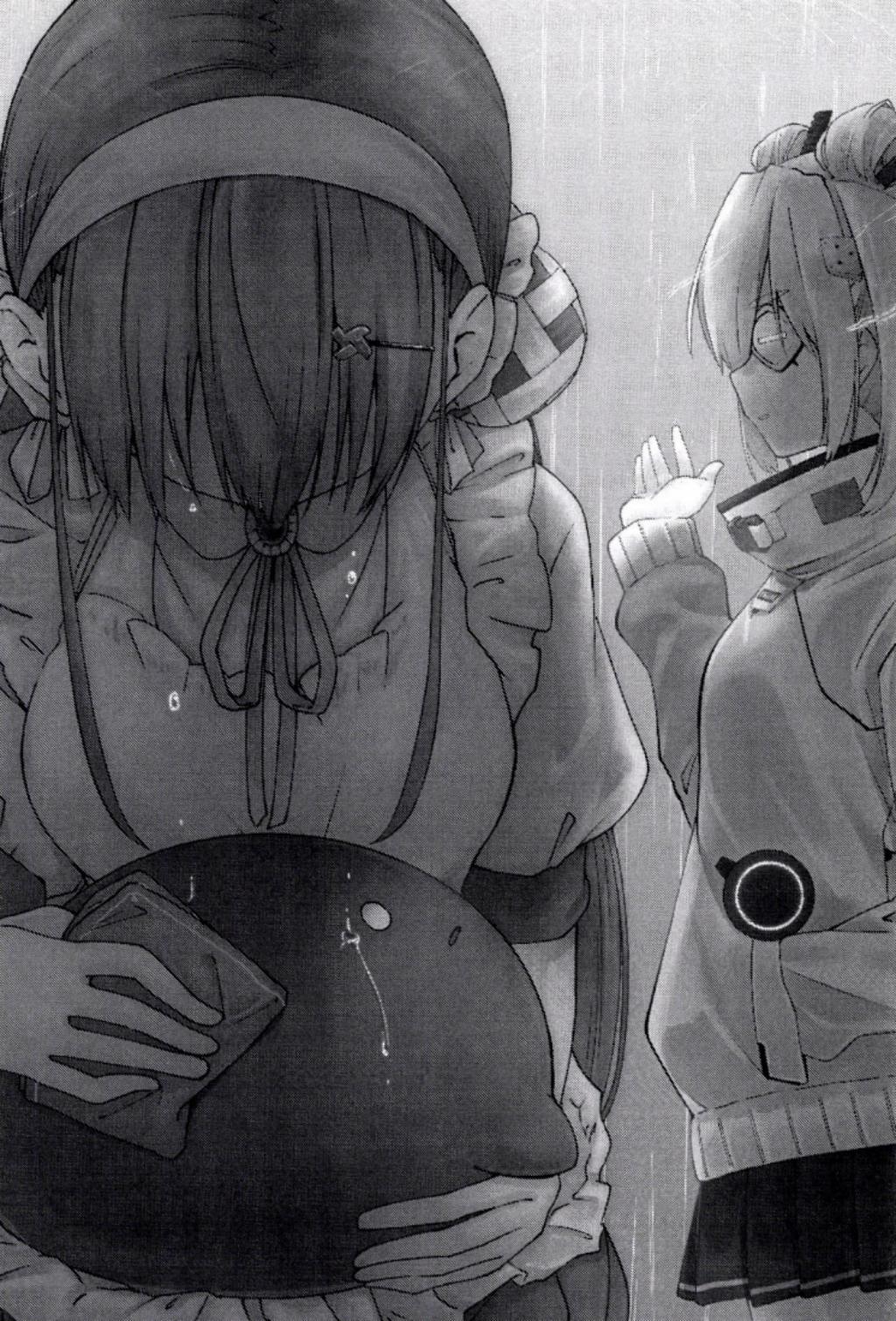
「あんたは頑張ってる。それこそ頑張りすぎだつて思うくらいに」

本当にそうなのかな、と自分で思う。

もつと頑張れたんじゃないか。もつと頑張れたらこんなことになつていらないんじやないか。

「ごめんなさい。わたし、話しそうたかもしません。忘れてください」

辛くなつてきて突き放してしまう。いくらいヴアールちゃんの前でも醜態は晒したくなかった。



「何よ。聞いてくれって言つておいてその言い草。嫌でも忘れたくなるじゃない」

「そんなこと言いますか」

「嫌だつたら今後、自分の言葉には責任を持つことね。あんな嘘ついたんだから半ば冗談ともとれるイヴ・アールちゃんの一言に、自然と笑みが零れてきた。

「そのくらい、わかっています……♪」

なんて他愛ない会話をすると、ふと雨の先からずぶ濡れのナービイがやつってきた。どういうわけか、わたしに近づいてきて、顔を窺つてきている……ような気がする。濡れたままではかわいそうだった。ハンカチで身体を拭いてあげることにしよう。脚を拭いては膝に乗せる。汚れた身体を綺麗にするように優しく、丁寧に……。

「……あれ」

ナービイの身体に、一粒の水滴が落ちた。

雨漏りしてゐるわけではない。

この水滴は、わたしのせいだ。

「どうして、もう自分の気持ちは全部吐き出したつもりなのに……」

言いたいことは全部言つた。

わたしの中ではすべてがスッキリしていただはずなのに、身体がいうことを聞かない。

「どうして今になつて涙が出てきやがるんですか……」

「不器用なんでしょ」

わたしのみつともない顔から目を逸らすように、イヴアールちゃんは雨粒を手で受け止めていた。



佐月の亡骸すらも見ることすら叶わない。

葬儀場の石碑を見て、ただただ泣きじやくる。

「山脇殿……」

「どうしたの」

「確かに占いでは、今日は焼肉を食べる日でゴザつたな」

いつしか本来の話し方に戻っていたはずが、またエセ忍者っぽい話し方を作っていた。
アーデルの中で佐月の死を受け入れて吹っ切れたというわけではない。

ただ、佐月の『時々でいいから思い出してほしい』という願いを踏みにじるわけにもいかず、彼女のことを覚えている最後の一人になろうとも生きているべきだと思うようになった。それに、31Cはまだ全員いなくなつたわけではない。アーデルの他にも四人も残つてゐるのだ。彼らを置いて佐月に遭いに行つては地獄から追い出されてしまいそうだ。

「占いだとそうだけど、どうして焼肉のかしらね。命を敬う食事にすればいいものを」やや複雑そうな表情を浮かべる山脇。アーデルも同じ心境だった。

せめて佐月が亡くなつた後なんだから、気遣つたメニューにしてほしいものだ。
そう思つていたところに、基地内で放送が木靈する。

『31Cのみなさん。カフェテリアに集まつてください』

七瀬の声を聞いて二人は顔を見合わせた。

「山脇様山脇様！ 肉でゲス！ 大量の肉でゲス！」

「そうだね。でも食べるのはちょっと待つんだよ」

31Cの全員がカフェテリアへ訪れると焼肉が用意されていた。

肉の一つ一つが紛うことなく輝いている。

おまけにステーキまで用意させていた。霜まで降つている明らかに高級な肉。これには豊

後も心躍らせるのも無理はない。

ただ、どうしてなのだろう。こんなときに肉を用意するなど、明らかにおかしいではない
か。

「あれは何？」

今日記憶がリセットされたばかりの豊後に聞こえないよう、少しばかり責め立てるような

物言いを七瀬に向けてしまった。軍の方針だとしても七瀬に言つたところで意味はない。そうとしてもアーデルも同じ思いであり、理由を聞かずにいられなかつた。

「佐月さんが用意されていたものです。『傷ついた心と身体にはとびつきりのご馳走と笑顔だぞ♪』と伝言を預かっています」

「ふつ……！」

アーデルは思わず吹き出してしまつた。佐月に似せようとちょっと笑おうとしていたが、表情の変化があまりにも乏しく、全然なつていなかつたからだ。

目を開いた山脇。ただそれも一瞬のことで、豊後の方へと振り返つた。

「佐月殿の仕業だつたでゴザルな」

「ここまで占い通りにしなくてもよかつたのに」

佐月は、自分が死ぬことになろうとも占い通りになることを切実に願つていた。

絶対に当たる占いだろうが、少しでも狂いがないように合わせようとしていた。他でもないアーデルに死んでほしくなかつたから。山脇と一緒に、豊後に笑つていてほしかつたから。

山脇が嘆息した後に席につく。肉に向かって目を輝かせている豊後を見て微笑んだ。

彼女が守りたかったのはアーデルだけではない。佐月が守りたかった日常の切り取りがここにはあつた。

「それじゃあ食べようか。豊後、何から食べたい？」

豊後に問い合わせる山脇だったが、当の本人は辺りを見渡した。

「待つでゲス山脇様。一人足りなくないでゲスか？」

「えっ？」

その場にいた全員が辺りを見渡した。テーブルに座っているのは五人。全員いる。ただそれは佐月を除けばの話だ。

だとしても記憶がリセットされたばかりの豊後は佐月のことを知らないはずだ。一人足りない記憶なんてあるはずがない。

「豊後。もう一人つて誰のこと……？」

山脇が恐る恐る訊ねる。記憶のリセットがなくなつたのか、それともただの勘違いなのか。アーデルとしてもリセットがなくなつたのならそれに越したことはないと思つていた。山脇のためでもあるが、佐月のことを覚えている人はできるだけ多い方がいいという想いもある。

そんなこともいざ知らず、豊後は周囲の様子がおかしくなつたのを見て首を傾げた。
「あちきにもわからんでゲス。なんとなく六人いるものだと思つたでゲス」
なんとなく、という言葉が強く突き刺さる。

豊後は従来通り記憶としては覚えてはいない。
だが、豊後は確実に憶えているのだ。

頭にではない。佐月がいた事実を、身体が憶えている。

「豊後殿。この場にはちゃんと六人いるでゴザルよ」

「どこにいるでゲスか？」

無垢な問いがアーデルに向けられた。

ただ純粹な気持ちで答えてやろう。

「拙者の中に、いるでゴザル」

なんて答えてみれば。

「拙者の中に、いるでゴザル」

「私の中にもいるよ」

「わしの中にもおるぞ」

「……私の中にもいます」

「ヤー！ー！」

佐月が見ていた夢の続きを、アーデルが描いていく。
かつて隣にいた彼女のことを、一生忘れない。
だから焼肉を食べよう。

佐月の願いをなぞることこそ、彼女に対する
はなむけ餞はなむけになるから。

「エピローグ」 その墓に、弟切草をやつてはくれまいか

セミの寿命は一週間と言われている。

短い命の間に、番を見つけようと誰よりも目立ち、五月蠅うるさい声で鳴く。

鳴くだけの生涯であろうとも誰かに見つけてもらえるなら本望だと、アーデルは思う。夏が、終わりに差し掛かっていた。

今も鳴いているセミたちは、まだ番を見つけられていないのだろう。まだ見ぬ運命の人には会えることをアーデルは願っていた。

「あれ、アーレさんも行くの？」

「おー茅森殿。偶然でゴザルな」

セラフ部隊の墓場に向かおうとしたところで茅森とバッタリ会う。

佐月の墓ができるとの連絡を受けて、たまたま同じ時間に行くことになつたらしい。

ハイドロペリツシユ討伐作戦で負傷した者は全員、無事に回復した。

氷の壁を作り、自らの命を賭してどめを刺したことを称え、多くの者がその墓に訪れる予定のことだ。

さすがはショップ店員として顔が広かつただけのことはある。

同じ31Cの部隊員として、アーデルはかなり先の方の時間に充てられた。とはいえ、時

間内であればいつでも来ていいということになつてはいるので、茅森のように誰かと時間が被るということもある。

もちろん、先客もいた。山脇と、マリアと司令官。

変な組み合わせだ、とアーデルでさえも感じた。

マリアと司令官が用を終え、こちらへ向かってくる。

「神崎か、調子はどうだ?」

「ヤー。バツチリでゴザルよ」

元気いっぱいの笑顔を向けるとマリアは顔色を変えずに「それはいい」とだけ告げる。

「神崎さん。改めてあのときはごめんなさい」

意外だったのは、深々と頭を下げる司令官の方だった。

「気にすることはないでゴザルよ。司令官殿は拙者を死なせないために尽力してくれただけのこと。拙者に責める謂れはないでゴザル」

急に麻酔で眠らせてきたことを言つてはいるのだとしたら筋違いだと思つた。

何より佐月は、アーデルに生きていてほしいとこの未来を望んでいた。

だから、今を生きていることに感謝するべきだ。そこに司令官の行動も含まれている。

「そうだよ。謝るべきはあたしにだよ。危うく司令官の判断で殺されるところだつたんだからさ」

司令官は毒づいた茅森を見る。

「それについても、申し訳ないと思つてゐるわ。ごめんなさい」

「お、おう……本当に謝られると、調子狂つちやうな」

いつものように調子に乗つたところで怒られるのかと思つていたのだろう。むずがゆくなつたみたいで、茅森は頬を搔く。

「今日は特に、私を含めた司令部の作戦と判断のミスが招いた犠牲よ。佐月さんがいなかつたらもつと犠牲者が増えていた。これに関しては言い逃れできない」

司令官からしてみれば、謝ることしかできない。

セラフ部隊に所属する以上、常に命のやり取りをしているから。

こればかりは、隊員と軍の間で交わされた契約と言つてもいい。人類のために死ぬこと。それが、セラフ部隊に課せられた使命。それ以上の責任を取らせるることはできない。

だが、決してそれ以下の責任を取つてゐるわけでもなかつた。

「オレたちはもう行く。最初の佐月への祈りは済ませたからな」

二人はアーデルと茅森に背を向け、墓場を後にする。

「そうだ。神崎に一つ言わせろ」マリアが振り向いた。「弟切草を選ぶとはセンスがある」身に覚えのない称賛を贈られ、アーデルは目を見開く。

墓の前へと訪れると、弟切草が供えられていた。山脇が弟切草の花束を持つて、一輪をアーデルに手渡す。これを供えろ、ということだろうか。

「佐月が最後に弟切草つて、言つてたの。あんたのこと、よっぽど気にしてたのね」
そう言われて、供えずにはいられなかつた。

手を合わせる。何度も助けてくれたことに、感謝してもしきれなくて、とても長い時間をかけた合掌。

目を開けると、先に合掌が終わつていた茅森が口を開く。

「ところでなんで弟切草？ マリリンも言つてたけど、センスがあるって意味わかんない」「拙者も疑問に思つてたでゴザル」

似てゐるとは言わたものの、センスがあるとまで言われてしまつたら追求せざるを得ない。あのときは色が似てゐると憶測で言つてしまつたせいで誤魔化されてしまつたものの、そこまで言うのなら何か意味があつてのことなのは何も知らない茅森でもわかる。

すると、山脇はアーデルに大きく開いた目で見るのでした。

「あんた、マリアに言われてもわからなかつたの……？」
何やらとてつもなくアホな扱いをされた気がした。

「どういうことでゴザルか？」

「佐月が苦労するわけね……普通に考えてあんたならわかるでしょうに。ま、燈台下暗しか」

訊き返してみれば、山脇はため息をついた。

普通に考えたらわかる？ 燈台下暗し？

アーデルは本当に何のことか皆目見当もつかなかつた。

「ドイツ出身のあなたなら、弟切草をなんて言うかわかるでしょ」

「ヤー——ツツ!?」

「わーっ！ びっくりしたー！」

ヒントを言い渡された次の瞬間にアーデルが叫ぶと、茅森が黄色い声を発した。

「ヨハニスクラオトでゴザルか……」

だとすると、マリアの言葉にも納得がいく。

ヨハニスクラオトとは、別名「ヨハネの草」とも言われている。ヨハネとは、キリスト教における先駆者として有名なあの洗礼者ヨハネのことを指している。

マリアの故郷であるイタリアは、約八割がキリスト教の信者だ。あるいはマリアがキリスト教の信者でないにしても、あの礼儀正しさからして敬意を持つていることは間違いない。つまり、佐月の言っている弟切草とはアーデルの故郷であるドイツから連想していたもの。見えていなかつた。

「え……ってことはさ、アーラさんはマリー視点で考えるあまり日本の意味で考えていて、マリーはアーラさん視点で考えるあまりドイツの意味で語りたかったってこと?」

ふつ……ははははははははつ……！」

改めて言葉になると、悲壮感漂っていた山脇の表情が一気に弾ける。

アーデルからしてもおかしな話だと思った。道理で噛み合わないと思った。

それもこれも全部、お互いがお互いのことを考えて、すれ違つていただけだつたのだ。

「あんたたち、お互いのこと好きすぎでしょ」

山脇は笑うあまり、涙を手で拭う。

「大好きでゴザル」もう、何度も何度も言ってやろう。「大好きなんで、ゴザルよ……」

アーデルは山脇から一輪挙借し、しばらく眺める。

風が吹いて、何枚か花びらが散つた。

今さらにはなるが、墓に向かつて「さよなら」と告げる。

ねえ、事情はわかつたけどさ、結局花言葉も変わるんだよね？

茅森の問いに、今一度ドイツでの花言葉を反芻するアーデル。

幼い頃のアーデルを、佐月が助けた忍者というのは前提として、今の今までの言動と行動

その花言葉を当てはめると、胸の中がいっぱいになつていく。

「ヨハニスクラオトの花言葉は——」

教えてあげよう。

かつて生きていた、大好きだったショッピング店員のことを。

教えてあげよう。

誰よりも信じていた、あの忍者のこと。

できる限り、たくさん的人に憶えていてもらうために。

さよならヨハニス、忍バズ忍、
最後ノ七日間

E
N
D

あとがき

さよならヨハニス♪忍バズ忍、最後ノ七日間♪を手に取つていただきありがとうございました。雨孔雀と申します。ヘブバンの二次創作本としては二作目になるわけですが、半年くらい前にプロットを書いてから随分と時間が経ち、ようやく完成したという思いです。今の自分の持つ技術を最大限に用いて、全力を尽くさせてもらつた話になりました。イラストをお願いさせてもらつた竹立さんに、本としての仕掛けの希望を出して全力で付き合つてもらい、個人的に最高の本に仕上がつたと自負しています。とはいえ思いついてしまつたが故、勝手にキャラクターの最後を彩るような罪深い本ができてしましました。そんな本でも、ここで付き合つてくださつた竹立久さんおよび読んでくださつた皆さんにも謝辞を贈ります。ありがとうございました。

思えばアーマリのカプができたのが今年の四月で、今回のコミケでカプ本を出しているのが自分含め三サークルも以上もあるんですね。前回の鍵島でみやーュイ本出したときは自分しかいなかつたので仲間がいて嬉しいという気持ちがあるけども、今回もみやーュイ本がないことに悲しみも強くあります。みやーュイ本、誰か書いてくれんか……。

最後に。この本は読み返したときに解釈が変わらるような作りにしています。気が向いたらもう一度読んで物語を噛みしめてもらえると、作者冥利に尽きます。

2023年12月31日 雨孔雀

ありがとうございました!!

イラストでお邪魔しました
竹立久と申します。

このお話の世界を深める
お手伝いができたこと
とても光榮です!
ありがとうございました!

2度3度ヒ
見返したくなるように
描かせて
いただきましたので
どうぞ本文とあわせて
何度も楽しんで
いただけたら
とてもうれしいです!



—さよならヨハニス—

～忍バズ忍、最後ノ七日間～

2023年12月31日発行

発行サークル：魔女の帽子

執筆 : 雨孔雀(@amakujac)

装丁デザイン：葉木想次(@haki_souji)

イラスト : 竹立久(@bamboo_stand09)

印刷 : ちょ古っ都製本工房

→ → → → → → → → → → → → → → → →

感想等ありましたら Twitter の DM
もしくはフォームまでお願いします



